

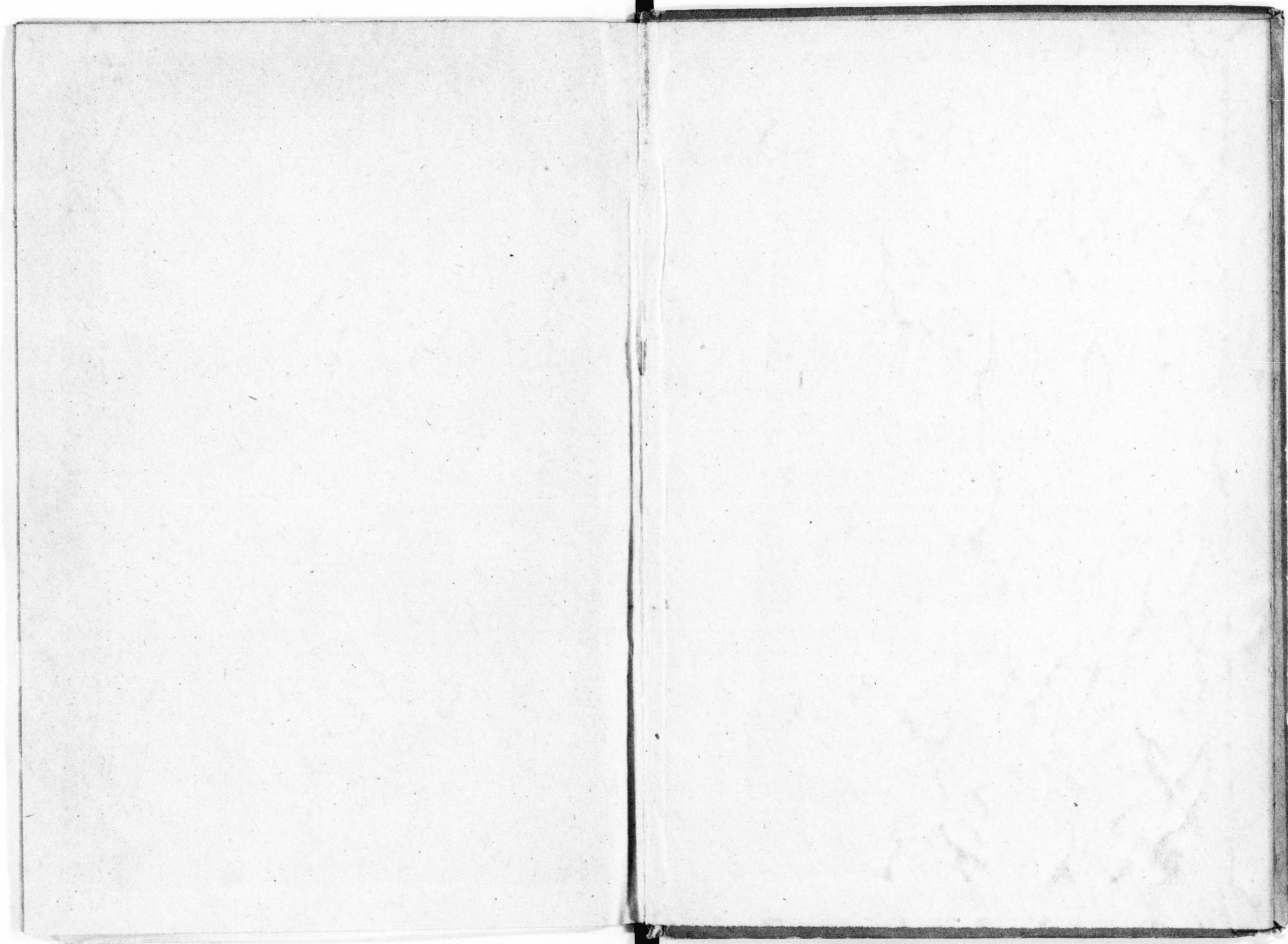
923  
a  
CN29



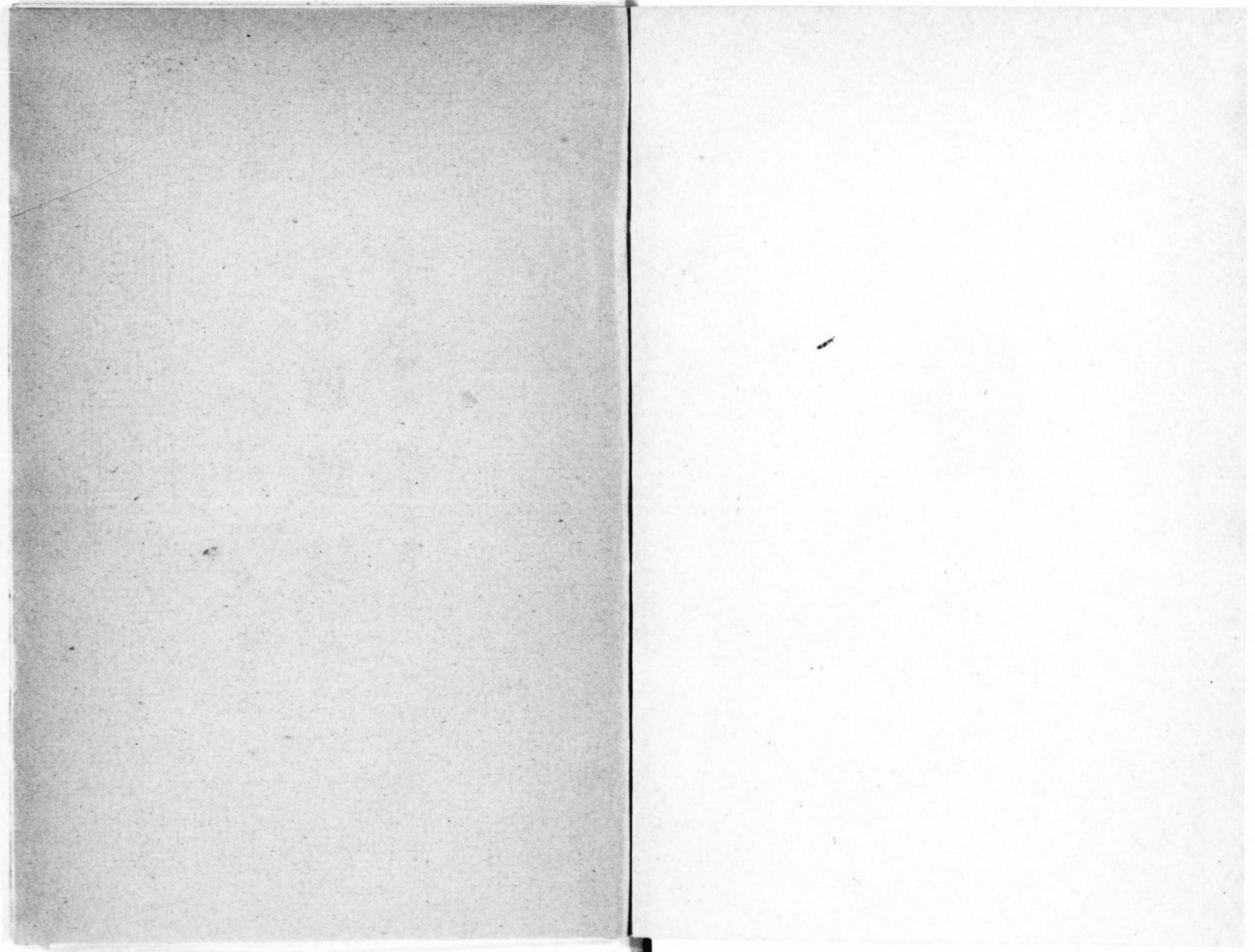
始













弓館小鰐譯 鴨下晃湖畫

新譯 西遊記 下卷

株式會社 第二書房版

5399



923

7

0129



藏書  
西  
藏  
信

前小  
藏書  
御下  
吳  
臨  
查

國立國會圖書館



22555







目次

二人悟空

- 一 賊手を逃る……………九
- 二 悟空また放逐……………一四
- 三 悟浄の大憤慨……………一九
- 四 お釋迦の鑑定……………三五

牛魔王降参

- 一 暑い火焰山……………三三
- 二 芭蕉扇の偉力……………三七
- 三 玉面女の驚き……………四四



- 四 本妻を欺いて……………頁
- 五 八戒に變装……………頁
- 六 天上の變化競べ……………七

金光寺と木仙庵

- 一 泥亀に鯰の精……………六
- 二 賊は萬聖龍王……………七〇
- 三 九頭駙馬と夫人……………七四
- 四 惚れられた三藏……………七六

黃眉魔王調伏

- 一 奇瑞の大風呂敷……………八四
- 二 胃袋でダンス……………八六
- 三 柿の糞山突破……………九一

朱紫國を救ふ

- 一 賈醫者悟空……………九六
- 二 デレデレの太歳……………九八
- 三 閨房に虱の群……………一〇〇
- 四 魔王は唐獅子……………一〇二

女郎蜘蛛

- 一 裸婦と八戒タン……………一〇八
- 二 脇の下に千の眼……………一一三

悪魔三兄弟

- 一 名器陰陽二氣瓶……………一二八
- 二 腹の中で越年……………一三三



- 三 水漬になつた八戒 ..... 一六
- 四 釋迦如來が來援 ..... 一三

白鹿と蛇女

- 一 赤ン坊徴發 ..... 一四
- 二 悟空の肝、家老の肝 ..... 一六
- 三 妖怪に騙されて ..... 一四
- 四 三藏と結婚式 ..... 一四
- 五 李天王と對決 ..... 一五〇

滅法國に入る

- 一 おしやべり女將 ..... 一五
- 二 宮中みな丸坊主 ..... 一七
- 三 強飯の誘惑 ..... 一三

- 四 三藏の贖首 ..... 一六

天竺玉華州

- 一 三王子が門弟に ..... 一七
- 二 武器を搦はる ..... 一七
- 三 老妖九頭獅子 ..... 一八
- 四 佛體は油泥棒 ..... 一八
- 五 四木星神の應援 ..... 一九

天竺二人王女

- 一 荒園に泣く姫 ..... 一九
- 二 天授の花婿様 ..... 一九
- 三 王女實は兔の怪 ..... 二〇



寇長者の家

- 一 萬僧歡迎の高札……………三〇
- 二 強盗團を腐懲……………三二
- 三 一行に殺人の嫌疑……………三三
- 四 閻魔王に頼む……………三〇

大雷音寺到着

- 一 凌雲渡の危難……………三三
- 二 庫番が賄賂強要……………三八
- 三 受難八十一度目……………三五
- 四 十四年目に歸國……………三八
- 五 皆佛菩薩に化す……………三四

新譯西遊記 下卷



寇長者の家

- 一 萬僧歡迎の高札 ..... 二〇
- 二 強盗團を膺懲 ..... 三二
- 三 一行に殺人の嫌疑 ..... 三五
- 四 閻魔王に頼む ..... 四〇

大雷音寺到着

- 一 凌雲渡の危難 ..... 三三
- 二 庫番が賄賂強要 ..... 三八
- 三 受難八十一度目 ..... 三五
- 四 十四年目に歸國 ..... 三九
- 五 皆佛菩薩に化す ..... 四四

新譯西遊記 下卷





## 人悟空

### 賊手を逃る

行くこと十數日、樹々の新緑眼に心地よき好季節とはなつたが、用意の糧食が乏しくなつたので、人も馬も飢え疲れ、景色などはてんで眼に入りません。早く人家を見つけて食を請はんものと、馬方の八戒が熊手を振つてしきりに馬を追ひ立てるけれども、一向前に進まぬ様子。先刻から業を煮やしてゐた悟空は如意棒を取り出し、ばかり尻つべたを殴りつけましたところが、馬もやけ腹になつたと見え、今度は疾風のやうに駆け出し、三藏が驚いて手綱を引いても止まらばこそ。是非なく鞍壺にしがみついてゐる中に、一氣に二十餘里を走り、やうやくのことで足をゆるめ出しました。

三藏はふり返つて弟子どもの追ひつくのを待つてゐると、道端の木蔭からばらばら躍り出した三十人ばかりの荒くれ男、手に手に得物をふり上げて三藏を取り圍んだ。

「さあ坊主、命が惜しくば路用の金を残らずここへ置いて行け。」

鈴ヶ森の白井權八なら、長いのを抜いて、面白い立ち廻りを見せるところだが、三藏にはそん



な腕がない。馬から下りてただあやまるばかり。

「路用の金は使ひ果して一文も御座いません。どうぞお情に御見逃し下さいませ。」

「馬鹿をいふな、金がなければ法衣と馬を渡して行け、四の五のいふとひねり殺すぞッ。」

事態愈々急になつて來ました。

三藏もひねり殺されるのはいやです。妄語は佛家の戒めだが、こんな時には嘘も方便、急に一計を案じて追刺どもを騙しにかかる。

「實は路用も持つてはゐますが、皆弟子どもに預けて置きました。やがてここへやつて來ますから、残らず集めてさし上げませう。どうかしばらくお待ちなすつて下さいませ。」

「さうか、ぢやちよつとの間待つてゐてやらう。」

荒縄で三藏を縛り、道端の樹にくくりつけて、一同向うの樹蔭に隠れたところへ、悟空は急ぎ足ですたすた追つかけて來た。

「ややこれは和尚様、どうなさいました？ なに、山賊に縛られて、私の來るのを待つてゐられたんですつて——兎に角あなたは逃げなさい、私があべこべに金儲けをして行きますから……」

と素早く縄を解き、馬に乗せてもと來た方に逃してやる。追刺どもはこの物音を聞きつけて走り出で、口々に罵り立ちます。

「こら、あの坊主を逃した以上は、貴様が後を引き受けるつもりだらう、さあ、早く有金をさら

け出せッ。」

「さうがやがや騒ぎなさんな、今出しますよ——はい、この通り全部で六錢五厘ありますから、これを持つていらつしやい。」

「何だ六錢五厘？ この小僧め、人を馬鹿にするな。隠すと命ごと取り上げてしまふぞ。」

「だつてそれしきやないんですよ。若しそれで不足なら、あんた方がためて置いた金を出して私に下さいよ。」

「この命知らずめ、ぬけぬけと勝手なことをいふ。面倒だからたたき殺せッ。」

五六人かかつて頭をぼかぼか棒でぶん殴つたが、平氣の平左でいい氣持さうにたたかれてゐる。悟空は追刺どもの呆れ返つてゐるのを横目に向け、悠々として耳の中から縫ひ針を取り出し、また。

「皆まん、くたびれたでせうからまあ一服しなさい。あの六錢五厘で足りないといふんなら、この針をさし上げませう。」

「こいつ、ますます人を馬鹿にしやがる。そんな針が何になるもんか。」

悟空聞きも終らず、針を一振り振ると、するする延びて鐵の棒となつたので、一同はあつ氣にとられて顔を見合せるばかり。

「どうだ驚いたか——貴様等は星のまはりが悪くて、俺に出逢つたんだ。どれこの棒をお見舞申



してやらうか。」

と進み寄つて親分らしい二人をぼかりぼかり。二人は頭の鉢を割られ、そのままぐうぐうと参つてしまつたので、子分の賊ども齒の根も合はぬやうに驚き、ばらばらになつて八方に逃げる。悟空は後を見送つてにたりとすごい笑ひをもらし、大得意になつてゐます。

八戒と悟浄は逃げて来た三蔵に行き合ひ、仔細を聞いて加勢に駆けつけて見ますと、悟空はもうとうに賊を料理してしまつてゐます。後から来た三蔵は、頭を粉碎されてゐる賊の死骸を見て例の菩提心を起し、心中に悟空の残酷を怒りましたが、自分を助けてくれたんだから、頭から叱るわけにも行かない。不機嫌な顔をして、ぶつぶつぶやきながら馬を進めて行く。

やがて五六里行つてから、一軒の民家に宿を求め、主人の老人に厚いもてなしを受けて床につきました。ところがこの家の悴といふのは父に似ぬ無頼漢で、先刻の山賊の群に入り近郷近在を荒してゐたのですが、今日旅僧をものにしようとして、あべこべに親分を打ち殺され、悲觀して歸つて來ますと、三蔵の一行が何も知らず自分の家に泊つてゐるのが分つたから大喜び。

早速、仲間の泥的を呼び集めて會議を開きました。

「おい、先刻の四人が俺の家へ泊つたのは天の與へ、ぶつた斬つて親分の髑髏をとつてやらうぢやねえか。」

「それはうまい、だがあの猿みたいな坊主は、ちと手強いぜ。」

「なあに、みんな高懸で寝てるんだ、寢首をかくんだから大丈夫だよ。」

「さうか、ぢやアやつつけよう。」

一同刀の目釘をしめしたりして寢首取りの支度にかかる。三蔵等の命は、まさに風前の燈し火同然です。

子を思ふ親心は古今東西皆同じこと、主人の老翁は、悴が五日も歸つて來ぬので、またどこぞへ行つて悪いことをしてゐるのだらう。いかなる前世の酬いであんな不良な子が生れ、親に心配をかけることかと打ち案じつつ、深更に至るまで床の中で輾轉してゐると、窓の外で何やら人の話し聲がします。

由來山賊なんてえ者は、ひそひそ話のつもりでも相當大聲を出すものと見えて、寢首かきの密談が手に取るやうに聞えます。さてこそ一大事、折角善根を施すつもりで、とめて上げたのに、その宿賃に首をもらふことになつちや何にもならん。一刻も早く落延びさせることにしかすと、三蔵等の寢間に行つて急を告げました。

「和尚様方大變です。いま外で悴と山賊仲間が、殴り込みの相談をしてゐますから、早く裏門からお逃げなさい。さあ早く早く。」

三蔵はこれ聞いて驚いて家を飛び出したので、事件好きの悟空や寢入りばなの八戒悟浄も、



仕方がないから續いて逃げ出し、三藏を馬に乗せて一目散に西へ走る。

山賊どもはそんなことは知らないから、太功記十段目の光秀もどきに抜き足さし足癩ひ寄り、さつと寝間の扉を開けて斬り込んだが、四人はすでに薬抜けのから、

「や……これは空つぽか、しなしたり！」

間抜けな薬詢よろしく、あつちをうろろう、こつちをうろろう、漸く裏門の開いてゐるのを見つけて「それ逃がすな」とばかり、追跡に向ひました。

## 二 悟空また放逐

三藏たちも懸命に走つたが、地理に明るいだけ山賊の方の足が早く、たちまち一二町後に追つて来たから、三藏は氣が氣ぢやありません。

「もう追ひつかれる——悟空何としたらよからうの。」

「御心配遊ばすな、私が引つ返してやつつけて参ります。」

「さうしてくれ、しかし決して賊の命をとつちやならんぞ。」

師匠の言葉が耳に入つたかどうだか、悟空は引つ返して行つて、賊群の中に躍り込み、如意棒を揮つて當るを幸ひ、びしやりばたり。見る間に二十餘人を殴り倒して、まだ物足らないやうな顔。

「おい、そこで死にかかつてゐる奴、俺たちが泊つた家の悴はどいつだッ？」

「はい、あの黄色な着物のがさうでございます。」

悟空かくと聞いてその刀を奪ひ、首を打ち落して片手にぶら下げ、大威張りで一行のゐるところへ歸つて来た。

「いやはや脆い奴どもで、みんなやつつけて参りました。和尚様、これは昨夕の家の悴ですよ、どうです、憎らしい面をしてゐるぢや御座いませんか。」

ちやうどフット・ポールでもするやうに、ボンと蹴飛ばすと、三藏の足もとにころころ。悟空は賞められるだらうと思つて、無邪氣にこんなことをしたんですが、三藏の御機嫌甚だなめです。

「お前は何といふことをする。昨日二人殺したのさへ怪しからんのに、いやしくも恩人の子の首を斬つて来るとは、どうしたものだ。そんな無法者はもう一時も弟子にして置けん。」

「だつてそりや無理ですよ。私がやつつけなければ、和尚様が殺されてしまふぢやありませんか。」

「いや成らん、どこへなりと早々行つてしまへ。今お前を罰してやるから……」

久し振りでムニヤムニヤ緊箍呪を唱へると、悟空は頭をかかへて七轉八倒の苦しみ。

「痛い痛い、和尚様堪忍して下さい、言譯したいことが御座います。」

「何といつても駄目だ、お前のやうな殺人鬼はゆるすことは相成らん。」



と、いつかな呪文を止めないので、悟空の顔は眞つ赤に腫れ上り、まるで熟し切つた柿みたい。「歸りますから、どうか呪文を止めて下さい、止めて下さい。」  
哀れなるかな孫悟空、わびの言葉も聞かれねば、仕方なく雲に乗り、行く方知らずなりにけり。

勘當を受けた悟空は今後の身の振り方について全く途方にくれてしまった。これから、この華果山へ歸つて行つたら、手下の猿どもに笑はれるだらうし、さればといつて師匠へも一度詫びて見たところが、さつきの劍幕ぢやとても歸參がかなひさうにない。さて何としたらよからうなど、しばし思案にけれけるが、矢張りいつも可愛がつて下さる観音様に、訴願して見る外はないと心をきめ、雲を早めて南海普陀落迦山に参りました。

観音菩薩の御前に出ると、悲しさ、くやしさが一度に胸に込み上げて来て床の上に泣き倒れたまま大粒の涙をばたばたこぼしてゐるばかり。

「おお悟空、どう致した。さう泣いてばかりゐては仕方がない、何が悲しいのか話して御覽。」  
善財童子に命じて、たすけ起させ、いろいろといたはり慰められる。悟空やうやうわれに返つて、泣きじやくりながら、三藏に追はれた一條を物語ります。

「私が一生懸命に和尚様のためを思ひ、身を粉にして盡してゐますのに、それを考へずに私を追ひ拂ふとは、あんまりひどいぢや御座いませんか。」

「いやさうではない。お前は神通力のある身で、なぜ無暗に山賊を殺しなどするのぢや。三藏は人命を重んずる慈悲心から、お前の仕事を怒つたので、公平にいつてお前の方がよろしくない。」  
「だつて、少しくらゐ悪いことがあつたところが、これまでの手柄を忘れて勘當するといふのはひど過ぎます。私はもうあんな人に盡すのはいやになつちまいましたから、どうか頭の金輪を外して、國へ歸して下さいまし。」

「さう、短氣を起すものではない。それにわしは釋迦如來から、緊箍呪を教はつてはあるが、外す方のまじなひは授かつてゐないのぢや——待て待て、今三藏の行末がどうなるかを考へて見て、その上でお前の身の振り方を取り圖らつてやらう。」

と蓮臺の上に登つて瞑目端坐し給ひ、精神統一をして、世界の端から端まで御覽になる。  
「ふふう、やがて三藏に大難がふりかかつて、お前をいる時が来るから、それまでここに待つてをれ。その時、わしがよく三藏にいひ含めてやるから……」

日本にもあるやうな山かん婆あや山かん行者の豫言と違つて、観音様のは間違ひつこなし。悟空もこれを信じて、叔母さんか姉さんの家にも厄介になつてゐるやうなつもりで、普陀落迦山に居候をきめ込んでゐます。



一方悟空と別れた一行は、五十里あまり西に進みましたが、飯も食はずに夜中から歩まづめですから、とても腹がすいてたまらない。八戒は食糧徴集の命を受けて出かけましたけれども、いつまで待つても歸つて来ず、續いて水を求めに行つた悟淨も、どうしたものかなかなか歸つて来ません。

三藏すき腹をかかへて、獨りぼつねんと待ち暮してゐるところへ、かたはらの藪がさがさいはせて、ひよつくり水筒すゐづゝを持つて現れた一人の男、よく見れば紛まじふ方なき孫悟空です。

「和尚様、水を持つて参りましたから召し上つてゐて下さいませ。その間に何か食ふ物を見つけて参ります。」

「退ひざりれ退れ、お前はたつた今勘當されたばかりなのに、どの面さげて歸つて来た！ わしは死んでもお前の水などは飲みませんぞッ。」

「へへへへ、あなたは偉さうにおつしやいますが、私をおつれにならんと、とても天竺てんたくに行けませんぜ。」

「無禮を申すな、天竺に行けても行けなくても、お前の知つたことぢやない。とつとつ、ここを立ち歸れッ！」

三藏がはげしく叱りつけると、悟空は顔を眞つ赤にして激怒した。

「何だこの糞坊主！ よくもおれを侮辱したな、思ひ知れッ。」

と、いひさま鐵棒を振り上げて、三藏の背中をぼかりぶん殴つたからたまらん。うんとその場ばに悶絶したのを見済まし、悟空は荷物をおつ拂つて雲に跨がり、どこともなく姿をくらましてしまひました。

### 三 悟淨の大憤慨

八戒と悟淨は、やうやうのことで、民家を捜し當て、飯と水をもらつて元のところへ歸つて見ると、三藏は地べたに倒れて氣絶し、そのかたはらで、白馬はくばが悲しさうにいなないてゐるから驚きました。

「やや、これは大變、荷物もなくなつてゐる——和尚様、どうなさいました、和尚様ア。」

兩人で背中をさすつたり、水を飲ませたりしていろいろ介抱するうち、三藏は漸く息吹き返して苦しげな聲。

「おお八戒に悟淨か、よく歸つてくれた。今のさき悟空が来たので叱りつけてやると、いきなりあの棒でわしを殴つたのぢや。」

「何ですつて、あの猿がそんな亂暴をしたんですか。宜しう御度います、私が行つて懲らしめた上、荷物を取り返して参りませう。」

八戒大いにいきり立つて出かけようとしたが、どうもこの男にこの大役は出来さうもない。



「いや、八戒はわしを何處ぞの民家に連れて行つて、介抱してゐてくれ——悟淨や、お前は一つ悟空を捜し出して、荷物を取り返して来てくれないか。若し返さないやうだつたら、観音菩薩にお願ひして見る。決して彼奴と喧嘩をしてはならんぞよ。」

悟淨は命をうけて雲にうち乗り、三晝夜かかつて華果山に到着。すぐ水簾洞すいれんどうに行つて見ると折しも悟空は高い岩の上に坐り、家來の猿どもを集めて、得意然と一通の書面を讀み聞かせてゐます。聞けばそれは唐の太宗皇帝たいていこうていから、三藏に賜はつた旅行免狀なので、悟淨はたまりかねて、怒鳴りつけた。

「勿體ないことをするな。お前はこんなところで旅行免狀を讀んで、どうするつもりだ？」

突然の侵入者に一同驚いて立ち上つたが、悟空は騒がず、はつたと悟淨を睨みつけて叱咤する。

「一體貴様は何者だ、誰の許しを受けてここに來たのだッ。」

全く誰だか知らん様子なので、悟淨、心中に考へた。彼奴め何か譯でもあつて、家來の手前をつくらふため、わざと知らん顔をするのだらう。これは大に持ち上げて置いて、荷物を返してもらふにしかすと、腰を低くして岩の前に進みより、いと丁寧にお辭儀をしました。

「とんだ失禮を申し上げて相済みませんでした。實は私は三藏法師に頼まれて來たんですが、これから歸つて一緒に天竺へ行つていただきたいのです。若しまた一緒に行くのがおいやなら、どうぞその荷物を私に返して下さいませんか。」

「はははははは、この荷物を返せといふのは旅行免狀がほしいからだらう。それなら心配するな、もう三藏法師と一緒に明日天竺へ出かけるやうちやんと支度がしてある。嘘だと思ふならその支度を見せてやらう——これよ、三藏法師をここへお連れ申して來い。」

手下がそのいひつけによつて、岩蔭から請じ出して來たのを見れば、あら不思議や、三藏はじめ八戒悟淨それに白馬までちゃんと揃つてゐます。

何しろ自分の外にもう一人自分が出來たんだから、これは誰だつて驚きませう。「やあ、悟淨君——」ともいへず、眼をばちくりしながら、しばしはあつ氣にとられてゐたが、いきなり寶杖ほうじょうを振り上げるや、飛びかかつて寶物の自分をばかり。きやーつと叫んでその場に往生したのを見ると、豈いかはからんや、それは一匹の大猿です。

この突然の暴行に悟空は猛然として憤り、手下の猿とともに悟淨を取つかまへようと群がrikかかつて來た。悟淨身を翻へして洞外に走り出で雲に乗つて逃げ出しましたが、悟空はどうした譯か敢て長追ひせず、別に變装の上手な猿を變らせて、新らしく悟淨をこしらへ、ひたすら天竺遠征の準備に取りかかる。

悟淨はこの次第を觀音様に訴へて、何分の御助力を仰がうものと、急いで南海普陀落迦山にやつて來て、うやうやしく菩薩に一禮した後、ひよいと頭を上げると、こはそも如何に、悟空の奴、何食はぬ顔をして、菩薩の側にちよこなんと坐り込んでゐるから、憤慨しました。



悟淨がか一つとなつて、物をもいはずに悟空に打つてかかりましたが、悟空は手向はうともせず、小さくなつて観音様のうしろに隠れる。

「これこれ悟淨、靜かに致せ。お前はなぜだしぬけに悟空を打たうとするのぢや、氣を落着けて譯をいつたがう。」

菩薩にとめられた悟淨は、突つ立つたまませかせかと、悟空が三藏を半死半生の目に會はせて逐電したことから、水簾洞で贖物をこしらへてゐる一條を物語りました。

「……ですから私がこのことをお告げしようと思つて參つたんですが、奴早くも勦斗雲で私より先きに來てゐるんです。きつとうまいことを申し上げて、自分の罪をぬり隠したんで御座いませう——」

「いいや、そんなことはない。悟空は四日前にここへ來てから一刻もわしのそばを離れないのである。それがどうして三藏を殴つたり、偽物をこしらへたりすることが出來よう。」

「へいえ？ ですが私は確かに水簾洞で悟空に會つて來ました。私は決して嘘を申し上げて觀音様をだますやうなことは致しません。」

「ふふむ左様か——これから悟空と一緒に華果山に參つて見たがいい。さうしたら、譯がわかるであらう。」

悟空も不思議に思つたから、觀音様にお暇をいただき、悟淨と連れ立つて、水簾洞に飛んで來て見ると、果せるかな、もう一人の悟空が岩の上に小猿を集めて酒もりをしてゐる。その顔形、衣裳の類から持つてゐる鐵棒まで寸分自分と違はぬ上、如何にも洞の主人然とかまへて、威張りくさつてゐるのですから、本物の悟空大憤慨です。

「この詐欺師め、よくも俺の姿になつて、水簾洞を横領しやがつたな。」

と、如意棒で打つてかかると、贖物も同じく鐵棒を振つて立ち向ふ。家來どもは、急に主人が二人になつたので、どつちを助けたらいいかと、ただまごまごするばかり。悟淨もほん物に手傳はうとは思つたが、どつちがどつちだか見分けがつかなくなつて、同じくウロウロ。これを見た兩人の悟空は、

「お前、早く和尚様のところへ歸つて、このことを告げてくれ。俺たちはこれから觀音菩薩のところへ行つて、いせかほんとかを鑑定していただくから……」

と叫んで、空中に戦ひながら南海を差して行くので、悟淨も仕方なく、三藏のゐる方に歸つて行きます。

普陀落迦山では空中に時ならぬ劍戟の音が聞えるので、菩薩はお弟子たちとともに表へ出て御覽になると、悟空と悟空が火花を散らして打ち合つてゐます。さすがの觀音菩薩も、これには面喰はざるを得ません。



「おいおい、どつちがほんたうの悟空ぢや？ 兎に角喧嘩はやめにして、事の次第を申したがい  
よ。」

かう仰せられたが、二人は依然争ひをつづけながら、各々自分が本物なることを主張します。  
「こいつが私の姿になつて悪事を働いてゐるんです。どうかあなたの御眼力で、にせ物を見あら  
はして下さい。」

「いいや、こいつの方が場違ひで、私は正真正正銘まがひなしの孫悟空です。」

猿面冠者の本場争ひがはじまつたが、菩薩の慧眼を以てしても、俄に眞偽の鑑別が出来ない。  
惠岸、善財の兩人に御相談になると、例の緊箍呪を念じて御覧になれば、わかるで御座らうとの  
ことに、これこそ妙案なんめりと、口の中でムニヤムニヤお唱へになる。ところが、兩人とも痛  
い痛いと呼んでころげ廻るので、仕方なく呪文をやめると、立ち上つてまた戦ひをはじめ、全く  
手がつけられません。

「これはわしにもわからない——お前たちは昔天上界を騒がせたことがあるから、天國へ行つて  
鑑定してもらへ。」

菩薩もたうとう匙をお投げになつたので、二人は雲に乗つて打ち合ひながら、天上界は南天門  
へと飛んで行く。

#### 四 お釋迦の鑑定

天上界の神々たちも、何から何まですつかり同じな二人の悟空が、喧嘩しながらかけ込んで來  
たのには驚きました。しかも二人は「私の方が本物です。」「いや私が悟空に違ひありません。」と  
同じやうなことをいふので、仕方なく玉帝にこのことを申し上げると、「照魔鏡で照したら本相  
が分るであらう」との御沙汰。

そこでサーチ・ライト主任の托塔天王が、機械をもち出し、強烈な光線を浴びせかけて、鏡に  
うつして見ましたが、矢張り同じ姿が二つうつるのみで、全く眞偽の鑑別がつかない。玉帝も手  
のつけやうがないから、二人を御殿の外に追つ拂ひますと、

「ぢや今度は和尚様のところへ行つて、アンバイヤアをしてもらはう。」

「いいとも、どこへだつて行つてやらア。」

相變らず戦ひを續けながら、三藏のゐる方へ飛んで行きます。

これより先き悟淨は師匠のもとへ歸つて來て、華果山における一部始終を詳細に報告したので、  
三藏等は狐にでもつままれたやうな氣持ちでゐる時、空中でおめき叫ぶ聲が聞えて悟空と悟空が  
やつて來た。見れば悟淨の報告通り寸分違はぬ姿なのに、三藏もあきれ返つて眺めてゐたが、や  
がて心に打ちうなづき緊箍呪を唱へました。けれども普陀落迦山における前例の通り、雙方同じ



やうに苦しむので、どうにも判定がつきません。やむなく呪文をやめると二人は、

「ここも駄目だから閻魔の廳に出頭して、大王のさばきを受けよう。」

「よからう、久し振りで地獄見物もしやれてゐるわい。」

と、のん気なやつ等で、喧嘩に旅のつれづれを慰めながら、十萬億土へと向つて行く。

どつちが本物の悟空だかわからないが、要するに二人とも地獄へ行つたんだから、華果山が留守になつてゐるのは必定。こはい奴がゐないのに思ひついて、八戒は例の偉がりをはじめ。

「おい悟浄、お前も意氣地がないぢやないか。折角水簾洞に行きながら、なぜ荷物を取り返して来なかつたんだい？」

「だつて、俺も尋ねはしたんだが、瀧があるばかりで、どこにも荷物が見つからなかつたんだよ。」

「へん、だからお前は間抜けだといふんだ。あの瀧の中に洞穴があつて、そこに隠してあるんだよ。俺が出かけて取り返して来て見せるから、待つてゐな。」

三藏もこれを許したので、八戒は主人のゐぬ間の空巢狙ひにと出かけます。

一方、二人悟空は、風雲をまき起しつゝ十萬億土へ到着すると、數百の赤鬼青鬼は皆恐れをのいてこのおもむきを閻魔大王に奏上する。大王はさすがに騒がず、悠然と玄關に立ち出でて大聲で呼びかけます。

「悟空さん、騒々しいぢやがあせんか。人の家の前に来て、喧嘩なんかしてゐちや困りますね。」

「そのことで君に頼みに来たんだよ。この野郎が俺の姿に化けてゐるので、閉口してゐるんだ。」

早く此奴の魂を奪つて、同じ者が世の中に二人ゐなくなるやうにしてくれないか。」

二人とも同じ聲で同じことを頼むので、大王も少々面喰ひ、地藏菩薩や書記官長等の大官連をよんで、閻魔帳の檢閲をして見たが、どこにもせ、悟空の名が載つてゐない。

「駄目ですよ。うちの帳簿にも登録洩れになつてゐるから、どつちを亡者にしたらいいかわかりませんね。これはやつぱり雷音寺の釋迦如來へ行つて、判決してもらひなさい。」

「なあんだ、閻魔の廳でも俺たちの戸籍がわからんのか——ぢやアこれから天竺へ出かけるとうるか。」

兩人一齊に叫びながら、またも喧嘩をしては走り、走つては喧嘩を續けつゝ、西天雷音寺へと向ひました。

折しも釋迦如來には、四大菩薩、八大金剛、五百羅漢、三千揭諦以下比丘尼、比尼僧、優婆塞、優婆夷などの弟子たちを集めて、お説教の眞つ最中です。

釋迦如來が妙なるお聲で諄々と説かれる、崇高深遠なる教義に、一同耳をすまして聞き入つてゐる時、賢と本物の兩悟空が、空中をおめき叫びながらやつて来た。

「皆の者、あれを見よ。お前たちは皆一つ心なのに、あそこでは二つの心が争ひを致してをる。」



と早速に實例を引いて説教を進められるところへ、兩悟空は雲をおりて来て如來の前に低頭平身、これまでのことを細かに物語つて訴願します。

「——かういふわけで御座いますから、どうか如來様のお力で、私どもの正邪黑白を明かにして下さいませ。」

弟子たちの目には、全くどつちがどつちだか分らないので、あつげに取られて眺めてゐましたが、釋迦如來にはちやんと真相が分つてゐる。咳一咳してやをらそのいはれを、説き出さうとなさつたところへ、南海の觀音菩薩が何か急がしげに雲に乗つて御來着、すぐ如來の前においでになつて合掌禮拜されます。

「おお觀音尊者か、ちやうどよいところへ參つた——尊者はこの二人が、どちらが本物の悟空か見分けがつくかどうかどうぢやな。」

「いや實は私もその事で推參致したのでございます。先日二人が普陀落迦山に參りましたけれども、どうしても鑑定しかねましたから、如來にお告げしようと思つて參りましたので……」

「はははははは、尊者は法力廣大だが、まだ天地萬物を知つてゐても、萬物の種類を知らんぢや。」

「恐れ入りました。どうかその種類を教へていただきたく御座います。」

如來は蓮臺の上に坐り直られて、分類學の講演に取りかかると、觀音菩薩をはじめ、満座の佛

たちは、中にノートを取り出した者などもあつて、靜坐傾聽してゐる。

「そもそも萬物の種類を大別してこれを五仙五蟲となす。五仙は即ち天地神人鬼、五蟲は即ち甲鱗毛羽昆である。この五仙五蟲のいづれにも屬せぬものに、四猴混世菩薩と名づける中間の種類があつて、そのうちに六耳獼猴といふのがある。よく音を聞き理を察し、前後のことを察知する能力をもつてゐるが、今、にせ悟空を見ると形も聲も本物と全く同じなのは、必ず、六耳獼猴の變化に相違ないと思ふ——」

如來様なかなか動物學のことにもお詳しい。悟空に化けた猿は、すつかり自分の本身を説き明かされたので心中大に恐れをのき、こそこそ、その座を逃げ出さうとする。お弟子たちは悟つて、あたりを取りまかうとすると、急に蜜蜂に變じ空中に飛び上りましたが、如來敢て騒ぎ給はず、持つてゐた「お釋迦の鐵鉢」をひよいと投げ上げると、蜂はそのなかに蔽はれて、ぱたり地べたへ落つこちました。

「はははははは、逃げようとして逃げられるものか——さあ悟空、その鉢を上げて見よ。」

仰せに従ひソーツと鉢を取り上げて見ると、たうとう本相を現して躍り出たのは、耳が六つもある途方もない大猿。またも逃げようとするのを、悟空如意棒でボカリくらはせたので、血へどを吐いてその場にギュー。後世四猴のうちこの一 종류が絶えたのは、これがためだといふ話ですが、絶えて幸ひ、今時こんなのがゐて、總理大臣が二人出來たり、賈の亭主が現れて美人の奥さ



んを失敬したりしては、物騒でたまりません。

目出度く寶物も退治したので、如來は悟空を差招いて仰せられます。

「これでお前も安心したであらう。早く三藏のもとへ歸り、一緒に經文を取りに参るやうに致せ。」  
「どうも有難う御座いました。ですが私は勘當を受けてゐるんですから、どうか、頭の金輪を外していただいて俗人に戻り、後世安樂に暮したう御座います。」

「いや、そんな怠け心を出しては相成らん。わしが觀音尊者に頼んで、お前を送らせるから、三藏に叱られることなど心配致すな。」

そこで菩薩は悟空を伴ひ、如來に別れを告げて、三藏が傷の保養をしてゐる家に行きますと、もうあらかた痛みのはつた三藏は、いそいそと出迎へました。

「これはこれは菩薩には、何の御用でおいでになりました？」

「悟空をつれて参つたのぢや。先日お前を殴り倒したのは、六耳獼猴の化けたので眞の悟空ではない。如來はその猿を退治になり、わしに詣びを頼んでよこされたから、悟空の勘當を許して天竺へ連れて参れ。」

「畏まりました。おお悟空か、これからまた宜しく頼むぞ。」  
滞りなく詣びがかなひ、悟空も大喜びです。

この時、東の方から吹いて來た一陣の風とともに、八戒は荷物を背負つて、大得意で歸つて來ました。

「お師匠様ただ今。華果山に行つて見たら、悟淨のいふ通り三人の寶物がすまし込んで納まつておましたよ。癩にさわるからばかばか殴り殺してやりましたが、正體を見るとみんな猿が化けたのなんです。それから洞穴の中に入つて、この通り、荷物も取り返して参りました。なあにみんな弱蟲でしてね……」

「それは大出來だつた、御苦勞々々々——賢の悟空も釋迦如來が退治て下さり、先刻、觀音菩薩が悟空をお連れになつて、ここにいらしつてゐる。早く家に入つて御挨拶申せ。」

「おや、さうでしたか、それは萬歳だ——」

一同、主人の婆さんが、三藏の全快祝ひにと拵へてくれた茶菓子を食べながら、八戒の手柄話、悟空の喧嘩話に座が賑ふ。やがて菩薩は別れを告げて、南海へお歸りになつたので、三藏等四人も旅装を整へ、婆さんに厚く禮をした上、また西に向つて出立しました。



## 牛魔王降参

### 一 暑い火焰山

行く程に夏も過ぎて、秋の季節に入るべき筈なのですが、不思議にも氣候が逆になり、日増しに暑さがひどくなつて来る。殊に脂肪が多くて暑がり屋の八戒などは、フーフー鼻から息をついて苦しがる程の暑氣。

「兄貴、何て暑いんだらうね。俺はもう苦しく歩けない、どつかに休むところがないかしら。」

「弱いことをいふな。しかし全く暑いことは暑いや、一つ家を見つけたら休むことにしよう。」

「そうれ見ろ、兄貴だつて矢ッ張り閉口してゐるぢやないか——何でもいつか聞いた話によると、西の方に太陽の落つる國といふのがあつて、海も川もぐだぐだ煮立つから、その國の人は湯饅いらずだといふことだつたが、大方そこへ近づいたのかも知れんぜ。おお暑い暑い。」

「馬鹿なことをいふな、海や川が煮立つやうな國に、人間の住んでゐられる理窟がないぢやないか。」

「さうかね、さういへばさうだなあ。」

八戒と悟空が汗だくくながら無駄話をして行く。三蔵もこたへられなくなつて、一軒の民家

を見つけるや、その老主人に休ませてもらふやうに頼みますと、ねんごろに招じ入れて、冷やし瓜やところ天などを出し、いろいろともてなしてくれませう。

「いや、さうお構ひ下さるな。時に今はもう秋の時節ですので、どうしてかう暑いのでせうな。」

「それはこの近所に火焰山といふ山があるためで、春夏秋冬いつでもこの通りなのです。」

「ほう、してその火焰山はどの方向に當りますか。」

「それはここから六十里ばかり西で、天竺へ行く街道に當つてゐます。百里四方といふものは悉く火焰で、草もなければ木もありませんよ。」

「さうですか、それは困つたことになつたわい。」

これでは天竺へ行けさうがないと思ひ、三蔵大いに悲觀し出すと、悟空は傍らから口を出して話を引き取る。

「ですが御主人、草も生えないといふのに、この邊ではどうして、命のかてになる穀物の植ゑつけをするんです？」

「その時には、鐵扇といふ仙人から芭蕉扇を借りてあふぐんですよ。するとその風で火が消えるし、雨も降り出しますが、その仙人、なかなかケチでしてね。澤山お禮を持つて行かないと、容易に貸してくれませんので、閉口してゐます。」

これを聞いて悟空は考へた。よし一番その扇をかつ拂つて来てやらう、さうすれば火を消して、



山も無事に越えられるし、使つた後でこの邊の農民にくれてやれば、一種の社會政策にもなる——  
「一體その仙人はどこに住んでゐるんです。私は出かけて行つて借りて来ようと思ふんですが……」  
「それもいいが急には駄目ですよ。何しろここから千五百里も南の、翠雲山芭蕉洞といふところ  
ですからね。」

「たつた千五百里、それならわけはないや——和尚様、ちよつと一走り行つて参ります。」  
いふが早いか雲に乗つて飛び出したので、主人ははじめて飛行機を見た片田舎の人のやうに、  
ぼかんと口をあいて後を眺めてゐます。

悟空は、またたく間に翠雲山に着いて、あちこち捜してゐると、折りよく一人の木樵に行き會  
ひました。

「あの、ちよつと伺ひますが、鐵扇仙人のゐる芭蕉洞といふのはどこでせうか。」

「芭蕉洞ならすぐあそこですが、鐵扇仙人といふのはゐませんよ。あすこは今、女主人で羅刹女  
といひ、牛魔王のおかみさんです。」

牛魔王の嫌と聞いて悟空はたと當惑した。何しろ先年その養子の紅孩兒をいちめてたうとう  
降参させたことがあるし、先達ては解陽山で魔王の弟如意真仙から落胎泉を強奪してゐる。斯く  
俺に恨みがかずかず御座つては、たやすく寶物を貸してくれまいと思つたが、ちやといつてこれ

がなくては天竺へ行く道を開くことが出来ない。兎にも角にも一つ當つて見て、若しいけなかつ  
たらまた何とか思案しようと、芭蕉洞に行つて懇懇に取り次ぎを頼みます。

「私は天竺にお經を取りに参る孫悟空といふものですが、火焰山を通るについて芭蕉扇を拜借に  
来たんです。どうぞ御主人に宜しくお取り次ぎを願ひます。」

この時、羅刹女は長火鉢のわきに立て膝かなんかして、女だてらに晝酒をきこし召してゐまし  
たが、取り次ぎから孫悟空來訪の趣を聞くと、猛然として憤り、二振りの寶劍をひつさげ、玄關  
先に躍り出して來た。

「悟空の野郎、何しに來やがつた？ さあ首を渡すか、降参するか。」

晝酒で充血した眼を一層血走らせて罵りましたが、悟空は腰を低くしてにやにや作り笑ひ。

「姉さん、私が御挨拶にあがつたのに、どうしてそんなに腹をお立てになるんですか。」

「なに、姉さんだつて？ あたしはそんな山猿を弟に持つた覚えがないよッ。」

「だつて私は牛魔王君と兄弟分の杯をした仲ですもの、あんたを姉さんと呼ぶのが、當り前ぢ  
やありませんか、ええもし姉さんえ——」

「いまいましい、さう姉さん姉さんといつておくれでない。若しそれ程のよしみがあるんなら、  
なぜ悴の紅孩兒を虐めたのだい？ それにづうづうしく芭蕉扇を貸してくれなんて、何のつげに  
貸してやるもんか。」



「姉さん、それやあんた思ひ違ひですよ。紅孩兒君は私の師匠をとつて食はうとしたのを、観音様が御濟度になつて、今は善財童子といふ立派なお弟子になつてゐるぢやありませんか。恨みごとより私はお禮をいつてもらひたいくらいです。ねえ親愛なる姉君よ！」  
にじり寄つて袖をとらうとしたが、羅刹女は柳眉をさか立ててその手を拂ひ、  
「何をするんだい、そのお禮にこれでも食ひやがれ！」  
いきなり劍を抜いて斬つてかかる。悟空ひらりと體をかはしながら、如意棒でハツシと受けとめ、

「さては俺を斬る氣だな。かうなつたら腕づくだ、いやが應でも借りずにあ置かねえ。」

と裏詞よろしくあつて立ち向ふ。羅刹女もなかなかのしれ者、悟空の棒に對し負けず劣らず、夕刻まで戦つたが、さすがは女性、だんだん疲れが出て來たので、ひそかに腰の芭蕉扇を取り出し、さつと煽けばこはそも如何に――

忽ち秒速七十メートル以上の颯風が起り、悟空の身體は木の葉のやうになつて空中に巻き上げられ、それから非常な勢ひで吹き飛ばされること約一晩。明け方近くなつてどしんとある山の頂に吹き落され、そのままそこに氣絶してしまつた。

何しろ一晩も人間を飛ばすといふのは大した風、悟空は人事不省になつて暫らくぶつ倒れてゐたが、やがて咽喉を濕した夜露でうんと息吹き返して見ると、何だか四邊の景色に見覚えがある。

心を落着けてよく考へて見れば、それもことわり、かつて黃風魔王を退治する時、靈吉菩薩に救ひを求めに來た小須彌山の頂上です。

## 二 芭蕉扇の偉力

小須彌山まで吹き飛ばされて來たのに氣づくとも、さすが物に動ぜぬ悟空も、心から驚歎した。「へーえ、いつの間にか夜が明けてゐやがる。さては一晩中吹き飛ばされたんだな、なんて恐ろしい力のある團扇だらう。火焰山からここまで何里あるのか、兎に角、靈吉菩薩をたづねて聞いて見るとしよう。」

獨りごちながら山をおりて禪院を訪問する。靈吉はかねて悟空に好意を寄せてゐますから、天竺の歸りに立ち寄つてくれたのだらうと思ひ、喜んで出迎へます。

「やあ暫く御機嫌よう。いよいよお經が手に入つたと見えますね。」

「なに、さうぢやないんですよ。實はその飛んだ目に會ひましてねえ。」

「え、それぢやどうしたといふんですか。」

「いや全くお話にも何にもならない始末で、羅刹女に芭蕉扇で煽がれると、他愛もなくここまで飛ばされて來たんで……」

頭かきかき火焰山の失敗談を話すと、菩薩は笑ひながらいふ。



「それや文字通り飛んだ目だつた。芭蕉扇にかかつちや誰だつて敵ひつこはない。一體あれは一煽ぎで、人間を八萬四千里も吹き飛ばすといふ偉い代物ですが、君が五千里だけでここで止つたのは、雲を留める力があつたからで、まだよかつた方ですよ。」

「ぢや、とても和尚様をお連れして、あの山を越えることは出来ませんね。困つたことになつたなあ——何かいい考へはないでせうか。」

「さあ——あります、あります。いつか釋迦如來から頂戴した飛龍杖は黄風魔王を退治する時使つたが、定風丹の方はまだ使はずにゐます。これを身につけてゐれば、煽がれても決して飛ぶやうなことはないから、持つて行つてあの阿魔と戦つて見なさい。」

と秘藏の定風丹といふ丸薬をくれる。見れば鼻糞を丸めたやうなものだが、どんな風でも止めるといふんだから、これを二十日頃にも用ひたら大したもの。悟空は押し戴いてしつかり襟の間に縫ひ込み、觔斗雲に乗つて間もなく翠雲山に歸つて來た。

羅刹女の方では、如何に通力を誇る悟空でも、ああして煽ぎ飛ばしてやつたからには、當分歸つて來る氣遣ひはないと安心して、腰元を相手に又一ばいやつてゐると、忽ち破れるやうに洞門を打ちたたく音がする。何事ならんと立ちかけるところへ、門番が轉げるやうに飛び込んで來て御注進。

「大變です、大變です！ 昨日の猿のやうな坊主が、またやつて來ました。」

「なに悟空が來たど？ 奴八萬四千里をどうして歸つて來やがつたんだらう——よしよし、今度は三四遍煽いでやつて、どうにも出來ぬやうにしてやらう。」

劍をひつさげ、勢ひ込んで洞門に躍り出て見れば、悟空は今日も同じやうに作り笑ひ。

「ねえ姉さんケチなことをいはすに、あつさりあの扇を貸して頂戴な。」

「づうづうしい事をおいひでないよツ。この刀でも頂戴してくれたばりやがれ……」

刀を水車のやうに振り廻して斬つてかかる。悟空も仕方がないから如意棒で立ち合つてゐるうち、羅刹女はそつと芭蕉扇を取り出して、煽ぎ立てましたが、定風丹のきき目でびくともしません。これはいかんと二三度續けさまに煽いで見ましたけれども、日本の政黨のおきまり文句みたいに、動かざること林の如く、悟空は拳骨で鼻の頭をこすり上げながら、

「へん、どんなもんだい。」

とすまし込んでゐる。傳家の寶物が案に相違して全くきき目を失つたので、羅刹女は周章狼狽。急いで洞内に逃げ入り、びたり門をしめ切つてしまつた。

これを見た悟空は、身を變じて一疋の蚊となり、門の隙間からもぐり込んで、中の様子を伺ふと、酒の後で暴れ廻つた羅刹女は息せかせか、腰元にソーダ水か何かを命じ、今しもあふらうとしてゐるところだ。悟空素早くその泡の中に飛び込んだが、そんなことと氣づかぬ羅刹女は、一息にコップを呑みほして、ウーイといひ氣持さうにゲップをやつてゐます。



以前黒風大王の腹の中に飛び込んだことはあるが、婦人の腹中は悟空もこれが初めて。子宮やその他、あちこち變つたところを見物して廻つた末、胃の腑に舞ひ戻つて大聲で呼びかける。「姉さん、あの扇を貸しておくれよう。」

羅刹女は、まさか自分の腹の中にあるとは氣づかないから吃驚してあたりきよるきよる。

「奴また來やがつたな、一體どこに隠れてけつかるんだい？」

「姉さんのボンボンの中にあるんですよ。さあ早く扇を貸して頂戴、でないと中で暴れますぜ。」  
オイチニ、オイチニの掛聲で柔軟體操をはじめ、胃壁をちよいちよい突つつく。羅刹女は兩手で腹をおさへて響めつ面。

「おお、痛い痛い、命だけは助けておくれい！」

「なに親愛なる兄嫁ですもの、何も命を取るとはいやしませんよ。ただあの扇さへ貸してくれりやいいんです、いやだといへばこの通り……」

まだ消化してゐない肴の骨をスキーの代りに穿きなし、馬力をかけて、胃から十二指腸へ直滑降。それからつづら折りなる小腸大腸をチャンプ、テレマーク、スロラームと妙技を振つて滑走し、果ては盲腸にまで暴れ込んだから堪りません。さすがの羅刹女おいおい聲をあげて泣き出し、床の上をのた打ち廻つて苦しがる。

「痛い痛い、死んでしまふよう。扇でも何でも貸すから、勘辨しておくれい！」

腰元に命じて芭蕉扇を持つて來させた様子なので、悟空は咽喉佛のところまで逆戻り。今度は道をかへてムヅムヅさせながら鼻の穴を通り、ハクションと嚏をした拍子に、飛び出して本身に戻るや否や「姉さん有難う」とばかり芭蕉扇を取り上げ、雲に乗つてすたこら、三藏のゐるところへ馳せ歸りました。

三藏師弟は扇が手に入つたので大いに喜び、家の主人に別れを告げて出發したが、四十里ばかり來た頃には、もう熱氣がひどくなつて一步も前に進めなくなつた。

「和尚様、馬からお下りになつて暫くお待ちなすつて下さい。ただ今私がこれで火を煽ぎ消し、雨が降つて來てから、ゆつくり山越しを致すとしませう。」

悟空は扇を携へて火の燃えてゐる方に近づき、うんと一つ煽いで見ると、火は消えるどころか、却つて盛んになる。驚いて三四度續け様に煽ぎ立てたが、火は一層猛烈に燃えひろがり、またたく間に悟空の足もとに襲ひ來て、ぢりぢり股の毛をこがしたから大狼狽。

「大變々々、早く逃げて下さい。火がひろがつて來ますよ。」

三藏は驚いて馬に飛び乗り、悟空をしんがりに四人で二十里ばかりを一目散、漸く山のへこみに來てほつと一息つく。

「あのすべた阿魔め、俺をだましてにせ物を貸してよこしたんだな。煽げば煽ぐほど火が盛んに



なつて、すんでのことに焼き殺されるところだつた……」  
悟空地圖太踏んでくやしがつたが、さてどうすることも出来ません。互に顔見合せて溜息をつくばかりです。

### 三 玉面女の驚き

ところへ氣品のある一人の老翁が、どこからか現れて来て、鉢に入れて持つて来た餅だの菓子だのを一同の前にささげた。

「齊天大聖さま、私はこの山の産土神で御座いますが、どうか、これを皆さんで召し上つて下さませ。」

「それはどうも有難う、遠慮なしにもらつて置きます——それからちよつと聞きたいんだが、この火は一體どうすれば消えるんですね。」

「この火ですか、これは芭蕉扇で消す外に、方法が御座いません。」

「ところが駄目です。さつき羅刹女から借りて来た扇で煽いたら、却つて火が強くなるばかりで、ひどい目に會つたんで……」

「はははは、それは賢の芭蕉扇でせう。眞物は牛魔王の手にある筈ですよ。」

「ぢやこの火焰山の火は、牛魔王がつけたんですか。」

「いや孫大聖、これはもともと貴方がつけたのです。」

放火犯人だといはれて悟空は眞つ赤になつて怒つた。此奴或は牛魔王の廻し者かも知れないと、首筋をつかまへて罵ります。

「何だと、俺が何時火つけをした？ 失禮なことをいふとたたつ殺すぞッ。」

悟空は猛烈に怒りましたが、しかしよく産土神のいふところを聞いて見ますと、ここへ放火した犯人は全く自分だつたのです。

五百年前悟空が天上界に大擾亂を起し、結局捉へられて太上老君の八卦爐に入れられ、焼き殺されようとした折に、悟空はその爐を破つて逃げ出した。その時、爐が下界に碎け落ちて山になり、火氣を帯びてゐるので、遂に火焰山となつたのだが、爐番の役人が職務緩怠として老君の怒りを買ひ、下界に左遷されて、かくは火焰山の産土神にされたのだといふことでした——

いはれを聞かされて、悟空も覺えがあることだから、自然言葉もやさしくなります。

「いや恐縮々々、とんだところで罪作りをしたものだ。さうと聞いた上は、なほ更俺があゝの火を消さなくてはならんわけだが、肝腎の牛魔王が、留守なのには弱つちやつたなあ。」

「牛魔王なら積雷山といふところへ行つてゐますよ。彼奴は元來多情な男で、羅刹女といふおかみさんがありながら、積雷山の玉面女といふ若い娘にはまり込み、近頃ではそこへばかり入りびたつてゐます。」



「ふうむ、畜生うまくやつてやがるな。だが彼奴は確に芭蕉扇を持つてゐるかしら……」  
「それは大丈夫です。萬一手もとになくつても、どつかに隠してあるに相違ありませんから、どうかあの扇をお借りになつて、火を消して下さいませ。さうすれば和尚様があゝの山をお越えになることが出来るばかりでなく、この邊の百姓が皆助かりますし、また私も歸參がかなつて、天上界へ戻る事が出来ます。」

「全くだ、一體その積雷山はここからいく里ぐらゐあるね。」

「さうですな、南の方三千里もありませうが、あなたなら譯はありませんよ。」

「ぢやちよつと行つて来よう。和尚様、暫くここでお待ちになつてゐて下さう。」

飛行約三十分にしてその山に到着。雲からおりて松林の中に入つて見ると、いかめしい石門に「積雷山魔雲洞」の六字が刻りつけてある。悟空、門外に立つて様子を窺つてゐるところへ、大勢の腰元に圍まれてシヤナリシヤナリと現れ出た一人の女、おきまりの形容だが、正に沈魚落雁羞花閉月の縹緞。婦人にかけては殆ど無關心な悟空でさへも、一目見てぼうつと氣が遠くなるやうなトテシヤンです。

「今日はほんたうに天氣もよし、皆の者と摘草でもして遊びませうわいな。」と何ともいへない可愛い聲で喋舌りながら、草摘みをはじめめる。ははあ、さてはこの女が玉面女だな、これなら牛魔王ならずとも打ち込むのは無理がないと、息をこらして木蔭から眺めてゐる中、それと氣づかぬ

女は、だんだん悟空の隠れてゐるところへ近づいて来ます。

悟空これには大弱り、若し向うから先きに見つけられては、つまらぬ疑ひを受けぬとも限らん。宜しくこつちから出て話しかけてやれと、笑顔を作つてのツそり現れ出る。

「奥さん今日は、時に旦那様は御在宅ですかね。」

何にも知らずに餘念なく遊んでゐるところへ、毛だらけの恐ろしい坊主が、突然目の前に飛び出したんだから、これは誰だつて驚きませう。

「あれーッ！」

と絹をさくやうな聲を立てて逃げ出せば、これを見た腰元どもも、一緒にばらばら洞内に逃げ込み、びたり門をしめ切つてしまひました。

玉面女は息せき切つて奥の間にかき込み、牛魔王にすがりついて報告する。

「おおこは！ 今わたしが門の外へ草つみに出ましたら、お化けみたいな鬚ツ面の坊主がいきなり出て来て、わたしに話しかけるんですよ。貴方早く行つて追つ拂つて頂戴。」

「なにこはい坊主が来た？ 心配することはないよ、今俺が見て来てやるから……」

可愛い新妻を驚かした坊主め、事によつたら殴り殺してやらうと、鐵棒をひつさげ勢ひ込んで門外に走り出しました。





牛魔王が門外に出て来たのを見て、悟空はなれなれしく近寄り、丁寧に挨拶をします。

「兄さんお久しう。あなたは私を見忘れはなさないでせう。」

「うん、お前は悟空ぢやないか、何しにここへ来たんだい？」

「なにね、久しく御無沙汰をしましたから、今日わざわざ御機嫌伺ひにやつて来たんですよ。」

「にやにや笑ひながら、いい加減な追従をいひますが、牛魔王は容易に油断しません。」

「なに無沙汰見舞に來た？ 出鱈目な輕薄をいふなよ。お前は先年俺の悴の紅孩兒をひどい目に

會はせながら、どの面さげて俺に會ひに來たんだい。」

「何ですつて？ 兄さん、それやあんた間違つてゐますよ。紅孩兒君はとても強くつて、私なん

か敵ひつこはなかつたんです。ただその時、暴力を揮つて私の師匠をとつて食はうとしたから、

觀音様にお願ひして、思想善導をしていただいただけなんです。それを恨みごとなんかいはれ

ちや、私の立つ瀬がないぢやありませんか。」

「さうか、それなら命だけはゆるしてやらう。もう用はないから早く歸つてしまへ。」

牛魔王の意がやや解けた様子を見て、悟空は早速つけ入る。

「ところで一つお願ひがあるんですがね、實は私どもは火焰山を通りかねて困つてゐるんです。

濟みませんが兄弟分のよしみで、あの芭蕉扇を貸して下さいな。使つてしまつたらきつと間違ひ

なくお返ししますよ。」



「なに、俺の大事な寶物たからものを貸せといふのか。ならんならん、誰が貴様なんかに貸すもんかい。」

「さういはずにさ、兄さん。この通り手を合せてお願いしますよ。」

「變なまねをするな、駄目だといつたら何ちつても駄目だよ。」

と、うるさがつて悟空の頭をばかり。悟空もそれなら力づくで行かうと、同じく鐵棒を振つて立ち向ひ、兩々秘術をつくして戦ふこと七八十合。勝負いづれとも分たぬうち、誰か山の上で呼ぶ聲が聞えます。

「牛魔王様、宅の主人があなたのおいでを待ちかねてゐます。早くいらして下さい。」

これを聞いた魔王は、急に戦ひをやめて悟空に向ひ、

「さうさう忘れてゐた——俺はこれから友人の宴會に招待されて行かなくちやならんから、貴様の命はしばらくあづけて置くぞ。」

飲むこととなると、萬障ばんしょうさしくつて出かける奴と見え、喧嘩まで中止して、すたこら洞内に走り入り、急いで支度にかかる。

「玉面たまめんや、あの上等の方の着物を出しておくれ。今おもてに來た坊主は孫悟空といふ奴だが、俺が追つ拂つてやつたから、もう心配することはない——ちやちよつと行つて來るからね、獨りで淋しからうが留守居をしてゐておくれ。歸りにはタントお土産みやげを持つてくるよ。」



と、甘い言葉を残し、金晴獸といふ快速力のけだものに打ち乗り、雲霧を起して出かけて行きました。

山の上にかくれて、これを見てゐた悟空は、兎に角、彼奴の行く先を見届けてやらうと思ひ、一陣の風に身を變じて、その跡について行きますと、とある山間の谷川へ来て、魔王の姿を見失つてしまつた。見れば川べりに「亂石山碧波潭」と刻みつけた石柱が建つてゐるので、さては牛魔の友達といふのは、ここに棲む水族に違ひあるまい。何とかして探つてやらうと思案した末、一匹の蟹に變つてのそりのそり川底に這つて行く。

やがてたどり着いたのは宏莊な宮殿。牛魔は乗つて來た金晴獸を廊下につないで置き、大ホールの正座に主人の龍王と對座し、頭に魚や貝のしるしをつけた腰元が座を取り持つて、さしつ押さへつ、酒宴の最中です。蟹になつた悟空は手下の中にまじり、暫くこの有様を眺めてゐたが、その中一計を打ち案じ、ひそかに廊下に行つて金晴獸の手綱をかみ切るや、自分は牛魔王の姿に變り、誰にも氣づかれぬやう、その上に乗つてもとの川べりに走り出した。悟空はここから、どこに行かうとするのでせう？

#### 四 本妻を欺いて

牛魔王に化けた悟空は、金晴獸を急がせて翠雲山芭蕉洞へとやつて來ると、腰元はこれを見つ

け、急いで奥の間に走り入つて、羅刹女に告げました。

「奥様々々、旦那様がお歸りになりましたよ。」

夫に新らしい女が出來て、長いこと内に寄りつかれず、その寂しさ怨めしさからヒステリー氣味になつてゐた羅刹女は、久方ぶりに牛魔王が歸つて來たと聞き、狂氣のやうに打ち喜んで出迎へましたが、さて先立つものはただ涙。

「貴方ツ——」

と悟空の體にしがみついたきり、後は言葉も泣きじやくりといつたかたち。悟空は昨日この女の腹にはいり、いやといふほど暴れてやつたんだつくと、可笑しくてしやうがないが、そんなことは色にも見せず、眞實の亭主然とかまへて、背中を撫でたり、キツスをしてやつたり、しきりに御機嫌を取り結びながら、奥の間へとはいる。羅刹女も漸く泣きやんで、つもる怨みを述べ立てます。

「ええくやしい、貴方といふ方は、全くひどい方ですわ。三ヶ月も四ヶ月も歸らずに、よくこの内をお忘れになりませんでしたのねえ。今日はどういふ風の吹き廻しで、お歸りになつたんですか？ ほんとにこの性悪が……」

悟空もこれには持て餘してゐたが、智慧をしぼつて陳辯する。

「まあまあ勘辨してくれ。何もお前を捨てようなんていふ氣はないんだが、ただ向うの家にいる



いろと用が多かつたので、つい長逗留をしましてしまったんだよ。ところが近頃孫悟空とかいふやつが、芭蕉扇を探してゐるといふ話を聞いたから、若しやつて来たたら、紅孩兒の仇を取つてやらうと思つて歸つて来たんだ。お前は何かそんな話を聞かなかつたかい？」

「では貴方、まだ御存じがないんですね。あたし、あの猿のために、すんでのことに命を取られるところでしたのよ。」

「何だつて、一體いつ悟空がやつて来たい？」

話頭轉換が效を奏して、羅刹女はすつかりその話に氣を取られた様子。何も知らぬ顔でいろいろ聞き出すと、前日戦つたことから、腹の中に飛び込まれたのでやむを得ず、扇を貸したことを、こまごまと話す。悟空わざと驚いた風をして、

「それは大變なことをした、あの寶をあんな悪者に貸してやつちやア困るぢやないか。」

「御安心遊ばせ、そこに按目があるもんですか。あたしが寶物を貸したのを、いい氣になつて持つて行つた馬鹿な顔つたら、ありませんでしたわ。」

「さうかい、それは出来た——だが本物はどこにしまつてあるんだい？」

「大丈夫なところに隠して置きましたから、決して御心配なさいますな。それよりか久しぶりで、ゆつくり御酒でもいただかうぢやありませんか。」

腰元にいひつけて酒肴を取り出させ、おとり膳で酒もりがはじまります。

「ねえ貴方や、貴方はあの玉面といふ女をお妾になさるのもよござんすが、正妻のわたしを忘れないで頂戴ね。」

「はははは、そんなことがあるものかね。何しろ永らく留守にして、お前に家事向の心配をかけたのは済まなかつた。まあ心よく一杯やつてくれ。」

「さう、ぢやあたしから頂くわ。今日はほんとに嬉しい日だから、二人でうんと過しませうよ。」  
羅刹女は大恐悅の態で、しきりに杯を重ねるうち、だんだん酔ひが廻つて来て、悟空の手を握つて見たり、肩にしなだれかかつたり、とてもだらしがなくなつて来た。

賈亭主の悟空、いい加減に調子を合せてはゐるもの、心中大閉口です。

悟空はしつこく羅刹女にからみつかれるが、さてこれをしかり飛ばす譯にもいかない。そこでまた氣分轉換兼芭蕉扇の隠し場所探究策と出かける。

「まあ待てよ。俺はやつぱりあの寶物が心配でならん。悟空といふ奴は、なかなか通力のある奴だからね、ひよつと忍んで来て盗まれはしないかと、氣にかかつてならないんだよ。」

「そんなことはどうだつていいぢやありませんか。この通り大丈夫なところに隠してあるんですから、心配なさることはないわよ。」

と笑ひながら口から吐き出したのを見れば、銀杏の葉ほどもない小さな扇、悟空はこれを手に



取り上げて、

「こんなちつぽけな扇で、どうして八百里もある火を消すことが出来るんだい？」

「あらいやだ。あんたは玉面女に夢中になつて、寶物を使ふ法を忘れてしまつたんですね。まあ呆れ返つた人だわねえ。」

「なに、あの、さうぢやないんだけれども、お前を試して見ようと思つたからさ。」

「ホホホホ、冗談ぢやありませんよ。それを忘れてなるもんですかね。そら左の親指で要のところを押へて、オンアボギア、ペーロシヤロと呪文を唱へさへすりや、一丈二尺の大きさになるんぢやありませんか。」

たうとう祕密の呪文までしやべつてしまつたので、悟空はもうこの女に用がない。ペロリ扇を口の中に入れるや、忽ち本相に立ち返り、

「さまあ見やがれ……」

と捨てぜりふを残して洞穴の外に飛び出したから、羅刹女は腰を抜かさんばかりに吃驚仰天。久しぶりに歸つてくれたと思つた亭主は、人もあらうにかたきの悟空だつたばかりか、傳家の秘寶までかたり取られたくやしき口惜しさに、床の上をころげ廻つて泣いてゐます。

跡白浪と逃げ出した悟空は、やがて翠雲山の頂きに着き、口から芭蕉扇を取り出し、羅刹女から聞いた通りにオンアボギア、ペーロシヤロとやつて見ると、見る見るうちに一丈二尺の大扇に

なつた。悟空大いに喜んだが、大きくしたばかりで、元のやうにちぢめる法は聞いて來なかつたから、仕方なくそのまま肩に引つかつぎ、ウントコウントコ三藏のゐる方へと急いで行く。

## 五 八戒に變装

一方碧波潭にゐた牛魔王は、酒宴をへて歸らうとしますと、廊下につないで置いた筈の金睛獸が見えませぬ。

「御家來衆、金睛獸がゐなくなつたが、誰か綱でも解いたんぢやないかね。」

「いいえ、私どもはここにゐたつきりですし、外から人の來た様子もありませんでしたが——若しかするとさつき見馴れぬ蟹が來ましたから、あれの仕業ぢやありませんかしら……」

牛魔王はこれを聞いて、さてはあの悟空の奴、おれの姿になつて金睛獸に乗つて行き、女房をだまくらかして芭蕉扇を奪はうといふ計畫かも知れないと思つたから、急いで川の中から飛び出し、雲を起して翠雲山にまつしぐら。ほどなく芭蕉洞に着いて見ると、果せるかな金睛獸がつかいであり、羅刹女は背に波打たせて、絶え入らんばかりに泣き悲しんでゐる。自分のうちながら三四ヶ月もあけてゐたので、敷居が高い氣がしたが、そんなことをぐづぐづしてゐる場合ぢやないから、女房のそばに寄つてやさしく聲をかけます。

「おい今歸つて來たよ。一體どうしたといふんだな、何をそんなに泣いてゐるのだい？」



いはれて羅刹女はむつくり起き上るや、いきなり兩手で亭主の胸倉をふんづかまへた。

「このばち當り爺め！ いい年をして若い女にうつつを抜かしてゐるもんだから、金晴獸を盗まれて、わたしまで芭蕉扇を詐欺されたんぢやないか。それもこれも、みんなあんたがだらしがなから出来たことなんだ。わたしもうくやくしてくやくして……」

血走つた眼で睨まへながら、嫉妬と憤慨をこつちやにして、亭主を小突き廻す。すねに傷持つ牛魔王は、眼を白黒にするばかりで、グウの音も出ません。

牛魔王は漸く胸倉を取られた手を振りほどいて、女房の前に平身低頭、陳謝これ努めます。

「おれが悪かつた、この通りあやまりますよ、あやまりますよ——これからあの猿を追ひかけて行つてたたき殺し、お前のかたきを取つてやるから、おとなしくして待つてゐておくれ。」

「それならよござんすが、またわたしをだまして、あの阿魔つちよのところなんかへ行つたら、ききませんよ。」

「大丈夫、そんな真似はしやしないよ。では行つてくるからね。」

寶劍を腰につけて火焰山の方へ追ひかけて行くと、遙向うに芭蕉扇を背負つた悟空が、得意然として飛んで行くのが見えます。牛魔王考へるには、今急に取り返さうとしたところが、素直に返してくれもしまいし、若しまたあべこべに煽がれたりすると八萬四千里吹き飛ばされて、ひどい目に會はなくてはならん。これは何か謀り事を以て奪還する外はないと首をひねつてゐたが、

やがてボンと小膝を打つて、身を八戒の姿と變じ、先廻りをして悟空の通りかかるところに待ち受けてゐました。

何にも知らん悟空は、それを贖物だとは氣づきません。

「おお八戒、迎ひに来てくれたのかい？」

「なに兄貴が餘り遅いもんだから、きつと牛魔王に負かされてゐるだらうと心配して、援兵にやつて来たんだよ。」

「ハハハハ、あんな牛魔王の薄のろなんか、俺にあつちや屁のかつばさ。ちやんとこの通り芭蕉扇を巻き上げて来たから安心しろ。」

「ホウ、それは大出来だつた、やつぱり兄貴は偉いところがあるよ。一體どういふ風にして分捕つて来たんだい。」

悟空はおだてに乗つて、得意氣に手柄話をする。牛魔王眞顔で、

「ぢや兄貴もくたびれたらうから、俺が代つてその扇をかついでやらう。」

「さうか、では頼むとしよう。」

と何の氣なしに芭蕉扇を渡しましたから、牛魔王は占めたとばかり、呪文を唱へて扇を小さくし、本相に返つて罵り立てます。



「この間抜け、俺がわかつたか。」

見れば八戒と思つたのは、牛魔王なので、悟空齒がみをして、殴りかかったが、魔王は戦ひを交へようとせず、力をこめて芭蕉扇を煽ぐ。しかし悟空は定風丹を持つてゐるから平氣の平左。すまして煽がせてゐるので、魔王も慌てて扇を口中にしまひ込み、寶劍を抜いて斬つてかかる。何しろ雙方とも手練のつはもの、岩見重太郎と宮本武藏が出つくはしたやうなものだから、力戦三百餘合に及んでなほ勝負つかず、雲霧を蹴散らして、チャンチャンバラバラをやつてゐます。三藏の方は悟空の吉左右を今か今かと待つてゐましたが、容易に歸つて來ないので、案じられてなりません。

「どうしたのでせうね、産土神さん。あなたは悟空と牛魔王と、どちらが強いとお思ひですか。」  
「さうですねえ。あの魔王もなかなか廣大な通力を持つてゐますから、悟空さんとはちやうどいゝ勝負でせうよ。」

「ぢやひよつとすると、負けてゐるのかも知れませんね。あの男は三千里ぐらゐのところはちよつとの間に行つて來るのに、一日かかつても歸つて來ないのを見ると、どうも變ですよ——これ八戒や、お前御苦勞でも迎ひに行つて見てくれないか。若し牛魔王と戦つてゐたなら、お前も手傳つて芭蕉扇を取り上げて來ておくれ。」

八戒はこはがつて内心行きたくはなかつたけれども、産土神が手下と一緒に道案内をしてくれ

るといふので、それでもいやだといふ譯にはいかない。熊手をかついで恐る恐る出かけましたが、しばらくすると空中に當つて物凄い叫び聲が聞える。見れば悟空と魔王が、汗みどろになりながら、一上一下虚々實々、あらん限りの秘術を盡して力闘してゐるのです。

## 六 天上の變化競へ

悟空と牛魔王が空中における亂闘は、眞に天柱も碎けるかと思はれるやうな凄じさ。援兵の八戒、しばし手出しもしかねて見てゐたが、漸く勇氣を振り起して横合から叫びかけました。

「兄貴、おれが助太刀に來たから安心しろ。」

いふことだけはなかなか大きい。悟空は戦ひながらこれを聞いて、

「うむ八戒か。俺は一旦芭蕉扇を奪ひ取つたが、此奴がお前に化けて來て取り返されたんだ。」  
「さうか。この牛太郎め、よくも俺様の眞似をしやがつたな。」

と熊手を振り廻して、めつたやたらに打つてかかる。牛魔王はすでに半日以上も悟空と戦ひ、大分疲れてゐたところへ、盲目滅法流ながらも新手的加勢に附られたので、敵しかねて魔雲洞の方へ逃げて行くのを、二人は逃さじと追ひかけ、洞の前でまたも火の出るやうな大立ち廻り。

洞内に安否を氣遣つてゐた玉面女は、さては旦那の一大事と、家來の小者をウヨウヨ援兵に出す。牛魔王はこれに勢ひを得、聲を上げまして號令をかけ、二人を八方から包圍させる。こんな



小者はもとよりもの數ではないんだが、何しろうるさく足手纏ひになつて、充分の働きが出来かねてゐる暇に、魔王はサツと兵を引いて洞内にはいり、ピタリ門をしめてしまつた。

目ざす敵に逃げられた二人は、縮出しを食つたのら息子のやうに、門の前をただウロウロ。

「弱つたな、彼奴なかなか手強いから、一人でうつかりもぐり込むことも出来ないしな……」

「全くだ、この垣一重がくろがねの——だね。」

後で聞いてゐた産土神は業を煮やして、二人を勵ます。

「洒落なんかいつてる場合ぢやありませんよ。あなた方のお師匠様は、きのふから待ちかねてゐらつしやるぢやありませんか。さあ早く門を打ち破つてあくまで勝負をなさい、今度は私の家來を加勢に出しますから……」

悟空はその言葉に力を得て、疲れた身體を引き起し、鐵棒を振り上げて、門をメチャクチャにたたきはじめる。牛魔王も疲れ切つて、玉面女に腰などもませながら、今までの様子を物語つてゐたところへ、ガラガラツと門の碎けた音が聞えた。驚いて表に飛び出し、二人を相手に、またまた亂戦をはじめましたが、何しろ妾に溺れたり深酒を飲んだり、平常の養生がよくない奴だから、すつかり疲れが来て長續きがしない。とてもかなひさうがなと思つたから、大刀を引いて再び洞内に逃げ入らうとすると、産土神の部下が門をふさいで入れじと防ぐ。魔王は絶體絶命、印を結んで身を一振りしたかと思つる間に、忽ち一疋の蛾となつて空中に舞ひ上つたので、悟空は

雀に變つてこれを追ひかける。魔王驚いて急に鷹に變じ、あべこべに雀をつかまへに來たから、

悟空さらばと鳳凰になつて立ち向ふ。いやその面白いこと、下にゐる八戒や産土神たちは、見世物でも見る氣でヤンヤンヤの大喝采。

悟空が變つた鳳凰は鳥の王で、この上のない行きどまりだから、魔王はそれ以上のものに變化することは出来ない。仕方なく山上に飛び下り、鹿に變つて悠然と草を食つてゐると、悟空は虎になつて一掴みと躍りかかる。魔王慌てて豹に變れば、悟空はライオン、熊になると象といつた風に、互に強い者強い者と變化して、まるで猛獸の共進會にでも行つたやうです。

牛魔王はここで哄笑一番、たうとう自分の正體を現して、とても恐ろしい白牛に變りました。見れば頭は峻嶺の如く、眼は電光に似、雙の角は二つの鐵塔のやうに聳え立ち、きはば双をならべたる如く、頭から尻尾までの長さ千丈餘りといふんだから大したもの、ハツタと悟空を睨みつけて、雷のやうな聲で怒鳴つた。

「さあどうだ、これでもおれに手向ふ氣かッ。」

悟空これを見て負けじと本相に返り、大喝一聲したかと思れば、高さ一千丈、泰山の如き頭、日月のやうな兩眼、血の池みたいな口のジャイアントになり、如意棒を思ひ切り延ばして立向ふ。まるで東京ステーションと丸ビルが、生き物になつて喧嘩をおつはじめたやうな大騒動です。



雙方一千丈もあらうといふ大ものが、死物狂ひで喧嘩してゐるんですから、天地鳴動、その物音がはるかに天上界まで聞えます。かねがね三蔵を守護してゐる神々はこれを聞きつけ、總動員で現場に出動して来ると、かくと見た牛魔王素早く本相にかへり、今度は本妻のゐる翠雲山芭蕉洞に逃げ込んでしまひました。その時、産土神と一緒に、大威張りでやつて来たのは八戒です。「兄貴、俺がすつかり魔雲洞を退治して来たよ。あの玉面女といふのは、殺して見たら白狐だつたが、今度は羅刹女をやつつけようと思つて加勢に来たんだ。」

「それは偉い。羅刹女はあの洞穴にゐるが、今牛魔王もあそこへ逃げ込んだところだ。」

牛魔王と聞いてちよつと尻込みしかけたが、天の神々が援兵に来てくれるので勇氣づき、悟空と二人で門破りに出かける。

魔王は一休みする暇もなく、敵に押しかけられて、今は絶體絶命。芭蕉扇を女房に渡した上、二本の太刀を揮つて門外に躍り出し、ここを先途と戦ひましたが、何しろもう疲れ切つてゐるので、ややもすると受太刀になります。しかし周囲は悉く神々に取り巻かれて逃げ出すすきもないから、急に雲を起して天上へと逃げ出しました。

ところがここには、天上界第一の武藝者たる托塔天王、哪吒太子父子が、手ぐすね引いて待ち受けていらつしやる。

「牛魔王待つてゐた、もう逃げようたつて逃がしはせんぞ。」

と手にせる照魔鏡を差し向けたので、牛魔王は白牛の本體に戻り角を振り立てて突いてかかつたが、勇氣の太子はびくともしません。一聲叫んで三面六臂に變ずるや、ヒラリと白牛の背に飛び乗り、斬魔劍を揮つて一刀のもとに頭を斬り落した。

さすがに暴威をふるつた牛魔王も、たうとうこれでお陀佛と思ひきや、見る見るうちに斬つたあとから新らしい頭がニヨキリ、一層物凄しい眼玉をして突きかかつて来る。太子いらつてまた斬り落したが、何度斬つても新しいのがニヨキニヨキ出現、斬つても取つても、取つても斬つてもまた生えたといつた具合で、果てしがつきません。

太子はさらばと專賣特許牛の丸焼の法を用ひ、四つ足に油をひたしたポロ切れを結びつけ、口から火を吹いてこれを燃したので、牛魔は生きながらピフテキになるやうな苦しき。猛り狂つてもがきながら、尾を振り頭を動かし、また何かに變化して逃れようとしたけれども、天王が照魔鏡で照しつけてゐるので、最早姿をかへることも出来ない。萬策盡きて太子の前にひざまづき、悲鳴をあげて歎願する。

「モウモウ悪いことは致しません。これから佛門に入りますから、どうぞ命だけはお助け下さい。」

「たうとう降参したか。助けてほしくば、早く芭蕉扇を出せッ。」

「あれは女房に預けて御座います。」

「さうか、では案内致せ。」



太子は縛妖索といふ繩を魔王の鼻面へ通し、天神地神悟空八戒等一同、牛に引かれて芭蕉洞まわりといふ形。

羅刹女はこの有様を眺め、急いで門前に走り出し、頭を地にすりつけて一同の前に平伏しました。

「芭蕉扇は差し上げますから、どうか私共夫婦の罪をおゆるし下さいませ——旦那様、あなたはまあ何といふ情ないお姿になられました。」

とさすが女の心弱く、牛の首にかじりついてワンワン泣き叫べば、牛魔も涙とよだれを一緒に流して、首うな垂れてゐます。

やつと扇を手に入れた悟空は非常な喜びやう。しかし牛魔王夫婦の悲歎を見ては、敢て同情ををしむものではありません。

「だから姉さんは、はじめの時におとなしく貸してくればいいんだなあ。まあまあさう泣きなさんな、俺がよくお願ひして、ゆるしていただくやうにするから……」

親切に慰めてから、神様達とともに雲に乗つて、三藏法師のゐる處へ急ぎました。

悟空がほん物の芭蕉扇を取りに行つたまま、久しく歸つて来ないので、三藏と悟浄は首を長くして待ちわびてゐるところへ、あたかも大仕掛の照明装置をしたかのやうに、五彩の雲、金色の

光が天地を蔽ひました。三藏は恐れをのいて、

「悟浄や、あれを御覽。天上界の兵隊が大勢見えてゐるが、若しや悟空が失策でもして、征伐においでになつたのではないかしら……」

「え、そんなことはありません。あれは釋迦如來のおいひつけで、平常お師匠様を守護してゐる四大金剛、金頭揭諦、六甲六丁、護法伽藍の方々です。ソラ後の方から哪吒太子、李天王が牛を引き立て、それから扇を持つた悟空兄貴も見えるぢやありませんか。失策どころか大成功ですよ。」

よくよく見れば、如何にも悟浄のいふ通りなので、三藏は急いで金欄の袈裟をかけて禮装をととのへ、地上にひれ伏して禮拜します。

「愚僧は何の徳も御座いませんのに、かく神々のお助けを受けることは、ほんたうに忝けないこととて御座います。南無阿彌陀佛々々々々々々。」

「善きかな善きかな。われ等は佛勅を受けて、汝の難を救ひに参つたのぢや。これから一層力を盡して大願を成就いたせ、かんまへて油断致すなよ。」

「畏まりました。決して決して怠慢は致しませぬ。」

三藏有難がつてくどくど禮をいつてゐましたが、悟空は一刻も早く扇の威力をためして見たくて仕様がな。そつとその場をはづして火焰山に近づき、力を入れて一煽ぎすれば、果せるかな



火焰は一度に収まり、二度目にはすがすがしい涼風が吹き来たり、三度煽ぐと細雨霏々として降り何ともいへない爽涼な氣持。神々たちもその奇瑞に感じ、胸をひろげて涼をとりながら、三藏といろいろの物語りをした上、やがて牛魔王を引き立てて、天上に歸つて行かれました。

この時産土神に引き据ゑられてゐた羅刹女は、恐る恐る悟空の前へ出て陳謝致します。

「齋天大聖様、これまでは色々失禮を致しまして、相済みませんでした。今後は改心して善道に歸りますから、お使い済みになりましたら、記念にその扇を私に下さいませ。」

「ほんたうに改心するならゆるしてもいいが、また俺をだますんぢやあるまいな。聞けばこの山の火は一旦消えても、五穀の稔つた後でまた燃え出すとのことだが、どうすれば火の根を絶やして、百姓たちを安心させることが出来るんだい？」

「それには四十九遍煽げば宜しいのです。さうすれば、二度と再び燃え出すやうなことは御座いません。」

悟空すぐさま扇を取り直して、いふ通りに四十九遍煽ぐと、忽ち熱帯地方のシャワーのやうに、豪雨が降りそいで来て、すつかり火の根を絶やしてしまつた。

そこで約束通り芭蕉扇を羅刹女に返し、三藏を馬に乗せ、産土神に世話になつた禮を述べて、また西へと出發する。土地の人民は火を絶やしてくれた大恩人のため、競つて食糧を寄進し、なほ山麓まで送つて来て別れましたが、先刻まで炎々と燃えさかつてゐた火焰山も、今はいいあん

ばいに濕り氣がついて、むしろ涼しいくらゐ。一行何のさほりもなく、樂々と山越えをいたしました。

羅刹女も爾來すつかり改心し、芭蕉洞で修行を積んで、牛魔王や紅孩兒同様佛果を得、地方の人民とともに、長く三藏や悟空の徳をたたへてゐたといふことです。



## 金光寺と木仙庵

### 一 泥龜に餘の精

手間のかかつた火焰山の鎮定も、漸くケリがついたので、三藏法師一行は更に西を志して旅路を重ねて行くと、冬の初めつ方とある都に差しかかつた。餘程富裕な土地と見えて町家のたたずまひ、行き交ふ人々の風俗などすべて立派ですが、不思議なことに町を托鉢に歩いてゐる和尚は、悉く囚人のやうに首枷手枷を嵌められて、やつれ切つた装をしてゐます。和尚と雖も相見互ひ、殊に慈悲心深い三藏のことですから、深く訝り且つ哀れんで、その理由をたづねてみると、和尚たちは涙を流しながら、代る代る次のやうな次第を物語りました——

抑もこの國は祭賽國と稱する西方交通の要路に當る國で、和尚たちはこの國第一の大伽藍金光寺に勤むる連中でした。金光寺には佛舍利を納めた十三重の寶塔があつて、晝夜その頂きより瑞光を發する所から、近隣の國々では祭賽國を畏れ敬び、臣と稱して年々貢物を持つて來てゐたのに、三年前の八朔の晩、天から血の雨が降り、寶塔を汚して以來、バタリと光が止つてしまつたので、隣國では最早國威が衰へたものとして、貢物を持つて來なくなつた。國の大臣等は、これは寺の和尚が佛舍利を盗み出したからに違ひないと、國王に無實を上奏したので、一同窃盜犯人

として手枷首枷を嵌められ、地獄のやうな苦しみを受けてゐる——といふワケ。「どうぞや大和尚様、我々の冤罪をそそいで、青天白日の身として下さいませ。」と西瓜頭をならべての歎願です。

三藏は、かう頼まれてみたものの、和尚等の冤罪を立證する何物も持つてゐるわけではない。ただ可哀さうだからゆるして頂きたいとだけで、國王の前へ行けるものでもなし、兎に角、あの寶塔に登つて見たならば、何かの手がかりを得ることがあるかも知れないと、夜に入るを待ち悟空同道で、その寶塔の探檢兼參詣にと出かけました。

十三重の塔といふから、五重の塔の約三倍もある高いものです。三藏はその階段を一々箒で掃ひ清めながら登つて行くのですから、竝大抵の業ではない。それに生來足弱なので十階目まで登ると、たうとうへたばつて倒れてしまつた。

「悟空や、私はもう一足も登れなくなつた。お前この箒を持つて行つて、代りに掃除しておいで。」悟空はさつきから、三藏のノロ臭いのをまだるがつてゐたので、箒を受取るや、十一階と十二階をサラサラツと淨めて、いよいよ頂上に登りかけると、何やらそこで人聲が聞える。訝かりながら登音をひそめて覗いてみると、貧乏徳利を間に下郎風な醜男二人、もういい加減召上つたと見え、いい氣持になつて藤八拳を打つてゐるのです。悟空躍り込みさま大喝一聲、

「この泥棒ッ！ 貴様たちだらう、この寶物を盗んだのは……」  
と怒鳴りつければ、不意を喰つた兩人は吃驚敗亡、うろたへて逃さうとするのを、兩手で首



筋を掴まへ、バタバタ暴れるのもかまはず、三藏のゐる十階目まで引摺り下して來ました。

「和尚様、曲者を虜にして参りました。場所柄も辨へず、酒に酔つて拳なんか打つてゐるんです。泥棒は此奴等に違ひありませんから、御詮議下さい。」

「ホホウ、それは意外の拾ひ物だつた——コレコレ、その方たちは何處の者ぢや、實の在り所を眞ツ直に白狀致せ。」

「オイ、コラ、有態に言はぬと、俺がこの棒でただ一息に叩き殺してしまふぞ。」

悟空も傍で如意棒をヒネくりながら、責め立てるので、二人はワナワナ慄へながら、先づ髭の長い腹の大きな男の方から口を切りました。

「どうぞ命ばかりはお助け下さい。私たちは碧波潭の萬聖龍王様の家來で、その男は泥龜の精、また私は鯨の精でございます。一昨年のこと姫君の許へ九頭駙馬と申す養子が参りました時、王様は何がないい聲引出をと考へて、この佛舍利を盗み出し、その聲殿に遣つたので、私たちは決して當の盗人ではございません——なア、龜公さうだらう。」

すると龜公、頭を出したり引込めたり、ペコペコお辭儀をして、

「全く鯨公の申す通りでございます——ところが近頃三藏法師が強い家來を引連れて、この邊を通るといふ風説が傳はり、若し寶物の穿鑿に見えたならば、すぐ注進致せといふ龍王様の御命令で、私たちはただその見張番に参つてゐただけです。決して悪い事を致した者ではございません。」

と一切を白狀する。これを聞いた三藏と悟空は、等しく龍王の暴逆を憤つてゐる處へ、塔の下から、ガヤガヤと登つて來る大勢の聲音が聞えます。

さては龍王の奴、早くも我等の到着を嗅ぎつけて、押寄せて來たのかと、悟空如意棒を執つて身構へてゐると、やつて來たのは敵にあらず、八戒を中に金光寺の坊主大勢、とんだ道成寺の舞臺みたいな光景です。

「和尚様、一體どうなすつたんです。塔の掃除が済んだら早く歸つておやすみなさいな。また、悟空もさうぢやないか、何をお供しながら愚圖々々してゐるんだ。オラア待遠で堪らないから迎ひに來たんだぜ。」

「ホウ八戒か、いい處へ來てくれた。實はここでこの曲者をつかまへ、寶物泥棒はあの萬聖龍王だといふことを、白狀させたところだ。」

「曲者をつかまへたら、早く捻り殺してしまへば、いいぢやないか。」

「いやさうぢやない、しばらく彼奴等を生かして置いて、この國の王様の前に連れて行き、金光寺の坊さんたちが御盜罪でない證人に立たせてから、道案内をさせて佛舍利を取返しに、行かうと思つてゐるんだ。」

八戒例の強がりを言つてみたが、悟空の説の當然に同意し、曲者兩人を引連れて、塔を下り寺



に引揚げる。残つてゐた坊主たちも、この一部始終を聞いて、いよいよ我々の身の明りが立つ時が来たと大喜びです。

翌朝三藏は悟空を連れて王城に伺候し、國王に拜謁して先づ旅行免狀を提示しましたが、國王甚だ元氣がない。三藏に向つてしきりに愚痴をこぼします。

「唐の皇帝は全くお仕合せだ。あなたのやうな有徳の高僧を遣はして、天竺から有難い經文を求められるといふのに、私の國の出家はみな泥棒です。彼奴等に金光寺の寶物を盗まれてからは、近國から貢物をしなくなり、内府も大分苦しくなりました。ほんたうに憎いのはあの出家どもちや。」

三藏はこれを聞いて前晩からの事情を詳細に物語り、出家たちの罪は全く無實な旨を説いたので、國王は驚き且つ喜び、兎も角、その曲者を見たいとの仰せだ。召しによつて寺に残つてゐた八戒と悟淨が、件の二人を引つ立てて來ると、何しろ鯨と龜の變化だといふので、宮中の役人や官女で大變な見物。

## 二 賊は萬聖龍王

國王の訊問で、佛舍利盜難事件の内容は、逐一判明したので、金光寺には即刻大赦令が下る。一方宮殿では三藏等四人のため大饗宴を設け、國王自ら立つて酒間を斡旋されます。

「お蔭で寶物の行方がわかり、視着至極に存する。ところで如何でござらうな、お骨折序でにどなたか御家來のうちで、寶物を取返して來て頂きたいものぢやが、何とかお願い出來ないでせうか。」

「左様——コレ、悟空に八戒、聞いての通りのお頼みだから、一つこの祭饗國のために寶物を奪ひ返して來ておあげ。」

八戒は久し振の御馳走に、大分喰ひ酔つて氣が大きくなり、それに自分も手柄をして見せたい下心もあつて、即座に快諾。

「ようがすとも。國王様、御安心遊ばせ、私等が行けば、きつと寶物を取つて來てお目にかけますから……」

「早速の承引忝けない。だがこちらから、何千人ぐらゐ兵隊を付けて上げたらよからうかな？」  
「ハハハハハハ、御冗談仰有いますな。私と兎貴が行きや、龍王如きを退治するのはお茶の子さいさい國ですよ。」

八戒下らん洒落などを言つて自慢する。悟空は苦笑しながら共々支度を整へ、先きの曲者を一人づつ小脇にかかへて空中のパイロットとなし、ヒラリ雲に乗ると見るや何處ともなく飛び去りました。

國王初め官人官女は、口をポカンとあけて仰ぎ見、ただただ驚歎するばかり。後に残つた三藏



を一層にあがめて老佛様と唱へ、お相伴に悟浄を菩薩と稱し、何彼と取持ちながら兩人の吉左右を待つてゐます。

悟空と八戒は、捕虜の道案内で間もなく碧波潭に着いた。

「御苦勞々々々、もうここがいい。所で貴様達の命は助けてやるから、先きに龍王の處へ行つて、今、悟空と八戒の兩大將が寶物を取返しに來た、すぐ持つて來ないと、飛込んで皆殺しにすると言へ。いいか——その代り貴様達にはいい餞別をやらう。」

と悟空は如意棒に息を吹きかけて小刀とし、二人の鼻と耳を削落して、水の中へ放してやつた。何がいい餞別なものか——二人は痛さをこらへて宮中に駈込み、フガフガ聲で御注進。

「フアイ王様々々、フアイ變でフオ座います。ただ今孫フオ空と申す奴、寶物を取りに押寄せて參りました。」

折から龍王は、聾の九頭駙馬と酒宴をしてゐましたが、音に聞く孫悟空がやつて來たとのことに、酔ひも一時に醒めてガタガタ慄へ出した。しかし聾の方は若いだけに、一向平氣で、

「親父殿、お氣遣ひ召さるな。私が參つてあのコケ猿を、一掴みにして來てお目にかけてませう。」と言ふが早い、青龍刀をおつ取りさま、水面に躍り出で、物をも言はず悟空に斬つてかかる。悟空も如意棒を揮つて立向ひ、戦ふこと三十餘合。その間八戒が横合からチヨイチヨイ熊手を持

つて助太刀をしますので、九頭駙馬はウルさいと思つたか、いきなり空中に飛上り、本相を現したのを見ると、その名の通り九つの頭があつて、その兇惡な形相は何にたとへやうもない程です。臆病者の八戒、これを見るや、わつと頭を押へて逃腰になるところを、九頭駙馬は素早く手を

延してその襟首をふん掴み、水中に躍り込んで龍王の許に歸りました。「親父殿、猿の代りに豚を生捕つて參りました。相當油も乗つてゐるやうだし、この方が料理はえがありません。」

「やア、さすがは聾殿、お手柄お手柄。疲れ休めにさあ一杯……」心配してゐた龍王大喜びで、家來に命じ八戒を一室に縛り置かせ、手柄話を下物にさつきの酒もりの續きが始まる。

一方取殘された悟空は、しばし呆氣にとられてゐましたが、八戒の身の上心許なしと、變身の術を以て一疋の蟹と變り、龍王の宮殿に這ひ込んであちこちと捜し廻る。すると漸くのこと、

八戒が縛り付けられて、ぐうぐう悲鳴をあげてゐるのを見付けました。「おい八戒、俺だ、悟空だよ。お前は出發の時、大威張りをした癖に、こんな意氣地のない目に遇つちや、駄目ぢやないか。」

「おお兄貴か、いいところへ來てくれた。どうか頼むから助けてくれ。」  
「よしよし、今助けてやるからな。さうしたらお前は御殿に暴れ込んで、龍王親子をおびき出し



て来い、いいか。」

鉄でぢよきぢよき繩を咬み切り、悟空は急いで水面に歸る。自由になつた八戒は抜き足差し足、宮殿に忍び込むと、例の熊手を振りまはして戸障子、椅子、卓子、當るを幸ひガラガラとはし始めた。

驚いた龍王親子、豚奴何時の間に繩を抜けて来たかと、手に手に得物をとつて八戒にかかつて来る。八戒はいい加減に戦ひ、頃合を見て逃げ出すのを、逃さじものと追ひかけて水上に現れ出した時、待ち構へてゐた悟空、お面一本！ 發止とばかり龍王の腦天を喰はせれば、何條たまたらん、熟柿の潰れたやうになつて即死しました。

### 三 九頭駙馬と夫人

九頭駙馬は口惜しくてたまらないが、形勢不利と見てその上戦ふことをせず、

「覺えてゐる、今に来て身の仇を討つてやるから……」

と龍王の死骸をかかへて水中に逃げ歸る。悟空と八戒は追ひかけてあべこべに謀られるの用心し、岸邊に引きあげて一息ついてゐます。

「親爺は退治したが、聲の野郎め、なかなか手強い。彼奴が居ては、容易に寶物を取り返せさうもないぜ。」

「全く弱つた、何とか方法はないもんかなあ。」

兩人思案投首で話し合つてゐる時、東の方からむらむら雲が飛んで来たと見る間に、その上から呼びかける聲が聞こえます。

「そこに居るのは悟空八戒兩君ではないか。何をぼんやりしてゐなさるのぢや。」

兩人その聲に雲の上を仰ぎ見ると、豫て肥懸の仲なる二郎眞君と梅山六兄弟の一行です。

「おお、恰度いいところへ来て下さつた。實はこの九頭駙馬を退治に來ましたら、なかなか手強いので弱つてゐるところなんです。お願いですから一つ力を貸して下さいませんか。」

「さうですか。我々は獵に出てあぶれて歸る途中ですが、そんなわけなら妖怪狩のお手傳ひをしませう。」

二郎眞君もこんなことは大好き。そこで謀を定め、八戒再び水中に躍り込んで宮中に忍び入り、龍王の遺骸に取りついて泣き悲しんでゐる息子の龍子を、ただ一撃ちに撲り殺す。九頭駙馬は猛然として憤り、舅と義弟の鬨、今度こそは逃さじとばかり、追ひかけて來て水上に躍り出で、凄い勢で戦ひますので、悟空八戒の二人がかりでも手に餘るほどです。此奴まつたく世の常の馬鹿聲ではない。

その時雲の上に隠れてゐた二郎眞君、矢ごろをはかつて切つて放てば、見ん事命中、太腿ぐさと射抜いたので、たまたらずよろよろける。そこへ眞君の犬と鷹が四方から飛びかかつて咬み



付いたから、さすがの驕馬も弱り果て、雲を霞と何處へか逃去りました。

かうなると、例によつて八戒は急に強がりを始めます。

「おーい、敵に後を見せるとは卑怯千萬、引返して尋常に勝負な致せーッ。」

大きなことをいつて、追ひかけようとするのを、悟空引止めて、

「まアかまはんで置け。それより俺が謀事をもつて寶物を取り返しに行くから、一緒に付いて来てくれ。」

と、くるりととんぼ返りをして、九頭驕馬そつくりの姿に變じ、水中にもぐつて、宮殿に駈込みました。

亭主の安否を打案じてゐた九頭夫人、これが贖物とは知らないから、寄り添つて大喜びです。

「御無事で戻らしやんしたか。して、大層息せき切つてどう遊ばしました？」

「大變、大變、今あの八戒奴が追ひかけて来る。あの寶を隠して置かなくてはならんから、早く出して来てくれ、早く、早く……」

夫人は騙されるとは知らず、驚いて例の佛舍利を入れた箱を取出して來たので、悟空これを懐に納めるや、本相を表はして赤い舌をべろり。

「む、ははははは。お前の旦那でなくつてお氣の毒さま、わしは敵の悟空さんだよ。」

「あれーッ！」

びつくりした九頭夫人、悲鳴をあげて逃出すのを、八戒は容赦なく一打ちになぐり殺し、水面に出た二郎眞君等に禮を述べ、意氣揚々祭賽國に凱旋しました。

待詫びてゐた國王をはじめ文武百官、金光寺の坊主たちは勿論、國民擧つて大恐悅。「悟空大

聖萬歲。八戒閣下萬歲！」と凱旋將軍を迎へるやうな熱狂的大歡迎です。悟空は早速佛舍利を金光寺の塔上に安置すると、元の通りに紫雲たなびき、瑞光輝き出したので、宮中をはじめ、朝野の

各方面でも、連日連夜の大祝宴。三藏等四人は引ッ張り風の状態、さすが大食漢の八戒も、いささかもたれ氣味でフウフウいつてゐます。

前途を急ぐ三藏は、頃合ひを計つて暇を告げますと、國王その他から莫大な謝金を提供しよう

としましたが、もとより某國の某大官のやうに、報酬を豫期しての努力ではなかつたのだから、

鏝一文も受けようとしません。國王は益々その徳に感じ、僅かに旅用の草鞋、乾糧などを饒げ、

出發の日は國內の文武百官全部を派遣して、二十里餘りを見送らせました。

大恩を受けた金光寺の坊主たちも同行しましたが、それだけでは別れるに忍びず、更に六十里餘りの國境まで見送り、いよいよ最後の別れには、一齊にわあわあ泣出し、その聲八十餘里の王城まで達したといふから大したものです。



#### 四 惚れられた三藏

祭賽國を後にまた旅路を重ねるうち、一時はいつしか春の半ば、一行は大きな峠にさしかかった。しかもその峠はまるで鐵條網を張詰めたやうに、とげとげた荊棘で一杯、進まうにも一歩も進むことが出来ません。

三藏も悟空もこの異様な障礙物に出會つて、どうしたものかと歎息してゐると、いつもはへこたれる八戒が意外に平氣です。

「お師匠様、御心配御無用。私がちよつくら道をこしらへてお目にかけませう。」

と何やら呪文を唱へると、八戒の體は見見る見ると二十丈ばかりに、また熊手は三十丈ほどの長さに延び、マンモウスそこのけの大物になつた。その大物が大熊手を一振りすると、一度に荊棘が二三十間づつも刈り除けられるので、一行樂々と前進が出来る。悟空後から、

「お前もなかなか役に立つぞ。」

などと油をかければ、好人物の八戒大得意。汗だくになつて道路開設につとめ、夕刻までに百里餘り進んだ時、「荊棘嶺」と刻んだ石碑のあるところまで来ました。八戒碑面をよく見ると、なほ「荊棘蓬攀八百里、古來有路少人行」の十四字が彫り付けてあります。

「ははははは、何をこれしきの路が——よしよし俺が下の句を付けてやらう。」

八戒なかなか詩作の心得がある。熊手の刃でその後に「自今八戒能開破 直透西方路盡平」と刻み得意満面。一層馬力を出しつつ、晝夜兼行で道を開き、翌日の夕方までに殆ど荊棘嶺の大部分を征服しました。このところ全く八戒先生の一人舞臺です。

一同これで先づ安心と、馬をとどめ荷を下して一休みしてゐる前へ、どこから来たか一人の老人が現はれました。

「皆様お疲れでせう。私はこの氏神ですが、どなたもさぞおなががおすきだらうと存じて、饅頭を持つて参りました。さあさあ遠慮なく召上つて下さい。」

見れば手に下げた大きな蒸籠に、うまさうな饅頭がほやほや湯氣を立ててゐます。腹ペコの八戒眞先きに手を出さうとするのを、悟空さへぎり止めて、

「意地汚なをするな。此奴はどうも怪しい奴に違ひない——やい老人、貴様は本當にこの氏神か、さうではあるまい。」

と如意棒を捻くりながら、恐い眼で睨み付ける。すると老人は急に姿を消して一陣の風と變り、皆が呆氣に取られてゐる隙に、三藏を搔攫つて何處へか飛んで行つてしまつた。その素早いこと、

悟空等三人今更のやうに慌て騒いで、當途なしに捜し始めたが、皆目行方がわかりません。

一方三藏を攫つた老人は、とある崖の下に舞ひ下り、「木仙庵」と題した一軒の風雅な庵に招き入れました。中には人品賤しからぬ三人の老人が、物靜かに茶など啜つてゐます。



「和尚様、さぞ吃驚なされたでせうが、我々は決して怪しい者ではありません。實は風のたよりで貴方がこの邊をお通りになると聞き、是非お招きして詩の會を催さうとお待ちしてゐたのです。どうかお心靜かに御清遊を……」

と寄集つて懇ろにもてなし、各々七言律を詠じて自己紹介を致します。三藏は初めはどうなることかと生きた心地もなかつたが、彼等に害心がない様子なので、やうやう心を落着け、乞はるるままにやむなく、自らも七言律を吟じなどして調子を合せてゐました。

しかしだんだん夜の更けるにつれ、別れた三人の弟子のことが心配になつてならない。譯を言つて辭し去らうとするのを、四人がしきりに引き止めてゐるところへ、ブーンと得も言はれぬい香りがして、妙齡の一人婦人が室に入つて來ました。後世の楊貴妃やクレオパトラも、到底その敵ではないといふ素敵な美女、これがしやなりしやなり、石部金吉みたいな三藏の側に寄添つたから一大事です。

\*

もとより志操堅固の三藏、美女が側にやつて來たとて、斷じて眼尻なんか下げはしません。一言も物を言はず、堅くなつてシヤチコ張つてゐるばかり。

老人たちは四邊から、何彼にと二人を取り持たうとします。

「おお杏仙女か、このお方が豫てお噂してゐた唐の三藏法師様だよ。これを御覽、これが今夜の

詩會で三藏様がお作りになつた詩だ。」

「左様で御座いますか、本當にお上手で御座いますことねえ——失禮では御座いますが、私にも韻を和まさせていただきますませうか。」

水莖の跡も麗はしく、すらすらとものした七言律は、「……雨は紅姿を潤ほし嬌且つ艶、煙は翠色を蒸して現はしました隠す……」といつたやうな文句の入つてゐる、色氣たつぷりなもの。老人たちは手を拍つてこれを賞めそやします。

「うまいうまい、さすがに女の子の作だけあつて、情が籠つてゐる。」

「いいえ、お恥かしう御座いますわ——ですがお客様はどうしてそんなにお鬱ぎになつていらつしやるの？ もう何事もお忘れになつて、寛り私たちと遊んでいらつしやいましたな。ね、いいでせう。」

ね、ね、愛して頂戴ねとまではいはなかつたが、とてもたまらない目付をしながら、三藏の膝にしなだれかかれれば、老人たちも口々にこれをあふり立てる。

「さては杏仙は和尚様に氣があるんだな——もし三藏様、世の喩へにも落花流水といふことがありませんよ。何とか彼女の思ひを叶へてやつて下さいませんか。」

「さうだとも、さうだとも。しかし和尚様はお堅くていらつしやるから、我々が仲人になつて、夫婦の盃を取交した上で、それからお開きとしたらどうぢやらう。」



「それがいい、それがいい。」

一同で三々九度の支度でもしさうな有様に、三藏は顔色を變へて立上りました。

「君方は共謀になつて、私を誘惑しようとしてゐるのだな。一刻もこんな處には居れん、歸る歸る。」

と席を蹴つて表に出ようとする、老人の一人ががらり態度を變へて、

「この坊主！　こんないい娘を當てがはうといふのに、何が不足なのだッ。若しいふことを聞かんのなら、引摺まへてもう娑婆には歸さんぞ。」

大聲で怒鳴りさま、躍りかかつて三藏の首筋をつかまへた。杏仙女は目くばせをして、その老人の手を拂ひのけ、益々見せる親切ぶり。

「和尚様、さう御心配遊ばしますな。さあ私と一緒にあちらの室へ参りませう。」

と三藏の手を引いて、別室に行かうとする。三藏は泣きながら逃出さうとする。引きつ引かれつ、しばしが程は争つてゐました。

一方悟空等三人は一晩中三藏の行方を捜し求め、曉方頃、荆棘嶺の西端に來た時、どこともなく三藏の泣き叫ぶ聲が聞えます。三人これを聞付けて、一齊に「お師匠様、お師匠様！」と呼立てると、この聲が耳に入つた三藏、嬉し喜んで「おーい、ここに居る、助けてくれ！」と叫ぶが否や、忽焉として老人も美女も姿を搔消し、三藏ただ一人ぼつちに取殘された。

間もなくここへ悟空等三人が駈付けて來て、師匠の無事でゐたのを祝し合ひ、色々前晩の模様を聞いた上、怪物を捜査して見ましたが一向に判りません。探偵眼の鋭い悟空は、その近所に生え茂つてゐる老木を怪しと睨み、八戒とともに伐倒してみると、果せるかなその伐り口から、鮮血淋漓として迸り出しました。即ち四老人は松や柏などの古木の精、杏仙女は杏の精で、寄つてたかつて三藏を墮落させようとしたのです。

三藏は驚き且つ呆れるばかり。然し幸ひにも女難を免れたのを喜び、急いでここを出發しました。全く危ない所で、若しあの時三藏が、杏仙の媚びに春情を催して誘惑されてしまつたら、西遊記もここまでで途切れる所でした。遇つて見たいやうな氣もするが、然し戒むべきは色です

な。



## 黄眉魔王調伏

### 一 奇瑞の大風呂敷

やがて数日の後、山門に「小雷音寺」と掲額してある一寺院に差しかかりました。屋上に瑞雲揺曳して何となしに神々しく見えますし、殊に信心深い三蔵のことですから、立寄つてお詣りして行かうといひますが、悟空の眼にはどうも怪しく感じられるので、しきりに引止めます。

「何だかここに寄ると凶いことがありさうですから、およしになつては如何ですか。」

「いや、俺はどんな寺へでもお詣りすることにきめてゐる。萬一災難に遇つたとて、佛道のためだから構やあしない、止めてくれるな。」

「さうですか、それなら仕方はありませんけども……」

不承不承について行きますと、本堂には五百羅漢、三千揭諦、八大菩薩など諸々の佛體が並び、一番奥の佛壇の上には金色燦爛たる如來様が安置されてある。三蔵及び八戒と悟浄は一々これに禮拜して行きますが、中ツ腹の悟空はツンとうそぶいて、如來の前に行つても頭一つ下げようとしません。

すると堂内に居た納所坊主が、大聲で怒鳴り付けました。

「無禮者奴！ 貴様は何故御本尊様に禮を致さぬのだツ。」

悟空からからと笑つて、

「馬鹿を言へ、此奴等はみな賢佛だ。今俺が正體を現はしてくれぬ。」

と如意棒を振り上げて打ちかからうとした刹那、ガチャンと音がして天井から鏡鉢（スーフ皿のやうな形をした銅製の樂器）が落ち來り、悟空をその中に封じ込んでしまつた。三蔵等は驚いて逃げ出さうとすると、如來初め羅漢も菩薩もみな本相を現して妖怪に變じ、見る間に三人を縛り上げ、白馬は裏庭に繋いで置いて、一旦庫裡に引き揚げました。

鏡鉢の中の悟空は、あちこちとしきりに押して見るが、鉢は小揺ぎもしません。體を大きくして突破らうとすれば、鉢も一緒に大きくなり、毛を鐵鎚に變じて叩いて見ても更に効能がない。かなはぬ時の神頼み、印を結んでこんな時いつも厄介になる護法揭諦や、二十八星宿の神々に來て貰ひ、いろいろと手だてを盡した末、金龍の角で突刺した穴から、やつとのことで脱け出すことが出來ました。

悟空は口惜しくもあり、癪でもあり、飛出すが否や、いきなり如意棒で鏡鉢を叩き付けると、轟然たる響がして落花微塵に碎け飛ぶ。この物音に驚いた妖怪の大將、手下を引連れて駈付けて見ると件の有様。



「やい悟空、よくも貴様は大事な鑊を打割つたな。その代り貴様をここで膽にしてやるぞ。」  
「生意氣をいふな——一體貴様は何と申す野郎だッ？」

「俺は黄眉魔王様ぢや。貴様たちが来ると聞いて、飯の茶にしようとして待つてゐたのだ。」  
「あははははは、それより俺のこの棒くらへッ！」

兩雄死物狂ひになつてチャンチャンバラを始めたので、星宿、揭諦の面々も悟空に助太刀しようとして近づいて行くと、魔王は腰の邊から何やら白い風呂敷やうのものを取出し、パツと空に向つて投げかけた。するとこれがちやうど投網のやうに擴がつて、悟空等一同は一網打盡、逃げ出さうとしても出られればこそ。妖怪どもは大漁々々などと嘲りながら、大喜びで寺に歸り、網から引出して一々縛り上げた上、勝祝ひを始めるといふ大景氣です。

悟空はしばらく隠忍自重してゐましたが、曉方になつて妖怪どもの酔ひ倒れた頭を窺ひ、身を豆粒ほどに變じて繩を拔出し、先きにつかまつてゐた三藏師弟や、新入りの星宿、揭諦等の縛を解いてやりました。

「みんなはお師匠様を伴れて早く逃げて下さい。私は荷物を取返して、後から追付きますから……」と登音をぬすみぬすみ、奥の間へ忍び込んで行く。

酔ひ倒れてゐる妖怪どもを跨ぎ跨ぎ、やうやく三藏の袈裟その他一行の荷物を搜し出し、やれ

嬉しやと小脇に抱へて逃げ出さうとする時、あわてて一人の頭を蹴ッ飛ばした。

「あ痛い、誰だッ！」

その聲に一同驚いて起上つて見ると、悟空は荷物を搔拂つて逃げだし、捕縛して置いた連中は、藻抜けの殻で一人も居りません。

魔王怒るまいことか、それ行けッ！ とばかり、眞先に立つて脱走者を追ひかけ行き、返せ戻せと呼びます。星宿その他も名を惜む勇士ゆゑ、引返して戦つてゐるところへ、悟空も駆付け來り、兩勢入亂れての大戦争は、たうとうその日の夕景にまで及びました。

この時魔王は、例の大風呂敷を出しかけたので、悟空は「みんな、油断するなッ」と叫びながら、空中に飛上つたが、夢中で戦つてゐた外の連中は、またもや一網打盡の目に會ひ、一緒くたに攫はれて行つてしまつた。一人取残された悟空は風呂敷の偉力に驚き呆れ、何と善後の策もなく、途方にくれてただ歎息するばかりです。

すると俄かに南の空が明るくなつて、紫の雲に乗つた彌勒菩薩が、こちらの方へ渡御されるのが見えました。地獄で佛とはこのことと、悟空三拜九拜。

「菩薩様々々々、私等は今大變な目に遇つてゐます。どうぞ一つお助け下さいませ。」

「いや、わしもさうと知つて救ひに參つたのだ。實はあの妖怪の大將は、わしが使つてゐた黄眉童子といふ者で、わしの留守中に寶物の風呂敷や鑊を持逃げしたのぢや。きつと退治してやる



から安心するがいい。」

「有難う御座います。しかし彼奴はなかなかのしれ者で、私もほとほと閉口しましたが。」

「ははははは、さう心配することはない。わしは法力を以てこの山の麓に庵を結び、瓜畑をこしらへて置くによつて、お前は行つてあの妖怪をおびき寄せて參れ。」

それから後は斯う斯うと、悟空の耳に口をあてて、方略を授けます。

「はいはい判りました。ですが萬一彼奴が追ひかけて參らなかつた時は、どう致しませう。」

「左様、ではかう致せ。お前の手のひらにまじなひを書いてやるから、彼奴と戦ふ時に手を開いてそれを見せるがいい。きつと追ひかけて来るに相違ない。」

薬指に唾をつけて「禁」の字を書いて下さつた。

## 二 胃袋でダンス

彌勒菩薩が後楯だから今度こそ大丈夫。悟空は大元氣で山内に駈向ひ、覺えてゐる限りの悪口雑言をならべて罵り立てます。これを聞いた黄眉魔王はのそりのそり現はれ出で、

「ははあ、コケ猿奴ただ一人になつたので、ヤケ糞になつて殺されに來たのだな。よし、望み通り引導を渡してやらう。」

と鐵棒を振かぶつてかかつて來る。悟空しばらく戦つた上、故意に逃げながら左の手を開いて

見せると、魔王はカッと焦立ち、例の風呂敷を投げるのを忘れて、ひた追ひに追つて來ました。

悟空は瓜畑の邊まで逃げて來て、とつさにその中に飛込み、一番うまさうな瓜に身を變じてすまし込んで居る。魔王は相手を見失つて、しばらくうろろしてゐたが、やがて側の庵を見付け、中に居る老人に聲をかけた。

「爺さん爺さん、俺は喉が渴いてたまらんが、一つ瓜を譲つてくれんか。」

「はいはい宜しうございますとも、そこにある熟したのが美味しうござんせう。」

「さうか、有難う有難う。」

悟空が變化してゐる瓜をもぎ取り、何にも知らずにむしやむしや食つたので、胃袋の中に躍り込んだ悟空は得たり賢し、逆立ち、トンボ返り、馬鹿踊り、チャールストンと滅茶々に暴れ廻つたから堪りません。魔王は地べたに倒れ、のた打ち廻つて苦しみます。

「おお痛い痛い！ お爺さん、助けてください。寶丹でも千金丹でもいいから、あつたら服ましてくれい！」

老人は悶え廻る魔王を見下しながら、神々しい佛様に變り、いとも嚴かに仰せられた。

「黄眉童子よ、思ひ知つたか。お前はよもやわしを見忘れはしまいな。」

見ると舊主の彌勒菩薩ですから、魔王は頭をかかへて閉口頓首。

「御主人様、私が悪う御座いました、あやまります——あ痛ッ、ツツ、どうかこの苦しみを救つ



て下さいませ。あ痛ッ、あ痛ッ。」

涙をぼろぼろ流して苦悶するので、菩薩も憐れに思召し、例の風呂敷を取り上げてから、胃中のダンサーに聲をかけられる。

「悟空や、いい加減にして外に出ておいで。」

しかし悟空は、なかなかいふことを肯きません。

「これぐらゐぢや駄目です。まだ遺恨が晴らしきれません。」

と今度は如意棒で腹中を突き廻りますから、まるで胃痙攣と大腸カタルと膽石病が、一時に勃發したやうな痛さ。魔王は虚空をつかんであはや悶絶せんばかりです。

「悟空よ、もう宜しからう。わしに免じて命だけは助けてやれ。」

「さうですか、ぢや出ますよ。」

ボンと口から躍り出て、弱り切つてゐる魔王に握手を求めたのは人を喰つた奴。菩薩は寶風呂敷に童子に還元した魔王を包み、鑊鉞の破片を集めて元の通りに直し、悟空の深厚なる禮拜を後に、雲に乗つて南方に歸つて行かれました。

悟空は取敢へず、寺の穴藏に檻禁されてゐた三藏等を救ひ出した上、妖怪どもが残して行つた御馳走で、慰勞の宴を張る。一同隠し藝やその他で愉快に半日を遊び暮してから、寺には火をつけて焼拂ひ、星宿、提諦等はそれぞれ天上の本據へ、三藏一行は再び西を指して出發した。

### 三 柿の糞山突破

それから一ヶ月餘り經つた夏の初め、とある山の裾に差しかかると、道ばたの畑で稼いでゐた村の衆が、先頭の悟空を呼止めました。

「あんた方、あの山を越して行く積りなら、およしなされ。あの山は柿の糞山といつて、八百里の間柿の腐つたのだから、息がつまる程臭い上に、近頃は化物が現はれて、この里でも牛や豚ばかりでなく、人間も大分喰はれやした。命が惜しかつたら、あそこに行くのはおやめなされ。」

「さうですか、それは御親切に有難う——しかし私たちは天竺へ行かなくちやならないのだから、糞臭いのぐらゐは平氣だし、化物だつて法の力でわけなく退治するから大丈夫ですよ。」

「いや、それや駄目です。これまでも二三度莫大な禮金を出して、法力があるといふ、あんた方みたいな坊さんに退治を頼みましたが、いつでもあべこべにやつ付けられてしまひやした。のう皆の衆や、坊さんの大言にや随分懲々したのう。」

「うう、さうだともさうだとも。」

無様なことをいつて、一向信用しないので、悟空甚だ不機嫌。

「失敬な！ お前等は禮金目あての山師坊主に頼むから騙されたんだ。譯も判らずに糞も味噌も一緒にしやがつて……」



ぶんぶん怒つてゐるところへ、さつと生臭い風が吹いて来たかと思ふと、村人は「そら、化物が来たぞッ」「逃げる逃げる」と口々に叫んで、近所の家の中に隠れてしまひました。

悟空あたまを凝こして空中を眺めると、黒雲の中に、化物の眼と覺しく爛々たる二つの光が見えます。

「よし、俺が行つて退治して来る。悟淨と八戒はお師匠様を警護してゐてくれ。」

光を目めてに黒雲の中に飛込み、如意棒を揮つて打ちかかれれば、化物は槍を閃ひらかして無言で立合ひ、半時餘りも戦ひましたが、化物の方がややもすると受太刀になる様子。豚を喰ふと聞いて、今まで恐れをなしてゐた八戒は、これを見て急にまた強がり辯を出しました。

「何だ、アンな奴、悟空にだけ手柄をさせずに、俺が行つて打ち殺して来る。」

と、熊手をさげて空中に飛上り、二人で鋭く攻立てたので、化物は敵し兼ねて柿の糞山の方へ逃出す。二人は山麓まで追ひかけて行くと、化物は急に本相を現はして五六丈もある大蟒蛇おほまへに變り、かつと大きな口を開いて二人を睨にらまへました。

「寄らば呑むぞーッ。」

此奴、劍劇の心得があると見えます。

大きな口を開いた蟒蛇まへの恐ろしい姿を見て、八戒はわーつと頭をかかへて逃げ出しましたが、

悟空は構はず進んで行つて、べろりと呑まれてしまつた。蓋し悟空はせんだつての黃眉大王くわうびだいおうで味を占めたので、我から敵の腹中に飛込んだのです

「八戒々々、逃げなくともいいよ。今此奴を船にして見せるから、そこで見物して居れ。」

如意棒いじやうぼうでぐいぐい腹の中を突いたので、蟒蛇まへは苦しがつて頭と尻尾を空に反らせ、ちやうどゴンドラのやうな恰好になりました。安心した八戒は、膝小僧を抱いて地べたにえんこし、のんきに見物してゐます。

「うまいうまい。しかし兄貴、帆柱がなくちや、恰好がつかないね。」

「それもさうだな——では、これから帆柱を立てまして、船を走らして御覽に入れまあす。アイ

キタ……」

チャンカチャンカチャンカなどと囃子はやしの真似をしながら、如意棒で背中を突き抜いて押立てたので蟒蛇まへは益々藻掻き苦しみ、もと来た道へのたり出す。八戒はその背中に跨がり、船大將然と威張りくさつて歸つて来る途中、蟒蛇はたうとう死んでしまつたので、悟空腹から飛出し、エンヤラエンヤラ二人で引きずつて里へ戻りました。

村人たちは、多分二人は化物の餌食になつたらうと噂し合つてゐるところへ、大蛇を退治して悠々と引揚げて来たので、急に悟空等を尊び、村を擧げての大歡待です。

「この御恩は孫子の代まで忘れません。ところでこのお禮は、いか程いたしたらいいもので御座



いませう。村中の金で足りずば、大蛇だいじゃの見世物を打つて廻り、木戸錢をみな差上げましても、宜しう御座いますが……」

「馬鹿をいひなさんな。俺たちは獻金目あてに、何か酬いようと働いたんぢやないから、一文だつて金は貰はないよ。」

某大官などとは違ふ悟空は、一應かう断わつたが、折角の厚意を無にするのも損だから、柿の糞山を越す時の食糧だけは、心配さしてやらうと考へ付いた。

「だが、あの山を越える時、糞だらけでは、食糧を求めるところがなからうと思つて、弱つてゐるんだが、何とか方法があるまいかね。」

「それは何よりおやすい御用で御座います。こんな大恩を受けたんですもの、何十日かからうと、きつと食ひ物に御不自由をかけは致しません。」

「それは有難う。なあに何十日なんて、そんなに長くかかりやしないよ——どうだらう八戒、これはお前でなくちや出来ん仕事だが、一つ糞山に道をつけてはくれまいか。みんなが食物には不自由させんといつてくれてゐるが……」

おだてられて八戒、もとより豚の性ゆえ糞は平氣ですし、それに御馳走が鱈腹食へるといふので、即座に引受けました。

「さういふことなら、一番骨を折つてやらうかな。なに食ひ物さへ續けや、あんな山は平チャラ

だよ——ではドッコイショのショツと……」

うーんと延びをすると、見る間に身を變じて、丸ビル程の大きな豚になつた。それツといふので村人は八方から餅、饅頭まんぢう、餛飩うどん、強飯こぼし、おでん、燗酒あらかじあらゆる食物を持つて来て、山のやうに積上げるのを、八戒はべろりと平げて勇氣をつけ、一行の先に立つて、いよいよ道路開鑿かいさくに取りかかる。

何しろこんな大きい豚が、暴風のやうな鼻息で糞土ふんちを拂ひのけるんですから、一息で五六丁づつはけし飛びます。數百の村人が絶えず駆付けては、取りかへ引きかへ食ひ物を供給するので、八戒の元氣は加はるばかり。三藏等は鼻をつまんで、その後に従ひ、三日三晩でさしもの難所、八百餘里の柿の糞山を越えることが出来ました。けだし八戒、近來の大手柄と稱さねばなりません。



## 朱紫國を救ふ

### 一 賈醫者悟空

送つて来た村人と別れを告げ、進むこと一ヶ月ばかりで、朱紫國の首都に差しかかりますと、辻々に掲示がしてあつて、町の人々が不安さうにざわついてゐます。見ればこの國の國王が御不例なので天下に名醫を求めるといふ宮内省の求人廣告です。

「醫師を求む」の掲示を見た悟空は、獨りうなづきながら、三藏に相談をかけました。

「お師匠様、私がつつ出かけて行つて、國王の病をなほしてやらうと思ひますが如何でせう。」

「冗談を申すな、お前は醫者の心得などはまるきりないではないか。それでどうして國王の病氣が診られる？ また悪戯をしてわしに難儀をかけるのぢやないか。」

「さう馬鹿になさつたものぢや御座いません。細工はりうりう仕上げを御覽じです。まあ私と一緒に來て下さいまし。」

胸中成算ある様子に、三藏も兎に角同意し、宮内省に出頭して應募の旨を通じますと、速かに診察してくれよとの御沙汰です。

悟空はドクトル然と、髯などひねりながら病室に伺候しますと、國王は蒼い顔をして、頻りに溜息をついてゐます。悟空勿體らしく脈を計つたり、打診したり、舌を出させたり、いろいろのことをしてゐましたが、その間にこの病氣の原因は、何か心配があるためだと、見當を付けた。「ははあ、御病氣はヒポコンデリー即ち憂鬱症で御座いますな。何か心配事か氣の鬱することがあられて、その塊が腹の中に溜つてゐるので御座います——え？ さうで御座いませう、どうもさうだらうと存じました。」

「全く孫博士の診察通りぢや、何とか鬱氣の散する藥を調合してくれまいか。」

「それは造作も御座いません、ただ今すぐに調合してお届けします。」

別室に下つて、藥劑官から巴豆といふ下し藥を取寄せ、これに鍋墨やら、白馬の小便やらいい加減なものをまぜて丸藥をこしらへ、眞面目くさつてこれを國王の前へ持つて來ました。

「これは拙者の苦心發明に成る秘藥烏金丹で御座います。これを召上りますれば、鬱氣の塊りが悉くくだつて、きつと御氣分がさらりとなられます。」

「ほう左様か、それは千萬忝ない。」

何しろ猛烈な下し藥が入れてあるんだから、服むと直ぐ腹がごろごろ鳴り出して、國王は便所へ立ちづめ。忽ち腹の中が空つぽになりましたが、氣は心で何となく氣分爽快を感じます。所謂、精神療法、鰯の頭も信心からといふやつでせう。



「おお、大變い気分になつた、全く天下の名醫、天下の靈藥ぢや。」

「ははははは、なかに譯のないことで——ところで先刻の拜診によりますと、陛下には何か御心配があられるやうですが、私にお洩し下さるわけには行きますまいか。」

「恥かしい話だが、命の親のおたづねゆゑ話させよう。一通り聞いて下さい。」

國王が涙ぐみながら、話し出した心配の種といふのはかうです——王の妃は金聖皇后と稱して近國にまで聞えた美人、兩人の交情蜜の如く、去年三月端午の節句に仲よく酒を酌交はしてゐるところへ、豫て皇后に横戀慕してゐる隣國の太歳といふ悪大王が、女人掠奪に襲つて來た。皇后をこつちへよこせばよし、いやだなどとぬかすなら、朱紫國の人民を皆殺しにしてしまふといふのである。元來柔弱な國王、戦ふ力もなく、泣く泣く皇后を渡してやつたが、その後も度々來ては皇后の侍女にするといつて美しい腰元を奪つて行く。この暴虐に對する鬱憤、愛妻の身の上を案ずる心痛が凝り溜つて、遂に氣鬱病にかかつた——といふわけ。

俠骨の悟空は、國王の悲嘆、太歳の沒義道を聞いて、猛烈に義憤を發し、持前の赤い顔を一層赤くして怒りました。

「け、け、怪しからん奴だ、生かして置けない。私がすぐ出かけて行つて、その太歳だか小歳飯だかを殴り殺し、皇后様を奪ひ返して來ます。」

「ほう、博士は醫術ばかりでなく、武道の方も達人と見えますな。若しも金聖を連れ歸つて下さつたら、自分はどう何にもいらぬ。私は臣下にくだつて、博士にこの國の王位を酬いませう。」  
この王様、餘程のサイノロジストだつたと見えて、奥さんのために至尊の榮位をも抛たうといふほどの御執心です。

## 二 デレデレの太歳

太歳大王ぐらゐを退治するのは、悟空としては、ほんの一舉手一投足の勞。これで國王になれて一生樂に暮せるんだから、普通なら、すぐ賭けに行くとところのだが、わが悟空はそんなことは致しません。

「陛下、私は懲得づくでやるのではないから、何も酬いなどはいりません。一刻も早い方がいいから、これから行つて來ます。」

「でも、あすこまで三千里もありますから、乗馬の用意がなくては……」

「ははははは、陛下は廻りくどいことを仰せられる。三千里ぐらゐはこの燗酒の冷め切らぬうちに往復が出來ます。」

ぐつと一杯引かけて、觔斗雲に乗るが否や、忽ち姿が見えなくなりましたから、國王始め臣下一同、口をばかんとあけて、ただ驚歎するばかり。



悟空は一飛びで、敵の本城なる麒麟山の近傍に到り、怪しまれぬやう少年に身を變じて、その邊を偵察してゐると、一人の妖怪が文箱を持つて來ると行き遇つた。

「小父さん、そんなものを持つて何處へ行くの？」

「俺かい、俺はね朱紫國へ行くんだよ。今度朱紫國と戦争をするので、大王様の果し狀を持つて行つて來るんだ。」

「へえい、どうして戦なんかするの。」

「いろいろのことを聞く子供だな——何でも去年だか朱紫國から攫つて來たお妃は、棘のある着物を着てゐるので、今でも王様が手を付けられないんださうだ。それで代りに毎月一人づつ官女をお妾によこさせてゐたが、近頃よこし過ぎるので、喧嘩を吹つかけるその手紙を持つて行くのさ。これを届けて來れば、たんまり御褒美が貰へて、うまい寢酒も飲めるといふわけだよ。」

「それはうまい役を仰せ付かりましたね。ぢやあ氣を付けて行つていらつしやい。」

と送つて置いて、後から如意棒でばかり。ただ一打ちに撲り殺し、懷中を探つて見ると、軍隊手帳やうのものに、姓名官職などを記してあります。

「ははあ、此奴の名は有來有去といふのか。しかしかう一息に殺されては去があるけれども、來は無いわけだ——兎に角念佛だけでも上げてやらう。ナマイダブナマイダブ。」

ひどい奴があつたもので、その着物を引つべがして有來有去になりすまし、のこの麒麟山へ

復命にと乗込みました。大王はもとよりこれを、贖物とは氣が付きません。

「おう、有來有去か、待兼ねた。して朱紫國の返事はどうであつた。」

「大王様、どうもかうも御座いけません。私があのお手紙を見せると、いきなり二三十人の家來に寄つてたかつて袋叩きにされ、城門の外におつぼり出されました。あの様子では、逆に向うから押かけて参りさうです。」

「猪口才な奴等だ。奴等が如何に大勢で押寄せて來たところが、あの寶物の紫金鈴で毒火を起せば、すぐ塵殺に出来る。飛んで火に入る夏の蟲ぢや——したがあの金聖は朱紫國と戦争をするに聞いて、大變心配して居つた様子ぢやから、あれの部屋に行つて今見て來た通り、或はこつちが負けるかも知れませんが、慰めてやつてくれ。」

「畏まりました。決して御心配にならぬやうと、私からよく申し上げて見ます。」

有來有去の悟空、しすましたりと奥御殿なる皇后のお部屋に参りますと、金聖は憂はしげな顔に涙をたたへ、櫺子窓に倚りかかつて嘆息してゐます。その様子は海棠が雨に惱むといつたらしいか、コスモスが秋風に虐まれるといつたらしいか、何にたとへやうもない凄艶さで、さすが物堅い悟空も、とろりとなつて思はず眼尻を下げたくらゐ。原文にはその様子を形容して、

王容寂寞胭脂冷、雲鬢蓬鬆翠黛空、自古紅顏多薄命、慳々無語對東風

とありますから、よろしくこれで御想像を願ひます。太歳大王が振りぬかれて、なほ思ひ切れ



ぬのも實際無理はありません。

悟空は金聖の側に膝行り寄つて、うやうやしく言上する。

「これは皇后様でゐらせられますか。私は御家來の有來有去と申す者で御座いまするが、今日大王の御使ひで朱紫國に参り、あちらの國王様にお目にかかつて参りました。」

「それは耳寄な。して我君にはお丈夫でおはしたか、何かわらはにお言葉がなかつたか。」

「國王様は、明暮れ陛下のことを案じてゐられます。お言傳がありますが、お人拂ひを願はれますまいか。」

「おお左様か——これ腰元ども、しばらく遠慮してたもれ。」

侍女たちのゐなくなつたのを見て、悟空はひらり本相を現はしますと、驚いたのは金聖皇后、あつと魂消て逃さうとした。それはさうでせう、家來と思つてゐたのが、急に赤ツ面の猿面冠者に變つたんですから——悟空妃の袖を捉へて、

「暫く暫く、私はこんなこはい顔をしてゐますが、決して怪しい者では御座らん、師匠について天竺へ經文を取りに参る孫悟空と申します者。この度お國に立寄り、陛下の御災難を承はつて救ひ出しに参つたので御座る。どうぞお静かにお静かに。」

「おお左様でありましたか、若しわらはを救つてたもらば、御恩は死んでも忘れませぬ。」

「いや、必ず御心配遊ばすな。だがこの國には地雷火にもまさるといふ、稀代な寶物があると承はりましたが、御存じで御座いますか。」

「それは火と、煙と、砂を吐く三つの金鈴のことで、始終王が腰に付けて居ります。火と煙は大したことはありませんが、その砂は大變な毒で、口へ入ると命が無くなると聞いてゐます。」

「それは油斷のならぬ代物だ——かうつと、如何で御座いませう。お辛いで御座いませうが、しばらくの間あの大王に離れた風をなさつて、何とか油斷するやうにして戴けますまいか。その際に私が金鈴を盗みますから……」

「王の顔を見るのも厭で御座いますが、では我慢してやつて見ませう。」

### 三 閨房に風の群

二人で竊盗を共謀してから、悟空はまた有來有去の姿に變つて、大王を迎へに行きました。

「申し上げます。皇后様からは是非いらして戴きたいとの御招きで御座います。」

「ほほう、それは珍しい。今日はどうした風の吹廻しであらう。」

「いやそれは、私がうまく作り事を申し上げたからで御座います。皇后様が朱紫國のことを問はれましたので、國王が別にお妃を娶つて、ひどく寵愛してゐると嘘を申しましたら、急にお心が變られたと見えて、すぐ大王様をお招びして来いと仰せで御座いました。」



「左様か、お前はなかなか氣の利く奴ぢや。いづれ朱紫國を平げたなら、お前を長官にして遣はすぞ。」

女を取持つて上役に引立てられるのは、日本にもあるやうだ。大王は大ほくほくで、鬢なんか剃つてめかしこみ、いそいそ奥御殿に出かけて行きますと、金聖はとて色つぼい眼をして出迎へ、手をとつて招じ入れます。

「ようこそいらつしやいました。今日は是非御寛りなすつて下さいませ。さあ何はなくとも、わたしのお酌で酒一つ召上りましたな。」

と、ぐいと引寄せて、しなだれかかれば、大王はもう鹽をかけられた蛞蝓同然。

「うむ、さうかいさうかい、飲むよ、飲みますとも。だがお前の身體にさはると、また棘で刺されはせぬかい。」

「何をつまらないことを仰有いますの——わたしはとうから、あなた様を戀ひ慕うて居りましたが、まだ枕を交さぬのには、一つ理由が御座います。朱紫國に居りました時分は、あちらの王は寶物でも何でも見せてくれましたのに、あなた様は紫金鈴とかいふ寶物を、わたしに隠していらつしやるでは御座いせんか。夫婦の仲でありながら、そんな水臭い仕打をなさるので、わたしもつい御心に従はなかつたので御座います。貴方といふ方は本當に疑り深い方で御座いますのねえ。」

身體をくの字にひねつて、しくしくすすり泣きながら、怨み言を述べる。大王たるもの、とるけざらんとするも豈得べけんやです。

金聖の手臂を眞に受けて、大王の顔の紐は極度にゆるみました。

「はははは、なあんだ、そんな理由だつたのかい。ぢや見せますよ、それこれが火を起す鈴、こつちが砂を吹く鈴だ。」

腰に下げてゐた袋ごと取りはづして、前に置いたのを、金聖は珍らしさうにいぢつてゐます。

これより先、悟空は催眠術を以て皇后の侍女を悉く睡らせ、自分は春嬌といふ侍女に姿を變じ、隣室に控へてゐましたが、大王が金鈴の袋をはづしたのを見て、わが身の毛をむしり取り、これを數百疋の虱にして、襖の隙間から大王の着物に吹きかけました。

いい機嫌になつてゐた大王は、急に所々方々痒くなつて來たので、ぼりぼり掻きながら、指先に觸つた蟲をつまみ出して見ると、いはゆる千手觀音様。これが何疋も出て來たから、大王すこぶる赤面の態です。

「おやおや、今まで虱なんかにたかられたことがないんだが、どうしたんだらう。」

「まあ氣味が悪い。貴方はしばらく御下着を洗濯なさらなかつたので御座いませう。兎に角私がつてあげますから、着物をお脱ぎ遊ばせ。」



「左様か。いやとんだ恥さらしをしたな。」

「ほほほほほ、そんなことは御座いませんわ——おやおや、この袋にも澤山付いてゐる、これ春嬌や、お前ここへ来て、虱取りの手傳ひをしておくれ。」

いやはや大變な騒ぎです。かねて謀し合せてゐた賈春嬌の悟空は、畏まつてその部屋に入り、大王が金聖とともに虱取りに夢中になつてゐるのを見済まし、三本の毛を抜いて三つの賈金鈴をこしらへ、木物の方を失敬して、そうつと裏口から脱け出しました。

やがて悟空は表門の方へ廻り、扉をがたがた叩いて、大聲で罵り立てる。

「やい太歳たいさいの虱しむたかり！ 孫悟空様が金聖皇后を取返しに來たから、溫和せんなしく返上しろッ。」

もう少して日頃の思ひを遂げようとした矢先、虱しむにつづいて今度は悟空が邪魔に出たので、大王烈火のやうにいきどほり、大斧おほきと金鈴きんねいをおつ取りさま、越中あつちゆう禪ぜん一本の姿で飛出して來た。

「貴様が噂に聞くこけ猿か、貴様と戦つて勝つのは容易たやすいが、その前に金鈴きんねいの奇瑞きぎよるを見せてやるから、逃げずにそこで見物しろ。」

「ぢや、俺も金鈴を振つて見せるから、貴様こそ逃出すな。」

「何だと？ 貴様も持つてゐるのか。だが俺のは太上老君が八卦爐はつぱろで鍛へ上げた、天下に二つとない寶物だ。それを故あつて俺が授かつたのだ。」

「俺のもそれと同じ物だ。しかし俺のが雄おとこで、貴様のは雌メだから駄目だよ。」

「馬鹿な、鈴かねに雌雄おとこがあるかい。見て居れ、今ひどい目に會はしてやるから。」

「ふふん、首尾よく参りましたならお慰なぐさみ……」

悟空が嘲笑あざわらひながらひやかす間に、先づ第一の鈴を取出して振りましたが、案に相違して何一つ出ません。大王焦躁あせつて、第二第三と次々に振立てて見ても、同じ始末なので、呆れ返つてただまごまごするばかり。

「ははははは、お氣の毒さま。ぢや今度は俺のを振つて見せよう。」

と三つ一緒に振つたので、火と煙と砂とが一度に激しくほとばしり出る。そこへ悟空は呪文じゆもんを唱へて旋風を捲起したから、素つ裸の太歳大王逃げ場を失ひ、あはや焼け死ななばかりになつた。

#### 四 魔王は唐獅子

その時南の空から光明くわうめいが輝かがいて、觀世音菩薩くわんせいおんぼさつがおいでになりました。

「悟空や、わしに免じてあれを許してやつてくれ。」

「おお、觀音菩薩で御座いますか、一體彼奴は何者で御座います？」

「あれはわしの乗る金毛きんもうの唐獅子たうししぢや。先年番人の童子が居眠りしてゐる隙に細こを咬か切り、金鈴きんねいを盗んで姿を晦くましたのだよ。」

「さうでしたか、ぢや金鈴は私からお返し致します。ですが彼奴は他所の妃きよきを奪つたりして、實



に悪い野郎ですよ。」

「それもあらうが、その妃には操を汚されぬやう、わしが弟子を使によこして、荆棘の衣裳を與へて置いた苦ぢや。だからまあ今度のところは勘辨してやつてくれ。」

「外ならぬ菩薩の仰せですから、宜しう御座います、勘辨致しませう。」

そこで菩薩は柳の葉に水をひたして火の上に振りかけると、猛火は瞬く間に消えてしまひ、半死の大王は見現はされて本相に還り、頭を垂れて罪を謝します。菩薩悠々とその背に跨がり給ひ、南海さして歸られました。

悟空は麒麟山の小妖怪を鑿殺しにした上、金聖皇后を連れて朱紫國に歸り、これまでの經緯、中にも皇后が貞操を完うしたことを物語りますと、三年の間互に戀ひこがれてゐた兩人、相抱いてた嬉し泣きに泣くばかりです。國王は前言を履んで王位を譲らうと申しましたが、固より辭して受けず、さまざまの歡待を受けた上、心からなる感謝の詞を後にして、次の旅路に就きました。

## 女郎蜘蛛

### 一 裸婦と八戒クン

一行はしばらく無事に旅を續けて翌年の春を迎へ、うらかな陽光を浴びつつ、桃の花咲く平和さうな一村に差しかかった。平常物靜かな三藏も、何となく心が浮々する様子。

「今日は天氣もいから、わしがその邊の人家に行つて、食を求めて來よう。お前たちはしばらくここに休んで居れ。」

三人の弟子が、我々が行つて來ませうといふのも肯かず、鉢を携へて出かけましたが、二三時間経つても歸つて参りません。

悟空は心配になつたので、村内に駈け行き、彼方此方と探しまはるうち、なんとなく妖氣が感ぜられる一軒の家を見付けました。怪しいと睨んで戸外にたたずんでゐると、七人の若い女がべちやくちやしやべりながら出て來る様子に、悟空急に身を蒼蠅に變じ、一番後の女の頭にとまつてついて行きます。

やがて一里ばかりも來た山間に、岩を掘つて温泉を湛へた、廣さ五六坪の露天風呂がありました。



た。一同着物を脱いでその中に飛び込み、誰も見てゐるものがないと思つて、櫛ぐり合つたり、湯のかけつこをしたり、大したふざけやう。裸女亂舞の光景は、正にエロ百パーセントです。「おお草臥れた。もういい加減にして家へ歸りませうよ。何だかお腹が空いて、早くあの和尚が食ひたくなつたわ。」

「私もさうよ。ですが歸つたらどんな風に料理しませう？」

「さうねえ、丸焼にしたらどうでせう。きつと美味しいわ。」

「それがいいわ。」

「それがいいわ。」

口々にいふところを聞くと、三藏は彼等の家に捕はれてゐるらしい。悟空心中に考へるには、今彼等を打殺して師匠を救ひ出すのはわけがないが、婦女子を對手にしたとあつては俺の名がすたる。よし、謀計を以て彼等を動けないやうにして置き、その間に師匠を助けに行かうと、今度は身を大鷲に變じ、脱いで置いた着物を、湯もじからズロースから全部搔つ攫つて、虚空遙かに舞ひ上つた。七人の裸女はあれよあれよと騒ぎ立てたが、どうすることも出来ません。

悟空はその足で女たちの空巢を襲ひ、家捜しをして見ると、三藏は細い糸でがんに絡みに縛められ、穴藏の中に抛り込まれてうんうん唸つてゐます。「お師匠様、どうしてこんな目に會はれたんです。」

「おお悟空か。わしが齋を求めにこの家へ立ち寄ると、女どもが臍の孔から糸を吐き出し、寄つてたかつてわしを縛り上げたのぢや。大方、彼等は蜘蛛の精に違ひない。まったく、ひどい目に會はせよつたよ。」

「だから私どもに言付けなさればいいのに、いはないことぢやないぢやありませんか。」

「いや懲々した。これからは餓死するとも、自分で齋を貰ひなどには出かけないよ。」

「でもまあ御無事で安心しました。」

三藏の縛しめを切りほどいて、八戒と悟浄の休んでゐるところへ歸り、右の物語を致しますと、八戒は肩胛張つて大憤慨の態です。

「何だつて兄貴はまた、その女どもを打殺して來ないんだ？ お師匠様に仇をした憎い奴等ぢやないか——よし、俺が行つて退治してやる。」

と熊手を肩にどんだん駈出して、山の方へ向つて行きました。實は八戒、憤慨してゐるわけでも何でもないんですが、女が七人も露天風呂に浴みしてゐると聞いて、例の好色心から、怒つた風を装ほひ、それを見物に出かけたので、つまり、敵は本能寺にありといった譯なんです。

着物を攫はれた女どもは、出ることもどうすることも出来ず、閉口し切つてゐるところへ、八戒先生にたにた笑ひながらやつて來ました。



「やあ姐さん方、今日は——私にも一風呂浴びさせて下さいな。」

いきなり着物を脱いで飛込んだので、女どもは狼狽るやら、怒るやら。

「まあ失禮な、しかも出家でゐながら、女湯に入るなんて……」

「全くだわ、みんなして叩き出してやりませう。」

と一齊に打ちかかつて来たが、八戒は水練が達者ですから、湯の中に潛つて一疋の鯨に變り、彼方へにより、此方へにより、何としてもつかまりません。そして女どもの股の邊をくすぐつたり、お臀を撫で廻したり、種々様々な悪戯をしますので、とてもお話にならんやうな大騒ぎです。

永いことふざけ廻つた八戒、飽喫したエロ味と湯氣のため、遂に目がまはりさうになつて来た。ふうふうしながら岸に這上つて、本相に還ると、怒り切つてゐる女どもは、各々臍の孔から絲を繰り出し、見る間に八戒を巻込んでしまひ、もう恥も外聞も構はず、丸裸のまま村に引揚げて行きました。この邊の珍風景は、賢明なる讀者諸君に於て宜しく御想像ください。

八戒は哈度滿の中の蛹のやう、拔出さうにも出口がなく、ただごろごろ轉げまはつて居るうちに、やつと小さい破れ目が出来たので、やうやうそこから這ひ出し、皆のゐるところへ歸つて来た。しかし自分の醜態は、口を拭つていひはしません。

「命だけは可哀さうだから助けてやつたが、小ッ酷い目に會はせて来たよ。兎に角、ここはよく

ななさうな土地だから、早く出かけるとしよう。」

一同を急ぎ立て、この村を出立しました。

一方家に歸つた七人の女は、夕飯のおかずと思つた三藏が、逃げ失せてゐるので口惜しくてならない。何とかして再び彼奴等をつかまへ、着物を盗まれた恨みも一緒に返してやらうと、打揃つて隣村にゐる叔父、黄花觀道士の許へ相談に出かけた。

## 二 脇の下に千の眼

その相談の最中へ、ちやうど三藏の一行が來かかつて齋を求めましたから、道士の方は思ふ壺です。七人に目くばせして別室に隠した上、慇懃に玄關に出迎へました。

「これはこれは、高僧達には、ようこそお越し下された。さあすつと奥へお上り下されい。」  
手を取らんばかりにして招じ入れ、道士自ら茶を煎じて、一同に獻じます。

悟空は、この道士がいやに丁寧なものと、茶を注ぐ時の様子が怪しかつたので、何となく變に思ひ、しばらく茶碗に口を付けずにゐましたが、他の三人は何心なく、これを飲むが否や、うんと腹を押へて、その場に打倒れた。

「この畜生！ 何の怨みがあつて、お師匠様に毒を飲ませたツ。」

と叫びさま、悟空は持つた茶碗をぱつと投げつけたが、道士もさるもの、シングル・ハンドで發



止とばかりナイス・キヤツチ。

「怨みはそつちに覚えがあらう。貴様は隣村の温泉で、女達に大恥をかかせたではないか。」

「さては貴様は、あのすべたどもの身内だな。よし、かうしてくれる。」

耳の内から如意棒を取出して打つてかかると、道士も剣を取つて立ち向ふ。その時奥の間から七人の女が躍り出で、臍から例の絲を引出して、一齊に投げ付ける。さながら謝肉祭に於けるコンヘツチか、歌舞伎芝居でやる土蜘蛛の絲のやうです。

悟空はこれに包み込まれては大變と、身を躲して空中に飛上れば、道士も續いて追ひかけ來り、雲上で戦ふこと數十合。そのうち道士はやや受太刀になるかと思えたが、急に肌抜きになつて兩手を上げると、脇の下に一千の眼玉があつて、それが燦爛たる金光を放ち、一時に悟空に射かけます。ちやうど眞正面からサーチライトで照されたやう、さすがの悟空も眼がくらんでどうすることも出来ません。

しかし愚圖々々してゐたんでは、相手に斬り込まれる。悟空咄嗟に一計を案じ、地上に飛び降りるや、素早く土龍に變じて土の中にもぐり込みました。

土龍になつた悟空は、せつせと土を掘り分けて、二十里ばかりも來たと思ふ頃、やうやく首を出して表を見ますと、ここまでは金光も届かぬ様子です。しかし土もぐりですつかり精根を費や

したので、この上逆襲する氣力もなく、ただぼんやりして途方にくれてゐました。

そこへ喪服を著けた中年の女がしくしく啜り泣きながら、通りかかったので、悟空は不審に思つて聲をかけました。

「もしもし奥様、どうしてそんなに泣きになるんです。何か御不幸があつたのですか。」

「はい、どなた様か存じませぬがよくお尋ね下さいました。實は私の良人が、黄花觀道士といふ者のために、毒殺されましたので、その墓詣りに参るところで御座います。」

「ほう、それは奇妙な因縁で、私の仲間も三人、その道士に毒殺され、讐を討たうにも手に負へぬ奴で、弱り切つてゐるところです。一體あの道士は何者でせうか。」

「御存じないのですか。あれは別名を百眼魔君ともまた多目怪とも申しまして、この邊切つての強悪者で御座います。何でも毘藍婆菩薩様にだけは敵はぬとか聞きましたが、その菩薩様もここから二千里もある紫雲山に居られるので、お願ひに参る譯にも行きませんし……」

「それはいいことを教へて下さつた。二千里ぐらゐはほんの一跨ぎです。失禮ツ。」  
と、ひらり舳斗雲に乗るや、フールスピードで飛び去つた。

間もなく紫雲山に着陸すると、洞窟の中に晝寢をしてゐた毘藍婆菩薩らしいお婆さんが、むくり起上つて、向うから呼びかけました。

「あんたは悟空殿ではないか。何の用でここへ來なすつたのぢや。」



「如何にも悟空で御座いますが、どうして私を御存じですか。」  
「知らないでかいな。あんたは先年ひどい亂暴をして、天上國を騒がせたのぢやらう。だから誰でもあんたの顔を見知つてゐますのぢや。」

「それはどうも、とんだことを覚えていらして、恐縮千萬です。ですがただ今では佛門に歸依して、決して亂暴なんか致しません。今度も天竺へ經文を戴きに參る途中ですが、あの黄花觀道士のために、三藏法師様と仲間の二人が毒害されてしまいました。どうぞお願ひで御座いますから、あの悪者を退治して下さいませ。」

「それは氣の毒な。わしは三百年來隱居してゐますが、さういふことなら、一緒に行つて救つて上げませう。」

二人で雲に跨がり、妖怪の住家に来て見ると、道士は大肌脱ぎになつて、七人の姪に酌をさせながら勝祝ひをやつてゐます。悟空うっかり見付けられて、あの脇の下の眼玉に睨まれてはと尻込みしてゐますが、菩薩は悠々迫らずおもむろに降り立つて道士の近くに進み、手にした縫針をさつと投付ければ、一同昆蟲の標本みたいに床の上に刺し留められ、血反吐を吐いて死んでしまつた。見れば道士は一丈もあらうといふ大百足、七人の女は二尺ぐらゐの女郎蜘蛛です。

悟空はとりあへず奥の間に飛び込んで見ますと、三藏等三人は既に絆切れてゐる様子なので、わあつと聲を揚げて泣出しました。

「お師匠様、お情けない姿になりました。これも私が至らぬからで、何ともお申し譯が御座いませぬ。取残された私はこれからどう致しませう。お師匠様、お師匠様、おーいおーい。」

身も世もあらぬ愁歎ぶりに、菩薩も同情の涙禁じあへず、

「悟空殿や、さうお泣きなさるな。あんたの忠義にめでて、三人の命を取戻してあげませう。」

と懐から菩薩秘藏の解毒丸を取り出し、一粒づつ三人の口に吹入れる。すると三人とも急に小間物屋を開店し、悉く腹中の毒物を吐いて正氣にかへつたので、悟空は天に歡び地に喜び、ありし次第を細々と物語つて、一同で心からの感謝を捧げます。

菩薩も禮を返し、前途の無事を祈つた上、ちよいと大百足の死骸を掴み上げて、紫雲山に歸つて行く。餘り人を賞めぬ八戒も口あんぐり。

「何て強い婆だらう。」

と、ただただ驚歎するばかりでした。



## 悪魔三兄弟

### 一 名器陰陽二氣瓶

頃は秋の初めつ方、一行は樹木鬱蒼たる大きな山の手前に差蒐つたが、山の周圍に大勢の番兵が徘徊してゐて、何となく理由ありげに見えます。怪しと睨んだ悟空は、一行を待たせ置き、例の傳で同じやうな番兵と變化し、彼等の仲間に入つて、それとなく事情を探つて見ると、他人事ではない、身の上に降りかからんとする一大事だ――。

何でもこの山の獅駝洞に住む三人兄弟の魔王、唐の國から来る和尚を喰へば、不老長生の藥になるといふので、通りかかるのを待設けてゐるが、弟子に孫悟空といふ暴れ者が居つて、一筋縄では行かぬ奴と聞き、かくは哨兵を出して、警戒してゐるのだといふ話です。

悟空は心中にせせら笑ひながら、一人哨兵の群を抜け出で「御注進々々々」と叫んで山内の獅駝洞へ駆け込みました。中には大勢の手下が甲冑を着けて出動準備を整へ、一段高い正面に三魔王が威容巖然と居列んでゐます。

「どうしたのぢや。唐の國の坊主がやつて来たか。」

「はい、坊主はまだ見かけませんが、悟空奴がやつて参りました。」

「どうして悟空といふことが判つた？　そしてどんな様子をして居つたか。」

「身の丈十丈も御座いませうか、見るからに強さうな面構へをした奴で御座います。谷間に蹠踏つて一生懸命に鐵棒を磨きながら、久しくこの如意棒を使はんが、今日こそこれで魔王どもを叩き殺してやれる、たとひ門を締切つたとて蒼蠅になつて、隙間からもぐり込んでやると獨語いで居りました。それで悟空だと判つたので御座います。」

「左様か、それは一大事ぢや――これ者ども、聞く通りの次第だから、若しこの中で蠅を見付けたら、皆して叩きつぶせ。きつと申し付けたぞ。」

さながら蠅捕デーの御布令のやうです。これを聞いた悟空は、そつと身の毛を抜いて一疋の蒼蠅とし、一番年上の魔王の顔へ飛ばしてやると、老魔王吃驚仰天。

「うわーつ、そらこそ悟空が來をつた。早くつかまへてくれッ！」

と劍を抜いて滅茶苦茶に振廻す。他の二魔王や數百の手下も各々得物を押つ取り「それッ、彼方へ飛んだ」「こつちへ來たッ」と上を下への大騒ぎに、悟空可笑しくてたまらない。我慢しきれず、くすくす笑つた拍子に、うっかり本營の悟空の顔に返つたので、慌てて元の哨兵の相に變らうと、もごもご顔を動かしてゐるところを、年若の魔王に見付けられた。

「ヤッ、彼奴が悟空だッ！　捕まへろ。」



との激しい下知に、悟空は逃げ出す暇もなく、大勢に組伏せられてしまひました。けだし悟空近來の大縮尻です。

魔王は悟空に隱遁の術があると聞いてゐるから、早速、陰陽二氣瓶と稱する傳來の寶物を取り出して、その中に封じ込みました。この瓶は人間を入れて置くと、半時間もたたないうちに、どろどろに溶けてしまふといふ恐ろしい瓶なのですが、悟空はそんなこととは知りません。一つゆつくり晝寝でもしてから、脱出策を講じてやらうと呑氣に構へてゐますと、瓶の中がだんだん熱くなつて、早やお臂の肉が焦げかかつて來た。

さすがの悟空もこれには面喰ひました。瓶の内側を狂ひ廻つて彼方此方突付いて見たが、どうにもならない。このままここで蒸焼にされて死する我身は厭はねども、後に残した師匠や兄弟が、どうして天竺へ行けようぞと、ぼろぼろ涙をこぼして泣きましたが、ふと先年蛇盤山で觀音菩薩から救命の毛を授けられたことを思出し、後頭部に手をやつて見ますと、果して三本の硬い毛が付いてゐます。悟空喜んでその中一本を拔取り、これを鋭利な錐に變じ、一心不亂に瓶の底を揉立てました。

外では三人の魔王が、前祝ひの酒を飲みながら、

「もう間もなくソツプになつてしまふだらう。此奴さへ片付けりや、三藏は我々の手に入つたも同然ぢや。」

など大恐悦の態です。

實に、一心は岩をも透す、寢小便は蒲團を透すの喩への通り、さしも名器の陰陽瓶も、一心不亂の錐先に破られて、やがて小さい孔があきました。悟空は身を羽蟻に變じてその孔から抜け出し、急いで三藏等の居るところへ歸つて來た。

「おお悟空か、餘り長いのでどう致したかと心配してゐた。して山の中に怪しい者でも居つたか。」  
「いやどうも大變な奴が居つてえらい目に遇はされました。何しろ、三人の魔王の外に、家來が何千人と居ますから、とても私一人では敵ひません。今度は八戒を加勢に頼んで戦つて來ようと思ひます——おい八戒よ、俺と一緒に居つてくれ。」

八戒もかう言はれては尻込みが出來ません。二人で雲に乗つて獅駝洞の門前に駈付け、大聲でわめき立てました。

「こら、魔王の鼻糞野郎、大唐の勇士猪八戒様が加勢に參つた。出て來て尋常に勝負をしろ！」  
「おい、お氣の毒だが、孫悟空はそんなへちまよこ瓶で參りはしないよ。とうの昔に脱け出して來たんだ。口惜しかつたらかかつて來いッ。」

この聲を聞いた魔王等は、驚き且つ怪しんで、陰陽瓶の蓋を取つて見ましたが、果して中は藻抜けの殻です。初めてそれと知つた老魔王は、白髪を逆立てて憤りました。



「むう、さてはあの小僧にしてやられたか。かう侮辱されて引込んだとあつては、永年近國に賣つた俺の名にかかはる。命を的に勝負してやらう。」

と老いの一徹、劍を引揃んで、一人で門外に躍り出た。

「やい悟空、家來に命じて貴様を討取るのは造作もないが、武士冥利に俺の筋金入りの腕を見せてやる。有難く思へ！」

「はははは、爺さん大きく出たね。途中で息が切れたなんていひつこなしだぜ。」  
「何をツ、生意氣な小僧めツ。」

兩々秘術を盡して戦ふうち、老魔王のやや疲れた頃を見計らつて、八戒横合から打つてかかれば、老魔王は忽ち本相を現はして、大きな獅子と變じ、かつと口を開いて、八戒を一呑みにしようとする。八戒は驚き怖れ、頭をかかへて一目散に逃出したが、悟空の方は眞直に進み寄り、我から獅子の口中に飛び込んでしまつた。

## 二 腹の中で越年

三藏と悟淨は、兩人の安否如何にと氣遣つてゐるところへ、息せき切つて八戒が駈戻つて來たから驚きました。

「どう致した？ 悟空はどうなつたのぢや。」

「どうもかうもありません。あの命知らず、何と思つたか、自分から化物の口中へ飛び込み、一呑みにされてしまひました。もう明日の朝ウンコになつて出るばかりです。私は敵を斬り開いてやうやう逃げ歸りました。」

「なに悟空が妖怪に喰ひ殺されたとな！ あれに死なれては、これから先の旅も覺束ない。ああ、どうしようどうしよう。」

三藏地べたに倒れて、聲を揚げて慟哭する。一番に頼みとする悟空を亡くしたんだから、この歎きも全く理りです。

八戒は三藏を慰めようともせず、白馬の鞍からこそこそ荷物を解きおろさうとするのを、悟淨が見咎めて聞きました。

「八戒兄貴、お前は荷物なんか取出してどうしようといふのだ？」

「もうこの旅もおやめだらうから、足許の明るいうちに、自分の荷物を持つて、郷里へ歸らうと思ふんだ。悪いことはないから、お前も流沙河に歸れ。俺も久し振りに歸國して、嬖に遇つた上、棺桶でも買つて、お師匠様のお葬らひの準備でもして置かうといふわけなんさ。」

ひどい奴があつたもので、自分一人でどんどん荷ごしらへに取りかかる。三藏はこれを聞いて一層歎き悲しみ、側に寄つて慰める悟淨の言葉も耳に入らぬやう、殆ど絶え入らんばかりに泣いて居られます。



一方悟空を呑んだ老魔王は、意氣揚々と洞内に引揚げ、二人の弟に向つて廣言たらたります。「なーんだ、孫悟空なんて、俺様に遇つちや嬰兒も同然さ。隣くうちに捕虜にしてやつたよ。」  
 「さうですか、それはお手柄でしたね。そして悟空はどこに居りますか。」  
 「丸呑みにして、お腹の中に入れてあるよ。」

「兄さん、それは危ない。彼奴のことだから、腹の中で何をするか判りませんぜ。」  
 「それもさうだ。ぢや吐出して猿鍋にして、食つてしまはう——これ、誰かある、鹽水を持って。」

鹽水をガブガブ飲んでから、二本指を咽喉に突込み、げいげい吐き出さうとしましたが、悟空は手足を突張つて踏止まり、中から老魔王を調戲ひます。

「おい爺さん、野暮な眞以をしなさんな。おれは綿入を持つてないから、當分ここで冬籠りをした上、來春暖かになつてから出ようとしてるんだ。それを無理に吐出さうなんて、人が悪いや。」  
 「何だ、腹の中で年越しをするつて？ 人を馬鹿にしてやがる。そんなら俺はこの冬中斷食して、貴様を餓死させてやるぞ。」

「ふふん、斷食でも何でも御勝手に遊ばせだ。俺はちゃんと鍋と焜爐を用意して來たから、お前の臍物をむしつて、好物のモツ鍋をして食ふんだ。ははははは、お生憎様——」  
 條蟲みたいな奴に寄生されて、老魔王も弱つてしまつた、それならアルコールで溶かしてやれ

と、薯燒酎を立續けに七八杯飲みましたが、悟空は却つて大喜び。食道に口を當てがつて悉く吸ひ取つたから、忽ちいい機嫌になり、ああコリヤコリヤなどと調子をとりつつ、例によつて出鱈目な踊りを始める。

老魔王は腹をかかへて、七轉八倒の苦しみ。

「あいたあいた、何でも、あなたのいふことを聽きますから、どうぞお助け下さい。お願いです、悟空様。あいたた、あいたた。」

「ははははは、可哀さうに——何ならゆるしてやるまいものでもないが、お師匠様を駕籠に乗せて山の向うまで送つてくれるか、どうぢや。」

「はいはい、何でも御命令通り致しますから、どうぞお助けを……」

「ぢや、俺は外に出るから口をあける。」

咽喉佛のところまで這上つて來て、口のあくのを待つてゐると、老魔王の耳許で二人の弟が、何やら囁いてゐる様子。悟空怪しんで試しに如意棒を出したところが、果して老魔王はがちりと嚙み付き、あべこべに前齒を折つてしまつた。

「さまあ見やがれ！ 貴様たちは俺を騙して、嚙み殺さうとするんだな。そんなことをするなら誰が出てやるもんか。」

悟空が再び戻りかけたので、老魔王大狼狽。惡智慧を付けた弟も、また兄貴に腹痛を起されて



は大變と、聲を勵まして呼び止める。

「やい悟空、待てッ！ 噂ではお前を豪傑と聞いてゐたが、大の卑怯者だぞ。人の腹の中に隠れるのは、俺たちか怖ろしいからだらう。でなくば出て来て勝負をしる。」

かう言はれて、悟空も成程と思つた。若しここで引込んだら、彼奴等を恐れて逃げたのだと笑はれるに違ひない。武士は名をこそ尊べ、然らば外に出て大いに戦はうと決心して、折れた齒の隙から表の形勢を觀望しますと、中弟の魔王が手下を率ゐて伏勢し、悟空の現はれるのを待構へてゐます。

よし、向うがそんな心算なら、こつちも計略を以て苦しめてやれ——と、悟空は再び腹の方に下向し、毛を抜いてこしらへた繩を老魔王の心臓に緊り付け、繩尻を取つて今度は鼻の孔へ廻り、中からこちよこちよ撥ぐる。老魔王思はず「ハツクシヨン」と大きな嚏をした拍手に、悟空はひよつこり躍り出し、そのまま空中に飛上つて、ぐいぐい繩を引上げたから堪りません。老魔王は歳暮の鮭みたいなぶらんぶらんしながら宙に釣上げられて行きます。

### 三 水漬になつた八戒

兄の魔王が、鼻の孔に繩を通されて吊るし上げられるのを見ては、弟たるもの晏如としては居られません。しかし早急の場合とて拜み倒しの一策あるのみです。

「悟空様々々々、まあ待つて下さい。あなたは正々堂々と出て来て戦ふかと思つてゐたのに、そんな騙し討ちみたいを眞似をするんですか。それで大唐一番の豪傑といはれますか。」

「何を失禮な。お前たちこそ俺を嚙殺さうとしたり、今度は大勢で待伏せをしたりしたぢやないか。」

「それは全く私どもが悪う御座いました。この通り謝りますから、どうか兄貴の命を助けて下さい。そしたらきつと三藏法師様をお送りします。どテぞや大慈大悲のお旦那様……」

正直者の悟空は、かうおだてられると、つい乗せられていい氣持になり、早速老魔王の繩をほどいて、釋放してやりました。

「ぢやゆるしてやらう。その代り今いつた約束に間違はあるまいな。」

「お有難う御座います、お蔭で三人が助かります。間もなく駕籠を持つてお迎ひに参りますから、先に歸つてお待ちになつてゐて下さいまし。」

横を向いてべろり舌を出したのも知らず、總てを眞に受けた悟空は、肩など怒らし大威張で歸つて行く。

三藏は頼みにする悟空が死んだと聞いて、身も世もあられず、歎いてゐましたが、ふと向うを見ると、悟空がにこにこしながら戻つて参ります。

「これ八戒、お前は悟空が殺されたなどと偽りを申したな。あれ見よ、あの通り元氣な顔をして、



歸つて来たではないか。」

「へーい、でも私は確かに、兄貴が吞まれたところを見たんですがね。ちや何ちやありませんか、お師匠様に思ひが残つて、幽的になつて戻つて来たのでせう。あれはきつと幽霊ですよ。」

悟空はこの問答の最中に歸着して、いきなり八戒の横づつぼうを殴り付けました。

「何をいつてるんだ、俺は幽霊でもお化でもないぞ。貴様が逃げて行つてから、一人で魔王の腹の中にはいつて、うんと虐め抜いた上、お師匠様の駕籠を出させるやうにいひつけて来たんだ。それになんだ貴様は、荷物なんぞ片付けやがつてどうしようといふのだ。」

「何もさう人を殴らなくたつていいぢやないか——さういやあ足もあるやうだし、まあ無事で何よりだつた。本當に兄貴、御苦勞だつたなあ。」

酒蛙々々然として、お世辭を列べ立てる。三藏は再生の思ひで打喜び、悟空の手柄を賞めながら、いそいそと出立の用意を始めました。

一方老魔王の方は、散々の目に遇つて最早再起の勇はありませんが、第二人は固より心から屈してはゐません。先刻も偽つて悟空を歸したのですから、再び手下をまとめて雪辱戦に押しかけて来ました。これを見た八戒は、せせら笑つて悟空を揶揄します。

「兄貴々々、先刻お前は駕籠が迎ひに来るとかいつたつて、あべこべに戦をしに来たやうだぜ。お前は狐にでもばかされて来たのぢやないのかい？」

「人を馬鹿にするな。老魔が俺にやられたので、あの二人は義のためにその仕返しに来たんだらう。こつちにも兄弟分が三人ゐるから、今度はお前が行つて二番目の魔王をやつ付けて来い。」

「そんなことならお安い御用だ。俺だつて兄貴ぐらゐの働きは出来るよ。」

いい氣なもんで、熊手を振り振り立向つて行きましたが、十二三合するうち、魔王はさつと鼻を延して八戒を巻きすくめ、家来と共に勝鬃作つて獅駝洞の中に引揚げました。三藏遙かにこれを見て、おろおろる聲。

「大變だ、大變だ。悟空！早く行つて助けてやれ。」

悟空は、わざと落着き拂つて煙草すばすば。

「お師匠様も不公平ぢやありませんか。私が捕まつた時は平氣でゐて、八戒が捕まると、そんなに慌てなさるなんて、依怙最風が過ぎますよ。」

「いやいや、さうではない。お前は術を知つてゐるから大抵大丈夫だと安心してゐるが、あれは生來の愚か者ゆゑ、愚圖々々してゐては危ない。早く助けに行つてくれ。」

「左様ですか。ぢや行つて参りませう。」

澁々ながら、雲に乗つて出かけて行きました。

悟空はやがて獅駝洞の門前に飛び來り、豺蟻に變じて中に入つて見ると、不便や八戒は手足を



括られ、池の中に漬けられて、土左衛門になりかけてゐます。悪戯好きの悟空は、耳の側に飛んで行き、嚴かな作り聲をして呼かけました。

「これこれ、汝は猪悟能、字名を八戒と申すか。」

「はい、私は猪悟能ですが、私の法名を知つてゐるのは誰方です？」

「わしは閻魔王の命令で、汝を冥途へ伴れに参つたのぢや。」

「へーい、では私は死ぬので御座いますか。私は今一人で死ぬのは厭で御座います。そのうち師匠や兄貴の悟空なども、この魔王に殺されるでせうから、その時一緒に参ります。どうかしばらくお待ちなすつて下さいませ。」

「さういふわけなら待つてやらんものでもないが、ここに滞在してゐるのに費用が要る。汝はその金を持つて居るか、どうぢや。」

「へいへい、多分のお錢は御座いませんが、師匠に内緒でくすねて置いたお布施を持つて居ります。耳の中に隠して御座いますから、取出して下さいませ。」

悟空はその言葉に従ひ、耳の中に手を入れて見ると、果して四五兩の金子が貯へてありましたので、思はずくす笑ひ出した拍子に、ばつと本相を現はしてしまつた。初めてそれと知つた八戒は、牙を鳴らして大憤慨。

「この詐欺取財奴！ 人が死ぬか生きるかの場合に、よくも騙して金を取つたな。」

「はははははは、さう怒るなよ。こんな目腐れ金なんかどうでもいいぢやないか、それより今お前の命を助けてやるよ。」

と如意棒で繩を解拂ひ、二人でばらばら逃出す。見廻りの番人が、その後姿を見付け、魔王に斯くと注進しましたので、兄弟二人で後追驅け來り、再びここでチャンチャンバラバラが開始された。

#### 四 釋迦如來が來援

魔王軍は悟空の手竝の非凡なを知つてゐるから、一番強い末弟と數千人の家來で立向はせ、おつ取り圍んで他所に眼をくばる暇のないやうに攻め立てる。一方鼻の長い中の弟は、その隙に乗じてまたもや八戒を巻き込み、老魔王は恭順を装つて忙しく三藏を迎ひに行き、悟淨と白馬もるとも、うまうま洞内へ誘き入れるや、わつと揚げた喊の聲を合圖に、一齊に軍を引いてピシヤリ門を締切つてしまひました。

取残された悟空は敵の引揚げ方を不審に思ひ、急いで三藏等の居たところに行つて見ましたが、果せる哉、人馬ともに影も形も見えない。さては夢中で戦つてゐるうちに謀られたよな、ちえつ無念なり残念なりと、がりがり齒齧をして口惜しがつたが、今更どうにもなりません。

しかしかうしてゐるうちにも、師匠の安否が氣遣はれます。悟空は雲に乗つてひそかに、洞内



に飛入り、下僕のやうな風をして彼方此方と捜してゐるうち、一人の仲間を見付けて、それとなく聞いて見ました。

「おい兄弟、今日は大した騒ぎだつたなあ——ところで捕まへられた和尚はどうなつたらう？」  
「さあ、俺もよくは知らんがね。何でもさつき御近侍の人が、話してゐたのを聞くと、悟空が取返しに来るのを虞れて、生そのまま食つてしまつたとかいふ話だつたよ。」

これを聞いた悟空は、心から落膽してしまつた。三蔵が死んでしまへば、今までの艱難辛苦も水の泡となつて、天竺行き目的もなくなる。仕方がないから釋迦如來様のところへ行つて、頭に嵌めた金の箍をはづして貰ひ、その上で故郷の華果山に歸り、三蔵の菩提を弔らうと、しくしくしゃくり上げながら、悄然として靈山に向ひました。

靈山では釋迦如來が、文珠、普賢の兩菩薩を招いで、心靜かに琴など聞いて居られます。悟空はその前に畏まつて、涙ながらことの次第を語り、金箍をはづして下さるやう頼みましたが、如來は總てを洞觀してゐられるから、取て驚かれません。

「さう心配致すな。ちやうど魔王の主人に當る兩菩薩も見えてゐるから、一緒に行つて善後策を講じてやらう。郷里に歸るなどと申さずに、我々に隨いて來るがいい。」  
と澁る悟空を伴れ、四人雲に駕して獅陀洞へと志し給ふ。

やがて獅陀洞の城内に到着して、悟空が聲高に惡罵を浴せかけると、三魔王鉦を描へて一齊に

躍り出して來た。しかし今度は悟空に立派な後見が付いてゐるから大丈夫。いい加減戦つてから空中に舞ひ上り、如來の蔭に隠れるのを、三魔王は逃さじと追ひかけて來たが、そこには舊主の三尊が嚴然として立つてゐられる。

「やややや、こりや御主人様方だ。相手が悪い——。」  
「これ畜生ども、悔い改めて主の許に歸れ！」

と耶蘇教張りで宜ふと、三魔王は忽ち本相を現はし、老魔王はライオン、中弟は白象、末弟は金翅の孔雀に變つて三尊の前にひれ伏しました。悟空はこれを見て大威張り。

「へん、どんなもんだい、思ひ知つたか——しかし如來様、折角彼奴等を降参させて下さつても、師匠が死んでしまつたのでは、どうすることも出来ませんが」

「いや、三蔵はまだ殺されてはゐぬ筈ぢや。きつと洞内に幽閉されてゐるからよく捜して見よ。」  
悟空は半信半疑ながら、雲を降りて隈なく洞を捜つて見ると、主従三人果して安泰でゐたので、急いで三尊の前に伴ひ來り、心からの謝禮を申します。三尊も喜んで交る交る前途を激勵した上、釋迦如來は孔雀、文珠菩薩は獅子、普賢菩薩は白象に乗つて、悠々と靈山に歸つて行かれました。



## 白鹿と蛇女

### 一 赤ン坊徴發

一行はかくして獅駝洞の大難を逃れ、また數ヶ月の旅を續けて、或城下町に差蒐りましたが、妙なことには、方々の民家の前に、絹に包んだ赤ん坊が置いてあります。犬の子や雛つ子なら銀座の往來でも賣つてゐるが、まさか人間の子を賣るんでもあるまい。不思議に思つて、投宿した旅館の亭主に聞いて見ると、ここに見逃し難い人道問題が胚胎しつつあるのです。

この國の王は、日本の馬鹿殿様といつたやうな、極めて柔弱暗愚の男。三年ばかり前、一人の老人がトテシヤンな娘を連れて來て、國王に獻じましたところ、これが非常に氣に入つて、老人を國家老に取立て、娘を引付けて日夜の歡樂。その結果遂に腎虛性神經衰弱に侵されて、吹けば飛ぶやうに瘦せ細つたが、例の家老は何處からか、不老長生の藥と稱するものを持來り、千百一人の孩兒の肝と一緒に煎じて飲めば、たちどころに元氣が出るゝと薦めたので、國內に強制的赤ん坊徴發令を出し、明日はその納入の期限だと言ふのです——。

慈悲深い三藏は、國王唯一人の碌でもない慾望のために、千百餘人の子供が殺されると聞いて

は、黙して觀過するわけには行きません。三人の弟子と相談した上、兎も角宮中の様子を見届け  
るため、羽蟻に變じた悟空を連れて參内しました。

見ると國王は青瓢箪のやうな顔で、氣息奄々として坐つてゐる側に、家老の爺は傲然と控へ、  
何彼と問ひ尋ねます。

「其方はどこから、何用があつて參つたのぢや？」

「私は唐の國から西國へ經文を求めに參る者で、唯今旅券の査照をしていただきに、參内致した  
ので御座る。」

「西國にどんないいところがあるのぢや？ 昔から自分の郷國ほど、いいところはないといふで  
はないか。佛道の經文のと馬鹿骨折な……」

無禮千萬な惡態を吐きますので、さすがの三藏もむつとして黙りこくつてゐると、羽蟻の悟空  
は三藏の肩に飛んで來て、そつと耳打ち。

「あの爺は確かに妖怪です。私は居残つて彼奴の様子を見て行きますから、あなたは一旦宿にお  
歸りになつて下さい。」

と注意して飛去りましたので、三藏は暇を告げて立歸る。と、入れ違ひに收稅吏があわただし  
く參内して、國王に奏上しました。

「一大事で御座ります。さつき突風が吹いて參りまして、獻上の孩兒が悉くどこかへ吹飛ばされ



てしまひ、皆目行方が判りません。」

國王斯くと聞いて大悲觀。

「孩兒の肝が取れなくては、わしは死んでしまふ外はない。爺や、どうしたらいいだらう。」

「御心配遊ばすな。あの唐から来た坊主は修行を積んでゐますから、孩兒の肝より十層倍も効能が御座います。今宿へ歸つてゐるでせうから、早速兵隊をやつて捉まへさせませう。」

孩兒の代りに、三藏の肝を取らうといふのです。大變な事になつたもんです。

悟空は急いで宿に歸り、件の趣きを告げますと、三藏は色を失つて歎きました。

「折角子供たちを助けようと思つた情が仇になつて、自分が殺されるとは何としたことだらう。悟空や、お前に何とかいい工夫はないか。」

「左様でございます。何しろ急場のことですから、あなたと私と姿を換へる外に方法が御座いません。失禮ですが私になつて下さいますか。」

「わしを救つてくれるなら、お前の弟子なり何なり、何でも構はない。」

「ちや急いで支度を致しませう。八戒よ、表から少し泥を取つて来てくれ。」

八戒、應と答へて庭に走り出で熊手で土を搔取り、自分の小便を交ぜて柔かにして持つて来た。悟空甚だ面白くないが、急速の場合やむなく顔をしかめながらこれに面印を押し、それを三藏の

顔に當てがつて呪文を唱へますと、三藏はすっかり悟空の姿になりました。

悟空も急いで三藏に變り、やつと支度が出来上つた處へ、千人餘りの兵隊がどやどや押しかけて来て旅館を圍み、隊長らしいのが、殊更に慫慂を装うて招請の詞を述べます。

「唐國の大和尚猊下、國王から唯今直ぐにとの御招待で御座います。御足勞ですが、どうぞいらしつて下さいませ。」

賢三藏の悟空も眞面目腐つて、

「それは千萬忝けない。陛下のお招きに預かるとは愚僧身に餘る光榮で御座る。直ぐ様御伴致すで御座らう。」

と兵士に護衛されつつ、悠々として參内に及ぶ。國王は家老の爺を顧み、してやつたりと大喜びです。

「おお唐國の大和尚か。よく參つてくれた、待ち兼ねたぞよ。」

「御懇ろなるお招きに預り、有難う存じます。して何ぞ御用ばし御座りますか。」

「實は折入つて聞いて貰ひたい頼みがある。わしは久しく患らつてゐるので、この家老が藥を見付けてくれたが、高僧の肝と一緒に服まなくては、効目がないといふのぢや。若しこの無心を肯いてくれるならば、和尚をこの國の神に祭り、きつと香華を絶やさんから、どうぞ肝を譲つてくれやれ。」



肝をくれとは途方もない無心だが、悟空はケロリとして平氣なもの。

「それはお易い御用で御座います。愚僧は色々な肝を持つて居りますが、一體どんな色の肝が御入用で御座いますか。」

この時家老は口を出して、

「黒い肝が入用なのだ、それを護つて欲しい。」

「サア、黒が品切れになつてゐなければや宜しう御座いますが、兎に角、腹を割つて見ることにしませう。チョツと刀をお貸し下さいませ。」

と變肌脱いで、家來が持つて來た刀をグサと腹に突立て、その穴からニヨロニヨロと臟腑を引張り出します。國王はじめ列びゐる臣下は、皆氣味悪がつて顔をそむけるばかり。悟空は「まだあるまだある」などと呑氣に拍子を取りながら、全部を引張り出した上、自分で檢べて見ましたが、紅肝、白肝、綠肝など三元牌のやうな肝ばかり、肝腎の黒肝がありません。

## 二 悟空の肝、家老の肝

悟空は横眼で家老を睨めながら、臟腑を元のやうに腹の中に納め、急に本相に還つて大聲で呼ばりました。

「陛下、その家老こそ黒い肝を持つてゐます。早くぶち殺してお取りなさいツ。」

家老は、悟空の本相を見て吃驚敗亡。

「ヤヤツ、貴様は天上を騒がせた孫悟空だな。」

といふが早いか殿上を走り出で、奥殿に居る王の寵姫を拉し、一條の物凄い光と變つて、何方ともなく逃去りました。

これを見た群臣の驚きはもとより、國王はただ夢に夢見る心地です。

「さてはあの家老は、妖怪變化であつたのか。これまで欺瞞されてゐたとは知らなんだ——それにしても、貴僧は一體如何なるお人ぢや？」

「はははは、今朝拜謁したのは本物の三藏法師、私は弟子の悟空と申す者で候。陛下はあの妖怪の言葉を信じて、師匠の肝を取らうとなされたにより、私が姿を變へて参内し、魔物を退治したので御座る。」

國王はこの仔細を聞き、臣下を旅館に遣はして一行を招すると、三藏は八戒悟淨の兩人を従へ、悟空の相のままにノコノコやつて來たからチトへんでこです。悟空急いで御殿を下り、ふつと息を吹きかけて三藏を本相に還し、打揃つて拜謁しますと、國王は喜色満面。

「この度の仕儀、誠に面目次第もない。お蔭で妖怪を追ひ拂ひ、祝著至極に存するが、なほこの上のお願ひには、どうぞ、悟空殿の神通力であの妖怪を打ち滅ぼし、後日の患ひを除いては下さるまいか。」



「お頼みとあらば、一骨折つて見ませう。しかし彼奴の住家は一體何處で御座いますか。」  
「なんでもここから南七百里の清花洞と聞いてゐる。なんなら入用だけの軍馬を、供に上げても宜しいが……」

「いや、それは御無用です——では、御師匠様、一寸行つて参ります。八戒よ、俺と一緒に行くてくれないか。」

まるで散歩にでも出かけるやうです。皆が呆氣に取られてゐる中を兩人雲に乗つて南方に飛去り、やがて七百里ばかり来た頃、楊柳茂る間に清花洞らしいのを發見した。兩人いきなり門を開いて亂入すると、爺は例の美人に酌をさせながら、一杯開し召してゐたが、悟空を見るや猛然怒りをなし、大だんびらを取上げて斬つて蒐る。

しかし此方は二人ですから、敵ひつこはありません。暫くは戦つてゐたが、遂に疲れが出て三十六計、凄い光を後に洞外へ逃げ出した時、突如天上から鋭どい聲がかかりました。  
「畜生待てツ！ 悟空八戒の兩君、わしに免じて奴の命を助けてくれ給へ。」

「やあ、誰かと思つたら南極星老人か。どうしてあの妖怪を知つてゐなさる？」

「あれはわしの庭に放し飼ひにしてゐた白鹿だが、隙を窺つて三日前に逃げ出しましたのぢや。天上の三日は下界の三年、捜し尋ねて漸く今見付けました。」

「御老體の所有なら、命を取らうとは申しませんがからお連れ歸り下さい。だが彼奴のために、病

氣に罹つてゐる國王がありますが、これをどうして下さる？」

「それは濟まないことをした。幸ひ靈藥の棗を持つてゐるから、持つて行つて國王に服ませなさい。きつと癒ります。」

三個の棗を悟空に渡し、妖怪を一喝して本相の白鹿に還した上、それに乗つて南方に歸つて行かれた。

悟空と八戒は再び洞内に入つて見ると、美人は腰を抜かしてただブルブル慄へてゐる。八戒は走り寄つて一突きに突き殺しましたが、見れば銀毛燦々、襟巻にでも製したら數千圓の代物と思はれる綺麗な白狐です。

「はははは、此奴に國王が生血を吸はれてゐたんだな。お土産に持つて歸つて見せてやらう。」

と死骸を携へ、悟空とともに御殿に飛歸つて委細を披露する。國王は耻入り且つは喜び、それに持參の靈藥により精神も爽快になつたので、一層一行の恩に感激し、國賓待遇にして、下にも置かず一行をもてなします。

二三日御馳走攻めに遇つた後、一同いよいよ出發することになり、國王以下群臣に見送られて城内を立ち出でますと、不意に空中から聲がしました。

「悟空さん、忘れて行つちやいけませんよ。先日お預りした赤ん坊は、どう始末すればいいんです？」



「さうさう、これは大失敗、とんだことを忘れてゐた。どうぞ今直ぐ返して下さい、ほんたうに御苦勞様でした。」

「ではお返ししますよ。」

といつたかと思ふと、千百十一人の孩兒が、バラバラ城門の前へ降つて來た。しかも不思議に怪我がなく、にこにこ笑ふのもあれば、おぎやアおぎやア泣くのもあり、さながら赤ん坊の展覽會——これは納入日の前日、悟空が風の神に頼み保護して貰つて置いたのです。

「さあ町内の人達、早く來て自分の子を連れて行きなさい！」

悟空がかう叫ぶと、我先きに來てわが子を抱き上げ「おお坊やか、よく生きてゐてくれた」「ほら母ちやんだよ、よしよしよし」などと狂氣のやうに喜ぶさま、他所の見る目も涙ぐまるるばかり。それもこれもみな和尚様のお蔭だと、三藏等四人に各々四五人づつ取付いて擔ぎ上げるやら、手車に乗せるやら、わつしよいわつしよい町の方に引戻し、離さうにも離してくれません。城内では八方から引張風で、是非なく一ヶ月許り逗留した後、やうやう袂を振切つて出立しました。

### 三 妖怪に騙されて

ある女學生が「春情相備し候處」と形容したといふ、ぼかぼか暖かい春先きのころ、一行





は清々しい松林を通つてゐた。鳥の囀りと長閑に、人の歩みも自づと緩やかになつて、四人離れ離れに進んで行くうち、ふと三藏の耳に「助けて下さい、助けて下さい」といふ女の悲鳴が聞える。

こんなことを聞き逃しが出来ないのが三藏の慈悲性。急いで聲のする處へ駆付けて見ますと、一人の綺麗な女が松の大木に縛り付けられ、絶え入るばかりに號泣してゐます。

「御婦人、一體どうしてこんな目にお遇ひなされたのぢや？」

「おお、いい處へ来て下さいました。私は近村の者で御座いますが、昨晚家へ強盗が入込み、両親は殺され私は攫はれて來ました。賊は私に女房になれと申すのを、飽くまで拒みますと、私を縛り付けて何處かへ行つてしまつたので御座います。御願ひで御座います、どうぞ御助け下さいませ。」

「それは可哀さうな。助けて上げますとも……」

馬を下りて繩を解きにかからうとした時、悟空がやつて來て急にさへぎり止めました。

「お師匠様、それはお止めなさいませ。この女は我々を騙さうとする魔物で御座います。」

「ほう左様か。お前のいふことにはいつも間違ひがないから、ではこのまま抛つて行かう。」

實際この女は、悟空が觀破した如く、妖魔の精なのです。生來童貞を保つてゐる三藏を誘惑して、いはゆる初筆の快樂をむさばらうとしてゐた目的が、悟空のために破られたのですから、口



惜しくてならない。何とかして物にしようと思念深く呼び續けます。

「和尚様ッ、あなたは人を見殺しにして、それで佛弟子といはれますか。そんな不人情をして天竺に行つたとて、何の利益がありませう——どうぞ助けて下さい、助けて下さい。」

絹を裂くやうな聲で泣付かれるので、一旦行きかかつた三藏はまた思ひ直した。

「悟空や、あれのいふことも全く道理ぢや。昔から一人助けるのは、七本の塔婆を建てるより功德だといふから、矢張りあの婦人を助けることにしよう。」

「はははは、また例のお慈悲病を起しなさいましたな。全くお師匠様には付ける薬がない。しかし強つてお止めすれば御機嫌を損ずるでせうから、どうなと御意の儘になさいます。」

仕方がないから、打つちやつて置くと、直ぐ八戒に命じて繩をほどかせたので、女は大喜び。

幾度か三藏を禮拜し、いそそと一行について参ります。

そのうち日も西山に没したので、森の端にあつた一軒の喇嘛寺に宿を求め、例の婦人とは室を異にして寢に就きましたが、夜中に變事でも起つた様子で、本堂の方が急にざわつき出した。目ざとい悟空は、むつくと起きて、單身行つて見ると、二人の喇嘛僧が殆ど骨ばかり残して喰殺され、その周圍に大勢の僧侶たちが驚き騒いでゐます。

「これは残酷な——一體どうしてこんなことになつたんです？」

「どうもかうもまるつきり判りません。二人はお當番で本堂に詰めてゐたのですが、何だか凄

聲がするのでみんな来て見ますと、この始末なんです。」

「で、何か犯人の手掛りになるやうなものは、残つてゐませんでしたか？」

「さあ別にこれといつてありませんが、不思議なことには私等がここへ駈付けた時に、何ともいへない匂ひが致しました。」

これを聞いて悟空の第六感は、さてはあの女が犯人に相違ないと睨みを付けた。

「さうですか——今夜のやうな時、お宿を借りたのも何かの御縁ですから、一つ私が罪を取つて上げませう。皆さんはあちらに行つて静かにしてゐて下さい。」

一同を庫裡の方へ歸した上で、自分は十五六歳の綺麗な小坊主に變り、佛前に端座してボクボク木魚を叩きながら、静かにお經を讀み始めました。

やがて夜もしんしんと更け渡り、草木も眠る丑滿の頃、得ならぬ薫りがするとともに、さやさやと衣摺れの音がして、一人の婦人が本堂にはいつて來ました。見れば案の定三藏が助けた女で、一段と粧ひを凝らした容色、眞に目ざめるばかり、満面に媚を呈して悟空の側に、にじり寄つた。「ほんに可愛らしい小僧様だこと。もうお經なんかやめにして、私と一緒に面白いことをして遊びませうよ。」

さつき殺された坊主は、この手で蕩されて餌食になつたのですが、石部金吉の悟空には通用し



ない。いきなり本相を現はして打つてかかれば、女怪驚いて飛び退きさま、二振の剣を抜いて立向ひ、佛壇の前で大立廻りが始まる。

掛引のうまい女怪は、暫く戦つてゐるうちに、鞆を脱いで自分の姿に變へ、これを對手にさせて置いて、本身は一陣の風と化し、三藏の室の方へ飛んで行つたが、悟空は一向氣が付きません。矢鱈無性に攻め立てて、たうとう敵を打倒し、おのれつと最後の二撃を加へようとする、こは如何なこと、女の鞆に變つたから驚きました。

「ちえつ残念！ さてはあのアマに謀られたか。」

齒を嚙みながら、いそいで方丈に駆け付けて見れば、八戒と悟浄が、ただうろろうろたへてゐます。

「おい、お師匠様はどうなすつたツ？」

「今さつと風が吹いて來たと思ふ間に、お師匠様の姿が見えなくなつたのだ、それで捜してゐるところなのだ。」

「間拔奴！ お前たち二人がかりで護衛してゐながら、おめおめ攫はれるといふ馬鹿があるかッ。」  
悟空かんかんになつて、二人を殴り殺すとまで怒つたが、自分の方にも鞆に騙されて、女怪を逃した落度がある。悟浄がことを分けての陳謝にやうやう怒りを鎮め、三人で前日の松林に引返し、土地の氏神を召出していろいろ聞き訊して見ると、多分そこから千里餘り南の陷空山に住む

女怪の仕業だらうといふことです。

#### 四 三藏と結婚式

そこで三人は、白馬とともに雲に乗つて陷空山の麓に至り、先づ八戒が斥候になつて状勢を探りに出ますと「無底洞」と彫付けた樓門の前の小川で、大勢の女が膳碗その他の食器類を洗つてゐるのを見付けました。

「姐さん方、今日は。大變御精が出ますね、ちとお手傳ひしませうか。」

「いやな人ね、あんた見たいな汚い坊さんに、手傳つて貰はなくたつてよござんすよ。」

「へへへへ、これは御挨拶だ。これでも郷里には可愛がつてくれる女房がありますぜ——したがこちらでは何か振舞ひごとでもあるんですか。」

「さうよ。昨夜お姫様が、唐の國とかの和尚様を連れて來られて、これから御婚禮の盃を遊ばすのよ。それや豚みたいなあんたとは違つて、本當に惚々するやうな好男子だわ。」

八戒はつまらんとところで顔の棚下しをされ、ぶんぶん怒りながら、悟空たちの待つてゐるところへ歸つて來た。

「おい兄貴、お師匠様は今日あの女と御婚禮なさるんだとよ。今ごろはちやうどお引けで、何も彼も夢中な時分だらう。俺たちだけ残されたつてつまらないから、荷物をまとめて郷里へ歸らう



「ぢやないか。」

「何をたはげが。お師匠様に限つて、金輪際そんなことのある筈がない。俺が行つて様子を見てくるから、しばらく待つてゐてくれ。」

悟空はいつものやうに羽蟻に變じ、無底洞の中に忍び込んで見ると、さすがに女の住居だけあつて、調度や裝飾など總てみやびなもの。化粧室では例の女怪が大肌脱ぎになつて、お白粉べたべた御婚禮のおめかしに一生懸命ですが、奥の間に押籠められてゐる三藏は、ぼんやり坐つたまま、天井を仰いでただ溜息を吐いてゐます。

\*

悟空は格子の間から飛入りましたが、三藏が自分の諫言を用ひないため、こんな面倒が起きたのだと少々不快に思つてゐましたから、ちよつと調戲つて見る氣になりました。

「お師匠様お師匠様、これから三々九度なさうで、お目出たう御座います。」

三藏は悟空の聲を聞いて、蘇生の思ひです。

「ああ悟空か、よく来てくれた。目出たいことなど少しもない、早くわしを救ひ出してくれ。」

「だつてあなたは、私のいふことを肯かずに、お助けになつた可愛い女と一緒にられるんぢやありませんか。いつそのこと、赤ちやんでもこしらへて、この旦那様に落着かれた方が、天竺なんかへ行くより得で御座いますぜ。」

「失禮な、お前はわしをなぶらうとするのか。わしは唐を出てから、塵ほども怨念を起したことはない。萬一ここで女人戒を破り、地獄に墮ちたら、經卷を求める尊とい使命をどう致すのぢや。たはげたことを申すな。」

正直な三藏はむきになつて、きつい怒りやう。悟空笑つて、

「ははははは、今のは冗談で御座いますよ——ところであの女はこれから盃事をしようとしてゐますから、あなたは我慢して一杯だけ召上りませ。そしてその盃に泡が立つやう酒を注いで下されば、私は泡の中に飛込んで彼奴の腹の中にはいり、思ふさま苦しめてやります。」

「左様か、きつとぬからぬやう頼んだぞ。」

この時、お化粧の出来上つた女怪は、にこにこしながらやつて来て、三藏を廣間に連れて行き、自分が先づ一杯飲んでから三藏に差します。三藏も仕方なく、眼をつぶつてそれを飲み乾し、計略通り泡立つやうに酒を注いで返盃しましたが、女怪は、ただもう嬉しがつて直ぐ飲まうとは致しません。三藏の膝にしなだれかかつて、色々甘つたるい話をしかけ、しばらくしてから盃を取り上げた時は、もう泡が消えて羽蟻が丸見えになつてゐたので、指先でこれをつまみ上げ、ひよいと庭の方へ弾き捨てました。

計略齟齬した悟空は、口惜しさ腹立たしさ。急に烏に變じてはそこにあつた酒肴を引つくり返し、その上座敷中に糞をひり散らして逃げ出したから大騒動です。女怪も憎げ返つて、



「この洞内に居ない筈の鳥が出たのは、婚禮に凶い日なのかも知れません。仕方がないから今日は止めて、改めて吉日を選び、夫婦の固めを致しませう。」

と三藏を一室に押籠めた上、すぐご自分の居間に引取りました。

一方逃出した悟空は、暫く後庭の草の間に隠れておりましたが、ふと後を見ると、小さな堂の中に、「尊父李天王靈位」「尊兄哪吒三太子靈位」と、記した二つの位牌を祭り、いろいろな供物をしてあります。李天王といへば、玉皇上帝麾下の元帥で、哪吒太子とともに豫て悟空とは知り合ひの仲。あの女が李天王の娘ならば、玉帝に訴へて李父子を連れ来り、その手で三藏を取り返して貰った方が手数がからぬと、急ぎ訴状をしたためた上、二つの位牌を證據に携へ、雲に乗つて天上にと馳せ向つた。

## 五 李天王と對決

やがて悟空は天上に到り、靈霄殿に玉皇上帝を拜して訴状を奉る。帝一覽あつて訴への趣をお取上げになり、司法大臣太白金星を、悟空とともに李邸に遣はし、適宜の策を講じて三藏を救ふやうに御傳達あつたが、李天王は訴状を讀みも終らず、眞つ赤になつて怒りました。

「悟空！ 貴様は皇帝に讒言して、わしを陥れようとするのだな。わしには女の子は、今年七つになる貞英しかないのに、どうしてそんな悪事が出来るかッ。この偽り者め！」

あはや掴みかからん勢ひ。太白金星は證據の位牌を示して、怒りを解かうとしても、見向きも致しません。

「そんな板つべらなど見る要はない——こら悟空、下界ですら誣告は重罪だぞッ。まして天上の元勳を辱しめたからは、貴様をこの場でぶつた斬つてやる！」

大勢の家來を呼んで、悟空を十重二十重に縛らせ、光爛々たる大劍を抜放つて、まさに斬り下さうとしました。

悟空の危ふさ、全く風前の燈火どころの騒ぎぢやありません。

この時、花道ではない隣の室から、

「暫く、暫く。」

といふお詠ひの聲。がらり襖を開けて駈け込んだ哪吒太子は、しつかと李天王の手を支へ止めた。

「父上、暫くお待ち下さる。」

「悴、止めだて致すな、そこ放せッ。」

「いや、父上のお忘れになつてゐることが御座います。確かに娘が下界にゐる筈で御座います。」

「莫迦を申せ。わしにはお前たちの外に子供がないではないか。」

「左様では御座いません。三百年前、靈山で如來の香花を盗んだ女がつかまつた時、父上が助け



ておやりになつたことが御座いませう。女はその御恩を感じ、下界に下つて、父上を親人と崇めてゐるといふ噂を、風の便りに聞きました。血縁の妹ではありませんが、きつと、その女のこと御座いませう。」

「さうさう、さういはれば思ひ出した——悟空、わしが忘れてゐた。悪かつた、謝まる。」  
自分で繩を解いてやらうとするのを、悟空は拗ねて故意と體をひねくり、どうしても解かせようと致しません。

「人をこんなひどい目に遇はせて置いて、今になつて謝まるなどと、それで済むと思ふか。俺は縛られた儘で玉帝の御前に行き、對決して黑白を決めなくては、腹の蟲が納まらない。さあこの儘にして連れて行け、連れて行けッ。」

足をばたばた、腕白餓鬼みたいに駄々を捏ねる。李天王もこれにはすつかり持て餘してゐるので、金星は氣の毒になり、中にはいつていろいろ執成してやります。

「まあまあ孫君、さう怒り給ふな。そりや君のいふのもつともぢや。もつともぢやが、しかし御前で對決して雙方言張つてゐるうち、必ず二三日はかかる。天上の一日は下界の一年だから、その間に三藏法師がどんな目に遇ふか判るもんぢやない。それよりか溫和しくして、玉帝にお願ひ申し、李天王親子に行つて貰つて、師匠を救ひ出した方がいいではないか。」

かう事理を説かれて見ると、元來淡泊な悟空のことゆゑ、怒りの解けるのも早い。

「それもさうだ。ぢや君の顔に免じて四の五のといはないが、のう李元師！俺と一緒に行くつてくれるかね。」

「おう、行つてやるとも、忤と一緒に行くつて三藏を救ひ出してやる。」

一同釋然と打解け、靈霄殿に參じてこのおもむきを玉帝に奏上した上、天兵を引連れて陷空山に馳せ向ふ。

無底洞の女怪は、けふこそ思ひを遂げることが出来ると、いそいそ支度をしてゐるところへ、表の方に軍馬の嘶きが聞えた。怪んで出て見れば、日頃畏敬する李天王、哪吒太子の兩父兄、馬上からはつたと睨まれたので、さすがの女怪も忽ちべしやんこ。ぶるぶる慄へて地上にひれ伏したのを、太子は天兵に命じて搦め捕らせる。一方悟空は洞内を探つて三藏を救ひ來り、暫く物語をした上、李天父子の激勵の辭を後に、一行西へと出立しました。



## 滅法國に入る

### 一 おしやべり女將

頃しも仲夏梅雨の節、蒸暑い中を汗だくだく進んでゐますと、空中から善財童子が現れて、一行に呼びかけた。

「三藏様、御機嫌宜しう御座います——私は観音菩薩のお使で参つたのですが、ここから二三里先きに滅法國の城下が御座います。その王様が佛法が大嫌ひで、三年前一萬人の和尚を殺さうといふ願を立て、これまで千九百九十六人を殺しました。あなた方がおいでになるとちやうど満願の數になりますから、くれぐれも用心するやうにと、菩薩からのお言傳です。では左様なら。」

女難を免れて来たかと思ふと、今度は法難だ。三藏は色を失ひ、戦々兢兢の態です。

「悟空、また大變なことになつたなあ。どうしたらこの國を通り抜けることが出来よう？」

「さう御心配なさいませぬ。ちやうど日も暮れましたから、兎も角私が町に参つて様子を探つて参ります。みんなは此處で待つてゐて下さい。」

今度は火取蟲に變つて、町へ飛んで行きました。

火取蟲の悟空は、城内に入つて、一軒々々町家を覗き廻つてゐるうち、とある宿屋に、喰ひ酔つた客が七八人、素つ裸で寢轉んでゐるのを見付けた。悟空内心にほくそ笑みつつ、中に入つて行燈の火を消し、本相に戻つた上、そこに脱ぎ捨ててあつた着物や頭巾を、全部無断で拜借に及び、急いで三藏等の待つてゐるところへ逃げて來ました。

「お師匠様、いい物を見付けて來ました。この町を通るのには、我々僧形では到底駄目ですから、その頭巾や着物をお召しなさい。そして伯樂だといつて旅籠屋へ泊り、明日の朝早く出立すれば、誰も和尚だと勘付くものはありませんよ。さあさあ悟浄も八戒も早く着替へておくれ。」

法衣は行李の中にしまひ、四人とも俗人の風に變じ、白馬を挽いて悠々城内に入り、悟空を先頭にして一軒の宿屋に入り込んだ。

「今晚は——おかみさん、厄介になるぞ。」

「いらつしやあい。おやまあお四人様でいらつしやいますか、さあさあお上り下さいませ。お竹や、お二階の一番に御案内申し上げておくれよ。お松や、直ぐお茶とお菓子ね、お菓子は上等の方だよ、いいかえ。」

女將は四十ばかりの、まだ水々しい姥櫻、とてもお世辭者です。入り代り立ち代り茶だの煙草盆だのを持つて來る女中を見ると、皆お白粉をこてこて塗立ててゐるのは、この女將、女どもに暗い縁ぎをさせて、金儲けをしてゐるのかも知れない。



「旦那方、ようこそお越し下さいました。失禮ながら何御商賣で、今日はどちらからお越しになりましたか？」

「私たちは北國の者で、商賣は伯樂ですよ。」

「それは結構な御商賣ですこと、さぞたんとお金儲けを遊ばすでせうね。そしてこれからどつちの方へおいでで御座いますか。」

「この先の町の馬市に出かけるんですがね。今日は一疋しか馬をつれて来ませんが、明日は六人の仲間が百疋ばかり引張つて、ここへ来る筈ですよ。」

「まあさうで御座いますか。私のところは部屋も澤山ありますし、厩も飼葉も充分御座いますから、皆さんがお泊り下さいますやうに……」

「えい、皆厄介になりますとも。それから旅籠は最上等に願ひますぜ。」

悟空がよい加減な法螺を吹くのを、女將は本氣にして、とんだ福の神が舞込んだと大喜び。やがて、飯も済んで寝る時刻になると、果して夜伽の女をすすめに來ました。

「旦那、如何で御座います。いい女が大勢居ますが、お相手におよびになつては……」

「左様——よんでもいいが、けふは私達の精進日だし、六人の仲間も來てないから、明晩みんな揃つた上で大いにやるとしませう。」

「さうで御座いますか。ぢや明晩は一つ大勢さんで、御陽氣にお遊びになつて下さいませ。」

悟空がうまい具合に斷つてくれたので、女を押付けられては大變だと案じてゐた三藏は、ほつと安心しましたが、もう一つ心配なことがあります。

「悟空や、女の方は斷つてくれて安心したが、今夜寝てゐるうちに頭巾を落して、我々が和尚だといふことが判つては大變ぢや。何とか人に判らぬ眞暗な部屋に、寝かして貰ふ譯には行くまいか。」

「さうですね。一つ頼んで見ませう——もしも女將さん、一寸來て下さい。あの私たちのうち二人は、疝氣が持病で風にあたるのが嫌ひだし、二人は眞暗なところでなくちやあ寢付かれないんですが、さういふ部屋はありませんかね。」

「さあ、困りましたねえ。私のところでは御覽の通り、涼しくつて見暗らしがいいやうに建てたんですから、風のはいらぬ眞暗な部屋といふのは御座いませんが……ぢやあどうでせう、下に大きな長持が御座いますから、御窮屈でもあの中におやすみになつては……」

「それで結構、ぢや一つ案内して下さい。」

四人は荷物まで取りまとめ、階下の一室にある長持の中へはいつて寢に就きました。

## 二 宮中みな丸坊主

何しろ夏の眞つ最中に、四人一緒に長持の中に閉籠められたんですから、とても暑くて寢付か



れません。悟空は寝られぬままに、わざと大聲で、出鱈目の獨り言をいつてゐます。

「ふふう、資本が五千兩に昨日の儲けが七千兩で、ここに持つてゐるだけで一萬二千兩か。明日また馬を賣れば七八千兩にはなるし、しめて二萬兩は持つて歸れるわい。」

これは一つは、和尚と悟られないやうとの魂膽から、獨り言をいつたんですが、恰度この家に泊り合せてゐた強盗團の耳にはいつたから、聞逃しては置かない。同類八人手分けして悉く家人を縛り上げ、長持を荒縄でからげて、これ幸ひと三藏の白馬に荷付けをし、どんどん城外に向つて逃出しました。長持の中の三藏等四人は、あつちへごろごろ、こつちへごろごろ、蒸暑いのも更に苦しいが、和尚がバレルと大變だから、聲を出す譯にも行きません。

やがて城門に差しかかると、これを見付けた巡邏兵の一隊。

「それッ、怪しの者だ、搦め捕れッ。」

「わーあッー」

と一齊にかかつて来る。強盗の方でもこの近來の大儲けをフイにしてはと、必死に争ひましたが、衆寡敵せず、たうとう馬を捨てて散り散りに逃げうせてしまつた。

「隊長、賊がこんな大きな長持を捨てて行きましたが、どう致しませう。」

「さうだな。明朝陛下に奏上してから、開けて見ることにしよう。それまで役所にしまつて置け。」中にゐた三藏は、これを聞いて大恐慌です。

「これは大變だ。明朝開けて見られると、出家といふことが判つて、殺されるに違ひない。悟空や、どうかして助かる法はないだらうか。」

「さう御心配遊ばすな、私が何とか致して見ませう。」

金箍棒を錐に變じて、長持の底へ小さな孔をあけ、自分は羽蟻になつて外に這ひ出すや、急いで王宮に飛んで行つた。

時に夜は三更を過ぎ、廣々とした宮中も靜まり返つてゐます。悟空は右腕の毛を梳り取り、これを數百の小坊主に變へ、金箍棒で拵へた剃刀を一挺づつ持たせて、方々の寢間に放してやると、小坊主どもは競争的に皆の頭を剃りはじめましたが、これより先き悟空は左腕の毛を抜いて數千の眠り蟲を拵へ、全部の人にたからして置いたから、誰とて目をさます者がありません。忽ちのうち國王、王妃はじめ宮中の男女一人残らず丸坊主になり、數百人の和尚と比丘尼が一時に現出する奇觀を呈しました。

悟空せせら笑つて、小坊主や眠り蟲を元の毛に返し、長持へ歸つて来て一部始終を報告します。

「明朝は面白いぞ、さぞ奴等はうろたへるだらうな。」

「ははははは、官女の坊主頭は奇抜だらう。一つ拜見したいもんだ。」

などと勝手なことをいつて喜んでゐる。國王は和尚征伐の發頭人だから、この報いは仕方がないにしても、側杖を喰つた家來や腰元こそ、飛んだ災難です。



さて翌くる朝、宮中で一番先き眼をさました王妃殿下、何だかいつもより頭が冷えるやうな気がするので、何心なく手をやつて見ると、こはそも如何に、こは如何に、くりくり坊主の丸坊主になつてゐたから驚いた。わあつと泣出しながら、次の間に控へた腰元を呼び出すと、これもまた同じやうなくりくり坊主。次ぎ次ぎに出て来る腰元ども、どれもこれも坊主頭ばかりで、互に指さし合ひつつ泣き笑ひをしてゐる有様は、氣の毒とも滑稽とも申しやうがありません。

男の方も無論これと同断で、宮中全部が俄か道心。冬瓜のやうなのもあれば、西瓜のやうなのもあり、中にも國王は體格偉大と來てゐるから、一際目立つ大入道となつてゐます。一同泣くにも泣かれず、怒るにも怒られず、顔見合せてただ呆然たるばかりでした。

大入道の國王は、王妃以下男女群臣の坊主頭を眺めて、沈吟これを久しうしてゐたが、たうとうしく泣き泣き始めた。

「ああ、わしが悪かつた。こんなひどい目に會ふのも、この間中から大勢の和尚を殺した天罰であらう。もう和尚を殺すことはふつつり思ひ止るから、國內に左様布令を出してくれ。」

かう命じてゐるところへ、巡邏兵の一隊が長持を擔つた白馬を挽いて参内し、前夜盜賊を追ひ散らした一條を奏上致します。國王逐一これを聞いた上、臣下に命じてその長持を開けさせて見ると、中から出たのは財物にあらで同じやうな坊主四人。これには一同またも吃驚しました。

「おや、ここにも和尚がゐる——これこれ御身たちは、一體何處から参つた者ぢや。」

「はい愚僧は唐國の三藏と申し、三人の門弟を引つれて天竺に参ります者。昨夜當御城下に参り、國王が僧侶を殺し給ふ由を承はつて、斯くは俗人に打扮ち、ある旅館に泊りましたところ、圖らずも隠れて居たこの長持を盗み出され、官兵の手に渡つたので御座る。見れば兩陛下を初め、御一同皆剃髮されて佛道に御歸依遊ばした様子、どうぞ同じ流れを汲む我々佛弟子を許して、この國を通らせて下さいませ。南無阿彌陀佛々々々々々々。」

三藏も餘り人がよくない。心中に笑ひながら、眞面目腐つて國王を合掌禮拜すれば、悔悟した國王は、却つて恐縮の態で、坊主頭をへこへこ。

「いや、それでは全く恐れ入る。實はこの國の和尚に政事を誹つた者があつたので、一萬人の佛僧を殺さうとしたのぢやが、今朝宮中の者が盡く僧形となつたのを見て、天がわしの罪を咎め給ふのだと悟り申した。今から佛門に歸依しようと思ふが、どうか當國の寶物を差上げるから、貴僧の門弟としては下さるまいか。」

「いやいや、我々はひたすら佛徳を積む者、決して金銀財寶などを欲しません。ただ持つて参つた旅行免狀に査照して下さいれば、何よりの仕合せに存じます——なほまた、この國を滅法國と呼ばれるのは不祥至極、今後欽法國と改められては如何で御座らう。」

「それは何より易いこと——まあまあ上におあがりになつて、ゆつくりお寛ぎ下さい。」



いろいろ御馳走を取揃へて、下にも置かず歡待します。悟空はその間に宮中を拔出して、前夜の飯屋に行き、無斷借用に及んだ頭巾と着物を返して来る。苟くも人の物を取りつ放しにしないところなど、なかなか堅いものです。

### 三 強飯の誘惑

一同は二三日滞在してから、滅法國改め欽法國を辭し、また數ヶ月の後、一つの高山に差しかかりました。中腹に棚引く雲霧のたたまひ、何となく妖氣を含んでゐる様子なので、悟空は例の如く斥候をして見ると、果して崖の間に四五十名の妖怪が頭張つてゐます。

ここで悟空が考へるには、今歸つてこの通り報告すれば、師匠はまた心配するに違ひない。これは一つ八戒を騙して、彼奴等と戦はせ、どれだけの手並があるかを試さして見ようと、何氣ない風をして歸つて來た。

「お師匠様、今日は私も鑑定違ひをしましたよ。向うに行つて見ましたら、普通の村里で、廻國の和尙が見えたならば、お強飯を御馳走しようと、方々の家で炊いてゐました。あの霧と見えたのは蒸籠の湯氣で御座います。」

食ひしん坊の八戒は、さうと聞いてちつとしては居られませぬ。

「兄貴、ちよいと顔を貸してくれ——あのなにか、兄貴はその村で、強飯を食べて來たのか。」

「うん、食べて來たとも、油揚げや焼豆腐などのお茶もあつたし、とても美味かつたぞ。」

「うまくやりやがつたなあ——俺は空ッ腹で、一時も我慢が出来ないんだ。いまお師匠様の前をいひつくるつて、御馳走になりに行つてくるから、お師匠様にはさういつてくれるなよ。」

悟空は心中で、うまく計略に引かかつてくれたわいと、ほくそ笑んでゐます。

八戒はいやに鹿爪らしい顔で、三藏に願ひ出た。

「お師匠様、今悟空の話によれば向うの村で齋を施すさうですが、馬が疲れてゐますから、村へ行く前に飼葉を取つて來てやらうと思ひます。行つて來て宜しう御座いませうか。」

「それは八戒、いつになく殊勝なことぢや。では早く行つて草を採つて參れ、その後で齋を受けに行くでしょう。」

すましたりと八戒は一散に走つて人の見ない山蔭に行くや赤い舌をべろり。小坊主に身を變じて、出鱈目なお經を唱へながら、村に向ひました。

\*

妖怪の家來どもは、豫て大王のいひつけにより、網を張つて待つてゐたところへ、のこのこ八戒がやつて來たから、寄つてたかつて引立てて行かうとします。八戒先生これを招待の迎ひに來たものと勘違ひして、べこべこお辭儀をしてゐるから滑稽至極。

「どうも有難う御座います。なにさう引張らなくとも、御馳走になりに參りますよ。今日は貴方



がたの村で、齋をお施しになるんでせう。」

「何いつてゐるんだい、話が丸で反対だよ。俺達の大將が貴様を捕へて蒸殺して喰はうといふんだ。」

「何ですつて、ぢや強飯を炊いてゐると聞いて来たのは嘘ですか。」

さては悟空にだまされたのかと気が付いて、急に本相に還るや、熊手を揮つて猛然打つてかかる。これには家来たちも吃驚敗亡、一目散に逃げ歸つてこのおもむきを報告しましたので、魔王は傍らのだんびら押取り、直ぐ八戒のゐるところへ駈付けました。

「貴様だな、俺の家來を虐めたのは——一體貴様はこの何者だツ。」

「俺の名を知らんのか、俺は唐の三藏法師の高弟猪八戒、字名を悟能と呼ぶ豪傑ぢや。」

「さては三藏の門弟か、とうから貴様たちの来るのを待受けてゐた。今つかまへて、喰つてやるツ！」

「なにをツ……」

熊手とだんびらで、猛烈な一騎打が始まった。

悟空は、悪戯半分で八戒を遣つて見たものの、容易に歸つてくる様がないので、少し心配になつて悟浄にささやきました。

「悟浄、俺は八戒の阿呆をだましてやつたんだが、いまだに歸つて来ないのは、妖怪と戦つてゐるのかも知れない。こつそり行つて見て来るから、お師匠様には黙つてゐてくれ。」

一本の毛を抜き、假りの悟空を拵へてそこへ残し、本身は雲に乗つて山の彼方に行つて見ると、

八戒は加勢の妖怪に取圍まれ、大たじたじの熊です。悟空雲の上から、

「八戒、しつかりやれ！ 應援に来たぞツ。」

と大聲で勵ましたので、八戒これに力を得て勇氣百倍、滅茶苦茶に熊手を振廻し、たうとう妖怪どもを追ひ散らしてしまつた。

悟空はこの有様を見届けた上、急いで三藏の側に歸り、假の姿は元に返し、素知らぬ顔をして坐つてゐる。そこへ八戒が汗だくなく、息せき切つて歸つて来ました。

「お師匠様、どうも遅くなつて相済みません。」

「慌てふためいて、どう致したのぢや。飼葉も何も採つて来ぬではないか。」

「いやどうも面目次第も御座いません。實は悟空に騙されたとは知らず、嘘を申して強飯を貰ひに出かけたんですが、妖怪に圍まれて危ない目に遇ひました。それを兄貴に助けられて、やつと歸つて来たので御座います。」

「お前は何を申してゐる？ 悟空はさつきからずうつとここにゐて、何處にも参りはせんぞ。」

「へえい、そんな筈はないが……ねえ兄貴、確かにお前来てくれたね。」



がたの村で、齋をお施しになるんでせう。」

「何いつてゐるんだい、話が丸で反対だよ。俺達の大將が貴様を捕へて蒸殺して喰はうといふんだ。」

「何ですつて、ぢや強飯を炊いてゐると聞いて来たのは嘘ですか。」

さては悟空にだまされたのかと気が付いて、急に本相に還るや、熊手を揮つて猛然打つてかかる。これには家来たちも吃驚敗亡、一目散に逃げ歸つてこのおもむきを報告しましたので、魔王は傍らのだんびら押つ取り、直ぐ八戒のゐるところへ駈付けました。

「貴様だな、俺の家來を虐めたのは——一體貴様はどこ何者だツ。」

「俺の名を知らんのか、俺は唐の三藏法師の高弟猪八戒、字名を悟能と呼ぶ豪傑ぢや。」

「さては三藏の門弟か、とうから貴様たちの来るのを待受けてゐた。今つかまへて、喰つてやるツ——」

「なにをツ……」

熊手とだんびらで、猛烈な一騎打が始まつた。

悟空は、悪戯半分で八戒を遣つて見たものの、容易に歸つてくる模様がないので、少し心配になつて悟浄にささやきました。

「悟浄、俺は八戒の阿呆をだましてやつたんだが、いまだに歸つて来ないのは、妖怪と戦つてゐるのかも知れない。こつそり行つて見て来るから、お師匠様には黙つてゐてくれ。」

一本の毛を抜き、假りの悟空を拵へてそこへ残し、本身は雲に乗つて山の彼方に行つて見ると、八戒は加勢の妖怪に取圍まれ、大たじたじの熊です。悟空雲の上から、

「八戒、しつかりやれ！ 應援に来たぞツ。」

と大聲で勵ましたので、八戒これに力を得て勇氣百倍、滅茶苦茶に熊手を振廻し、たうとう妖怪どもを追ひ散らしてしまつた。

悟空はこの有様を見届けた上、急いで三藏の側に歸り、假の姿は元に返し、素知らぬ顔をして坐つてゐる。そこへ八戒が汗だく、息せき切つて歸つて来ました。

「お師匠様、どうも遅くなつて相済みません。」

「慌てふためいて、どう致したのぢや。飼葉も何も採つて来ぬではないか。」

「いやどうも面目次第も御座いません。實は悟空に騙されたとは知らず、嘘を申して強飯を貰ひに出かけたんですが、妖怪に圍まれて危ない目に遇ひました。それを兄貴に助けられて、やつと歸つて来たので御座います。」

「お前は何を申してゐる？ 悟空はさつきからずうつとここにゐて、何處にも参りはせんぞ。」

「へえい、そんな筈はないが……ねえ兄貴、確かにお前来てくれたね。」



とても怪訝に堪へぬ顔。悟空たまたま笑ひ出し、ありのままを明しましたので、三蔵も悟浄も腹を抱へて大笑ひです。

「お前が餘り食ひしん坊なもんだから、俺が悪戯してやつたんだ。この埋め合せにお前が先達になつて、この山を通り抜けるやう骨を折つちやどうだ。さうすると大手柄だぜ。」

「兄貴は全く人の悪いことをするよ——だが妖怪どもの腕前も知れたもんだから、一番兄貴のいう通りに、先鋒をうけたまはるとしよう。」

おだてに乗せられ、眞つ先に立つてそこを出立しました。

#### 四 三蔵の贖首

八戒に負かされて洞中に歸つた魔王は、口惜しくてなりません。聞けば八戒よりも強い悟空といふのがゐるとのこと、尋常の勝負では到底敵ひつことがないから、何かうまい計略もがたと、家來に諮つて見ましたところ、一番智慧のあるのが、獻策に及びました。

「では分辦梅花の謀計を用ひたら如何で御座いませう。それは家來の中で變化の巧い三人を大王の姿に變へ、別々のところに待伏せさせて置いて、向うの三人の弟子と戦はせるのです。その間に空中から大王が手を延ばして、三蔵をお捉まへなさいませ。きつと成功致しませう。」

「如何にもこれは妙案ぢや。では早速取りかからせよう。」

腕利きの家來三人を、贖の魔王に變じさせ、山道に遣つて三蔵等の來るのを待たせて置いた。

三蔵の一行はそんなこととは知らずに、山に登つて來ると、道端から第一の贖魔王が飛出て矢庭に先頭の八戒に斬つてかかる。八戒はこれと戦ひながら麓の方へ追ひかけて行つた後へ、第二、第三の影武者が躍り出て悟空と悟浄に挑み、各々離ればなれになつて戦つてゐるうち、本物の大王がそうつと空中から手を延ばし、三蔵を引つつかんで洞内へ引揚げました。

三人はそれぞれ相手の贖魔王を追拂つて歸つて來ると、白馬が悲しげに嘶いてゐるのみで、三蔵の姿が見えないから大狼狽です。

「さあ大變だ！ これはきつと分辦梅花の計略にかかつたに違ひない。一刻も早くお師匠様をお救ひ申さなくちやならん。」

悟空が眞つ先になつて、彼方の谷間に駈付て見ると、石の屏いかめしく「陰霧山連環洞」といふ門札を揚げた洞窟がある。勢込んで突貫して來た八戒は、蠻力を振つて門を揺ぶるので、がたがたゆらゆら、今にも毀れさうな形勢です。

「大王様、一大事で御座います。今度は豚みたいな奴の外に、猿をつくりのがやつて來て、今にも門を破つて飛込んで來るかも知れません。」

「では、いよいよ悟空が攻めて來たのぢやな——家來ども、どう致したものでらう。彼奴に遇つてはとても敵對が出來ないが……」



と、魔王おろおろ聲でみんなに相談を持ちかけると、例の分瓣梅花を獻策した小賢しいのが、シヤシヤリ出た。

「大王、私の智慧で奴等を追ッ拂つてお目にかけます。あんな愚か者をだますのは、わけは御座しませんよ。」

と豫て喰殺した死骸の中から、三藏に似寄つた頭を見付け出し、急いで髪を剃落した上、ぺたぺた血を塗たくつて門口へ持つて來ました。

「唐の豪傑方、さう亂暴せずとまあ一寸私のいふことを聞き給へ。實はうちの大将が君方の師匠を連れて來ると、わけも知らぬ家來どもが、寄つてたかつて喰ひ殺してしまつたんだ。幸ひ頭だけが残つて居たので、今お返しするから持つて歸つて、ゆつくりお葬ひをなさつたがいい。」

ぼーんと頭を投出したので、三人は謀られたとは知らず、勇氣一時に沮喪し、地上に打倒れてわつと慟哭する。

「お師匠様、お情ない姿にられましたなあ。」

「ああ、お悼ましく御座います。後に残つた我々はどう致しませう。」

さすが萬夫不當の勇士も、悲嘆にくれて全く正體がありません。漸くのことで兎に角三藏の首を埋葬しようといふことになり、向うの山陰に持つて行つて、八戒が熊手で掘つた穴に埋め、草花などを供へて懇ろに供養致しました。

しかし何時まで嘆いてゐたところで、三藏が生返る譯もない。悟空は拳固で涙を押拭ひ、憤然として立ち上つた。

「不倶戴天の仇はあの魔王奴だ。是非仇を討つてお師匠様の亡執を晴らさなくてはならんが、兎も角俺はあの洞窟を探つて來るから、お前たちはお墓を守つてゐてくれ。」

と例の通り羽蟻に變じて連環洞に飛び行き、石門の隙間からもぐり込んで見ますと、一人の家來が魔王の前に出て、何やら奏上して居ります。

「申し上げます。大王様、お喜び遊ばすことが御座います。」

「喜びとは何事ぢや、早く申せ。」

「はッ、ただ今裏山の方で泣聲が聞こえましたので、參つて見ますると、三藏の弟子どもが塚の前で泣き悲しんで居りました。多分彼奴等は贖首を本物と思つて、彼處へ埋めて塚を築いたので御座いませう。あの調子ではもう押しかけて來る勇氣もなささうですから御安心あつて、ゆつくり唐の坊主を御賞味になつて宜しからうと存じます。」

「左様か、それはよいことを教へてくれた——では三枚におろして中落ちと頭は荒煮に、脊の肉は刺身に、腿のロースはカツレッツに揚げてくれやれ。」

ひどい王様もあつたもので、料理の指圖までしてゐます。これを聞いた悟空は、さては先刻の



は賢首で、師匠はまだ生きて居られるに違ひない。まごまごしてゐて料理されてしまつては一大事、是非探してお助けしなくてはと、方々飛び廻つた末、やつと蕪所の側の物置に縛られてゐるのを見付けました。

「おお、お師匠様、よく生きてゐて下さいました。」

「悟空か、早く助けておくれ。」

「お静かに、外に聞えろと大變です——私は一寸妖怪どもの様子を見て来て、それからお救ひ致しますら、暫くお待ちなすつて下さい。」

直ぐ座敷の方へ飛んで行つて、例の眠り蟲をこしらへ、魔王以下一同の顔に放してやると、忽ちぐうぐう眠りだし、鼻から提燈を出すもの、だらだら涎を流すもの、全くだらしがありません。悟空はこれを見済すして三藏のところへ飛歸り、本相に戻つた上、繩を解いて助け出し、ともども舊のところへ歸つて来ました。

遠くからこれを見た八戒は、驚いてブルブル。

「わああツ、お師匠様の幽霊だ、迷つておいでになつたツ——」

「馬鹿を言ふな！ 御師匠様は實は殺されてゐなさらなかつたのだ。」

悟空は八戒を叱り付けて置いて、三藏の首と見たのは替玉であつたこと、洞中の魔王等を悉く眠らして来たことなどを物語ると、八戒聞きも終らず、塚から賢首を掘出し、熊手を揮つて粉微

塵に叩き潰したのは亂暴な奴です。

悟空と八戒は、それから再び洞内に行つて見ると、一同相變らずぐうぐう寝込んでゐます。八戒かうなると大威張りで、まつさきに魔王を殴り殺せば、これなん年古りたる豹の精。その他の家來眷屬は、一々手を下して殺すのが面倒なので、柴に火を付けて蒸し焼きにし、眠りながら極樂往生をさせて引揚げました。

この近郷の人々は、永年この妖怪に苦しめられてゐたのですから、全滅と聞いて大喜び。どうぞ私たちの町へ、私の村にもと競ひ合つてもてなさうとするのを、やうやう振切つて出立する。間もなく通りかかつた鳳仙郡では、三年間旱魃で苦しんでゐたのを、悟空の法力で雨を降らせ、次々と善根を施して、いよいよ天竺國の一部なる玉華州に足を入れました。しかし同じ天竺國でも、目的の大雷音寺までは、まだ大分ありますから容易なことぢやありません。



## 天竺玉華州

### 一 三王子が門弟に

一行は日ならず王城の地に入り、三人を旅館に残して置いて、三藏一人宮中に伺候し旅券の査照を願ひ出る。元來この州の王は天竺皇帝の親族に當り、佛道を尊び人民を愛し、名君の聞え高い方ですから、三藏が遙々經を求めに來た由を聞いて、心から感動遊ばされた。

「それは本當に奇特なことぢや。して、大唐國よりここまで何年かかられたな。」

「左様、國を出てから今日まで、十四遍の夏冬を迎へまして御座います。」

「では十四年の長い月日ぢや、嘸かし途中いろいろの目に遇はれたであらうの。そのやうな長旅に、貴僧は一人の從者も連れては來られなかつたのか。」

「いや、三人の弟子を連れて居りますが、宮中には恐れ多いので、旅館に止め置いて御座ります。」

「それは無用な遠慮ぢや——これこれ誰か旅館に遣はして、その三人をここへ招いて參れ。」

お召を受けた悟空等三人は、侍從に導かれて、參内致しましたが、何しろ揃ひも揃つて恐い顔

の男ばかり。國王色を失つて座を立たれようとしたのを、三藏が譯をいつておとどめしたので、漸く安堵遊ばされ、別室に膳部を設けていろいろとおもてなしになります。

この國王には三人の王子があつて、ともに生れつき武張つたことが大好き。この日、異形いぎやうな和尚が來て、父陛下を驚かしたといふ話を聞き、萬一怪しの者ならば、取ツ捉まへて目に物見せてくれんものと、皆が飯を食つてゐるところへ押しかけて來た。

「これこれ、そこの和尚、お前の弟子はあれは人間か妖怪か？ まつすぐに實を申せ。」

「はい、私は唐の三藏と申す出家、三人の門弟は顔形こそ醜みにくく御座いますが、精神は皆立派なもので御座います——したが、我々を訊たづされるあなた方は、一體どなたで御座いますか。」

「うん、わたしたちはこの王子だが、怪しい和尚が來たと聞いて調べに參つたのぢや。」

三人はそれぞれ携へて來た得物を振つて、威勢を示さうとします。大食漢の八戒は最後まで残つて御馳走を食つてゐましたが、この時漸く箸を置いて、

「ははははは、これは面白い。二番目の王子様は熊手をお使ひになりますね。私も同じやうなのを持つてゐますから、一つお目にかかせう。」

と腰にさげた小さな熊手をはづし、ふうつと息をかけて一振り振れば、長さ一丈あまり、西まの市いちにでも行つたら、三四千圓には吹ツかけられさうな大熊手となつたので、驚いた三王子は覺えず、たじたじと後退おとすりをされます。



悟空も、第一王子が棍棒を持つてゐるのを見て、耳の中から例の如意棒を取出し、忽ち長さ一丈五尺餘、ビール瓶ほどの太さに變へ、

「さあ、これをお兄い様に進上しませう、お持ち帰り下さい。」

と、片手でちよいと差出したので、第一王子は走り寄つて持上げようとしたが、一分二厘も動かばこそ。これを見た氣短かな第三王子、かつと痲癩を起し、棒を振廻していきなり悟淨に打ちかかると、發止と受け止めた降妖杖から、忽ち爛々たる光がほとばしり出で、眼が眩んでどうすることも出来ません。

氣を負つた三王子も、ここに至つて遂に閉口頓首。

「我々兄弟みな眼がないので、ついさまざまの失禮を致した。この上はどうか武藝を使つて、我々に見せて下さい。」

誠心面に溢れて懇ろに頼み入ります。悟空悠々と一丈五尺の大鐵棒を取上げ、

「宜しう御座います。ですがここは狭くていけませんから、空中に於て充分なところをお目にかげやせう。」

と、ひよいと五十メートルばかりの低空に飛上り、えいッ！と一聲、氣合をかけて、棒を使ひはじめ。その有様は、「一上一下、右に旋り左に轉じ、さながら黃龍轉身の勢ひ、初めは人と棒と錦上花を添ふるに似、次には人の姿を見ず、ただ一天棒の躍るを見るのみ」といふんだ

から、大したものです。

八戒と悟淨は、しばらく下で見物してゐましたが、たうとう堪らなくなつて同じく空に飛上り、一緒になつて熊手と寶杖を使ひ始めました。この方は「上三下四、左五右六、前七後八、丹鳳朝陽、餓虎撲食の勢ひを示し、ただ見る満天に瑞氣氤氳、金光縹緲として、天將神兵一時に武を演ずるかと思ふ」といつたやうな壯觀。

國王を初め宮中の大官小吏、さては城内の町人百姓男女僧俗、悉くこれを仰いで感嘆措く能はず、拍手喝采の聲は文字通り天に轟くばかりです。三人はいい氣持になつて、半時あまりいろいろな型を演じた上、相携へて空中から下りて來ました。

今まではどの乞食坊主かと、内心蔑すんでゐた宮中の役人どもが、眼のあたりこの奇瑞を見て、がらり應待振が變つたのも實際無理ぢやありません。

## 二 武器を攫はる

三人の王子は心からその妙技に感服し、その場で懇ろに入門の儀を申し込んだ。

「どうかしばらくここに滞在して、我々に武藝の奥義をコーチして行つて下さい。お禮は父上に願つて、お望み通りいくらでも差上げますから……」

「さうですか——私どもは決して謝禮などは戴きませんが、心から稽古になりたいとあらば、お



教へ致しても宜しう御座います。兎に角貴君方に力をお授けしますから、ちよつと此方へいらつしやう。」

悟空は三人を別室に連れて行き、眞言祕密の呪文を唱へながら、ふうつと息を吹ツかけると、いづれも元氣百倍。大喜びで表に立出で、それぞれ如意棒その他を持上げて見れば、さつきは一寸も動かなかつたものが、何の苦もなく振廻せます。

しかし年の若い三人には、このままでは若干目方が重過ぎるやうです。そこで俄かに宮中に鍛錬所を設らへ、三つの武器を見本に、それぞれ斤數の軽いものを作ることになり、召し出だされた鍛冶師は、夜を日について鑄造に取究りました。

さて、この王城の北方七十里、豹頭山虎口洞と呼ぶところに、妖怪の王が住んでゐましたが、ある晩玉華城の方角に煌々たる光を認め、怪しんで飛んで来て見ると、鍛冶工場の中に鐵棒と熊手と寶杖が立て掛けてある。

「ははあ、これがあの光を出したのだな。誰の知らないが、何しろ見事な武器だ。幸ひ四邊に人はなし、兎に角失敬して行かう。」

一纏めにして盗んで行つたのを、翌朝になつて初めてそれと氣付いた鍛冶師、蒼くなつて方々を捜したが見當らない。恐る恐るこの趣を王子に上申すると、王子たちも驚かれたが、仕方がないから打揃つて悟空等の許へ詫びに來ました。

「孫先生、何ともはや申譯のないことが出來しました。昨晩何者かあの工場に忍び込み、先生方の武器が悉く盜まれたのです。役人どもにいひつけて八方捜査致して居りますが、未だに何の手掛りもありません。」

「ふうむ、それは不思議千萬。この宮中は他所からはいれるところでなし、殊に普通の人では動かすことも出來ぬ武器を、三本も一緒に持つて行くとはいへぬ——殿下、これは普通人の仕業ではないと思ひますが、この近所に妖怪の住家は御座いませんか。」

「あります、あります。我々はこれまでついぞ見たことはないが、北方の豹頭山虎口洞に黃獅といふ妖怪がゐると聞いてゐます。」

「さうですか、ちや盜賊はそれに違ひありません。これから私が行つて見て参りませう。」  
如意棒を持たなくては恰好がつかないが、仕方がないから手ぶらで雲に跨がり、豹頭山の麓に行つてみると、山の上から狼のやうな顔をした二人の小者が、何か大聲で話しながらやつて來ます。

「二狼よ、昨夜大將が取つて來た寶物といふのは、とても大したものらしいぜ。今日の御披露會には俺たちにも見せて下さるさうだし、お祝酒も下さるさうだから、暫くぶりうんと飲めるわ

501

「さうだとも。だが一狼兄貴、預つて來た二十兩の金で、みんな豚と羊を買つて歸るのは馬鹿ら



しいから、五兩ばかりくすねて山分けにしようぢやないか。なあに、この頃その物價騰貴だと言やあ、わかりつこはないよ。」

「よからう、よからう。金儲けの上にロハ酒の御馳走か、占め占め。」

これを聞いた悟空、物蔭に待受けてゐて、不動金縛りの法をかければ、二人は忽ち棒のやうに堅くなつて打倒れ、ただ目をばちくりするばかり。これをそのままにして置いて、悟空は急いで王城に歸つて來た。

「八戒に悟淨、俺と一緒に化物退治に行つてくれ——それから陛下にお願ひが御座います。謀事の種に使ふんですから、豚と羊を都合十五頭買ひ求めて下さいませ。」

國王は役人を町に遣はし、直ぐ註文の動物をととのへて與へたので、三人でこれを引ッぱり、雲に乗つて再び小者の倒れてゐるところへ飛んで來ました。

悟空は二人の着物を剝いで、一方は八戒に一方は自分が着た上、容貌體格ともそつくり一狼二狼の姿に變じ、なほ悟淨をば商人風に打扮させて、虎口洞へと立向ふ。金をくすねようとしたばかりに、こんな目に遇ふとは、二人の下郎こそいい面の皮。どこかには何百萬圓と儲けてゐながら、大きな顔をしてゐる政治家が澤山あるのに……。

一同何喰はぬ顔で洞窟に來ると、先刻から黃獅が待ち兼ねてゐます。

「一狼に二狼、戻つて來たか。そして何頭求めて参つたな？」

「はい、豚が八疋で十六兩、羊は七疋で九兩、しめて二十五兩で五兩不足しましたから、その商人を連れて参りました。これでも私等二人が掛け合つて、大分負けて貰つたので御座います。」

「いやそれは御苦勞だつた。ちやその商人を中に入れて、一杯飲ましてやれ。」

してやつたりと三人は洞内にはいつて、四邊をきよるきよる見廻せば、果して一室に三つの武器が飾つてあります。八戒これを見て直ぐ本相を現はし、土足で駆込んで熊手を取出したので、悟空と悟淨も續いて自分たちの得物を奪還し、一度に表へ飛出したから、黃獅先生驚いた。

「泥棒々々、こら貴様たちは一體何者だツ！」

「なにツ、貴様こそ人の物をちよるまかした、こそ泥ぢやないか——唐の豪傑猪剛鬣の熊手を喰つてくたばつてしまへツ。」

八戒を眞先きに三人が打つてかかるを、黃獅は青龍刀で暫くは渡り合つたが、形勢不利と見て東南の方へどんどん逃げ出す。一同長追ひせすに、後に残つて慄へ上つてゐる小化物を鑿殺しにした上、洞内を焼拂つて玉華城に凱旋しました。

黃獅は這々の態で、祖父九靈元聖の住む竹節山盤桓洞に落ち延び、前夜來の一條を物語つて援兵を頼み込みます。

「——折角盗んだものを取返され、その上ひどい目に遇はされて、私は残念でなりません。お祖